

# アルマロスinゼロの使 い魔

蜜柑ブタ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アルマロス in ゼロの使い魔  
エルシャンダイとゼロの使い魔のクロスオーバーです。

アルマロス（本編ラスト後）が、ルイズに召喚されたらどうなるかというものです。  
エルシャンダイのネタバレあり、原作小説の設定も一部参考。  
原作崩壊かも。

アンチ・ヘイトは念のため。

p  
i  
x  
i  
v  
でも連載中。

1

次

プロローグ		目次		次	
第一話	人間を愛する墮天使	—	—	18	1
第二話	墮天使V S 青銅	—	—	44	1
第三話	墮天使とハルケギニアの伝説	—	—	212	1
第四話	喋る剣	—	—	第十三話	第十一話
第五話	土くれ	—	—	第十四話	封印されていた、魔
第六話	舞踏会	—	—	第十五話	墮天使の怒り
第七話	風と水	—	—	第十六話	—
第八話	疾風のワルド	—	—	第十七話	冷たい手
第九話	アルビオン	—	—	第十八話	堕天使とメイド
第十話	亡国と墮天使	—	—	第十九話	宝探し
			275	第二十話	痛み
				第二十一話	削れ行く墮天使の命
					アルマロスの眠り
					墮天使と水の精霊
					墮天使 v s 墮天使
					屍のウエールズ
					—
188	172	151	133	120	98
333	322	305	288	263	250
				242	229
					199

最終話

神の国へ



# プロローグ

太陽も沈みはじめ、青空が青と赤が混じつた夕日の独特的の色へと変わる時間帯。何度も何度も爆発音が響き、風が煙を運ぶという光景が繰り返されていた。

春の使い魔召喚儀式。

トリステイン魔法学院の進級試験で行われる、恒例行事だ。

すでにひとりを除いて、生徒全員が召喚と契約を済ませた。しかし除かれているそのひとりの生徒だけがまだ召喚すらできていなかつた。

その生徒の名は、ルイズ。

なぜか魔法を使うと爆発するという失敗をしてしまう特異な存在で、基本的な魔法すら使えないことから魔法成功率ゼロ、ゼロのルイズという不名誉な二つ名をつけられてしまつた高名な貴族の令嬢である。

すでに数えるのも億劫になるほどの爆発で、彼女の体は煤だらけ、口からケホリツと煙を吐いてついに膝をついた。

「ミス・ヴァリエール。今日のところはここまでにしましよう。」

見かねた教師コルベールが彼女にそう言つた。

「いいえ！　もう少し、もう少しだけ！　やらせてください！」

しかしルイズは、ボロボロで疲れ切つてゐるにも関わらず声を張り上げた。

誰が見てもルイズが限界であることは分かる。失敗ばかりのルイズに野次を飛ばすのも飽きてしまつたルイズをゼロと見下す同級生達ですら、ルイズの痛々しい姿と諦めの悪さと根性にはからかう言葉すら出せなかつた。

コルベールは、ルイズのいまだ折れぬ意思を宿した目に射抜かれ、仕方なくあと一回だけだと許可を出した。

ルイズは、最後のチャンスに残つた力をすべて集中させる。

体中が痛むし、口の中は砂利や煤で今すぐうがいをしたいぐらいだ。

だが彼女は諦めない。

彼女が高貴な家系で生まれたにも関わらず、その名に傷をつけてしまうような落ちこぼれを挽回したいという彼女のプライドが彼女を動かしていた。

メイジ主義社会において、魔法がろくに仕えないメイジは、下手をすると平民よりも立場が悪くなる。

実際、ルイズは、魔法が成功した試しがないために、実家の平民の使用人すら陰口を言われたことすらある。

負けたくない。

十代半ばの少女が背負つた名家の令嬢という肩書と、メイジの血筋でありながら魔法を成功させたことがない自分を見下し馬鹿にしてきた奴らをギヤフンと言わせてやりたい。

そのために努力してきた、成績も首席である。しかし魔法が使えない、たつたそれだけですべての努力を認めてもらえない。  
だからルイズは、なんとしても進級試験のサモンサーヴァントを成功させたかったのだ。

「宇宙の果てのどこかにいる、私の下僕よ！　強く、美しく、そして生命力に溢れた使い魔よ！　私は心より求め、訴えるわ。我が導きに応えなさい！」

ルイズは、最後の力を振り絞つてサモンサーヴァントの呪文を唱えた。  
そして爆発が起こった。

試験が始まつてから一番の爆発だつた。

やはり駄目だつたかという空気が場を支配する。

ルイズは、ついに両手を地面について頃垂れた。  
もう限界だつた。

やはり自分は、ゼロのままなのか。

疲労によりルイズの心は、挫けそうになつていた。

もうもうとあがる煙。

大きな煙の中から、何かがゆらりと動いた。

巨大な……、何かが。

「ミス・ヴァリエール！ 逃げるんだ！」

氣付いたコルベールが叫んだ時。

煙の壁を破つて黒い巨体がルイズに向かつて倒れてきた。

ルイズは、顔を上げて、呆けたように口を開けて倒れてくる巨体を見上げていた。精神も肉体も酷使した彼女は、状況を全く把握できていなかつた。

コルベールが素早く魔法を使おうとしたが、放つた魔法はなぜかルイズに当たる直前で消え失せてしまつた。

驚愕するコルベールをよそに、動けないルイズの上に黒い巨体が倒れこんだ。

地響きが起こり、呆気にとられていた他の生徒達が我に返つて騒ぎ始めた。

「ゼロのルイズが潰されちまつたぞ！」

「なんなんだあれは!?」

生徒達は、ルイズが召喚したと思われる巨大な何かを見て混乱した。

表面は、黒く、ゴーレムのように見えるが、ところどころ欠けており、手と思われる

部分は肘あたりでもげてしまつてゐる。

頭部の欠損が一番酷く恐らく口のような形をしていたと思われるその部分は上顎がなくなり下顎だけで、あと太い尾が生物的な印象を与える。

あれがゴーレムだとすぐに判断できない理由は、ところどころ欠けた部分ともげてしまつた腕の部分からまるで水を連想させるような鮮やかな青い組織が輝いていたからだ。

一方、召喚した黒い何かに押し潰されたかに思われたルイズだが、ルイズは、無事だつた。

倒れてきた巨体が膝を曲げた状態で前のめりに頭から地面に倒れて、下顎が地面に刺さり、結果この黒い巨体の上半身と地面の隙間ができる、小柄なルイズは潰されずにすんだのだ。

召喚に成功したこととか、召喚したモノに危うく潰されかけたことよりも、ルイズは、言葉を失つてしまうものを見て硬直していた。

鈍い黒い色に染まつたゴーレムのようなそれの胸のあたりだろうか。

そこにぽかりと開いた丸い穴の中から、人間の顔と上半身の一部がちようどルイズの目の前に見える状態になつていたのだ。

穴の中の人間は、灰色の癖の強い長い髪の毛も、引き締まつた頬とぱつてりした鼻、優しげなラクダ目は、固く閉じられており、まるで彫刻のように精気が感じられない。

使い魔召喚儀式は、召喚した物と口づけを交わすコントラクトサーヴァントという魔法を使い使い魔のルーンを刻むまでが儀式だ。

ルイズの前の前に見えているこの人間の男性⋮と思われる部分が、この巨大な物体の本体なのだろうか？

正体不明のこの物体と使い魔の契約を結ばなければならないのか。

ルイズは、落ち着いてきたため、冷静に状況を理解しつつあつた。

そもそも⋮、彼は⋮、生きているのだろうか？

ルイズが見る限りでは、黒い巨体に埋め込まれている彼は、呼吸をしているように見えない。

動ける範囲で首を動かして見ると、彼が埋め込まれているこの黒い巨大な物体も傷ついている。傷口から見える鮮やかな青さは、とてもゴーレムのものとは思えなかつた。その時、ルイズの耳に微かなうめき声が聞こえた。驚いて生気のない男の方に向けると、さつきまでピクリとも動く気配がなかつた彼が、苦しそうに顔を歪めか細いうめき声を漏らしていた。

生きてている。彼は、死んでいない。

ルイズは、そのことになぜか酷く安堵した。

『フオウウ……オオオオ……。』

聞いたことがない高い音がにぶい灰色の唇から発せられている。

彼は、苦しんでいる。

そして、彼の苦しみに反応したかのように彼が埋め込まれていた黒い巨体がブスブスと煙を出しながら崩れ始めた。

ああ、このままでは、いけない！

ルイズは、彼が死に向かつて、いや死よりももつと辛い方へ向かつていることを本能的に理解した。

助けなければ！

ルイズの頭に、儀式を成功させるという考えは消え失せていた。ただ、彼を助けたい。

それだけを考えた。

だがどうやつて助ければいいかまではまつたく考えられなかつたが体が咄嗟に動いた。

ルイズは、彼の顔に手を伸ばした。

触れた彼の頬は、氷のように冷たく、温かさがまるでなかつた。

そんなことなど些細なことだと気にせず、ルイズは、彼の口に自らの唇を重ねた。

その時、とてつもない白い光が黒い巨体を包み込んだ。

ルイズに向かつて倒れた黒い巨体が煙を出しながら崩れ始め、それからすぐに儀式の場所を眩しく照らす強い光が黒い巨体を包み込んだ。

あまりの眩しさに同級生達もコルベールも腕で光を遮り、目を閉じざるを得なかつた。

ややあつて光が治まつていき、巨体に潰されたかと思われたルイズが無事だつたことが分かつた。

コルベールが慌てて彼女に駆け寄ると、ルイズが呆然と見つめる先にある、徐々に小さくなつていく光をコルベールは目で追つた。

光はやがて球体となり、その中に、ひとりの長い髪の毛の男が胎児のように体を丸めていた。

光がゆつくりと地面に降りると、光は、消え、男は、ゆつくりと地面に横たわつた。

男の体は、人間と変わらない造形であつたが、違う部分は、首の後ろの背中辺りに、尻尾のような黒くて長いものがあることだけだ。

尻尾みたいなものを抜けば、無駄のない美しい筋肉の人間の裸体なのだが、体つきは一見男性のように見えて、性別を判別する性器らしきものがなかつた。

横たわった男の様子を見ていると、次の瞬間、黒いオーラのようなものがどこからともなく出てきて男の体に絡みつき、男の体を覆う黒い鎧へと変わった。

指を覆うものと、鎧の隙間には、ほんのり青い色が覗いている。下地だろうか？  
この鎧は、肉体と同化しているのだろうか、鎧の左手と右胸に、ルーンが淡い光を発していた。

「これは…、珍しいルーンですね。」

コルベールは、一応ルーンの形をメモした。

ルイズは、地面にへたり込んだまま、倒れている青年を見つめていた。

癖の強いアシッドグレイの長い髪の毛、長い髪の毛を何本もの束にまとめるため先端や頭頂部などにシンプルな金色の髪飾りがあり、キュルケよりも濃い褐色の肌、厚い唇、引き締まつた頬、優しげなラクダ目。

いまだ閉じられたままの瞼には、長い睫毛がある。

ルイズが男の顔を見ていると、男の瞼がピクピクと動いた。どうやら目を覚ましそうだ。

そして次の瞬間、カツと瞼をあげた男は、飛び上がるよう上体を起こしてかなり慌てた様子で周りを見回した。

「お、落ち着いて…、大丈夫だから。」

ルイズが声をかけると、男はルイズの方を見た。

ルイズは、ハツと息を飲んだ。

男の両目は、鮮やかな海の青さをそのまま再現したかのように美しい青い色をしていたのだ。

「きれい……。」

ルイズは、無意識にそう口に出していた。

男は、きよとんとした顔をした。

「あ、あの、ミスター。」

コルベールが慌てて声をかけた。

男がコルベールの方を見た。

「私の言葉が分かりますか？」

「……」

コルベールの言葉に、男は困った顔をした。

「その様子ですと、私共の言葉は理解できているようですね？　使い魔のルーンも刻まれて、どうやら無事にコントラクトサーヴァントは成功したみたいですよ、ミス・ヴァリエール。」

コルベールは、地面に座り込んだままのルイズにそう言つた。

それからコルベールは、男に向かつて次の質問をした。

「喋れないのですか？」

質問を聞き、男は頷いた。

そして自分の喉を指さして。

「フオオオオオオオオ…。」

つという、独特の甲高い音を口から発した。

コルベールも、ルイズも、その声を聞いてびっくりしたため一瞬体が跳ねてしまつた。

「その声しか出せないんですか？」

男は、頷いた。

コルベールは、腕組をして少し考えた。

言葉を理解できるなら、筆談などの別の手段でコミュニケーションを取ることは可能だ。

しかしこの正体不明の男に文字を書く能力があるのかどうかという疑問が湧いた。

するとコルベールの考えを読んだかのように、男は、地面に指で字を書いて見せた。

ハルケギニアの文字だ。

『字は、書ける』。そう書かれていた。

コルベールは、それを知つて安堵した。筆談は可能なら、あとは、ルイズとの交流を

積み重ねて筆談なしで意思の疎通ができるようなればいいと考えたからだ。

すると男が、立ち上がった。立ち上がってみると、まあ中々に長身である。

その立ち姿から、彼が何かしらの武術の達人であることをコルベールは見抜いた。

男は、いまだに地面にへたり込んでいるルイズに手を差し出した。

ルイズは、導かれるままその手を握り立たせてもらつた。

小柄なルイズと並ぶと、その身長差はすごいことになつてゐる。

「ねえ…、あなたの名前…、なんていうの？」

ルイズは、たどたどしく尋ねると、男は、ルイズの掌に指で字を書いた。

「ア…、ル…、マ…、ロ…、ス？ アルマロスって言うの？」

男は、頷き、柔らかい微笑みを浮かべた。ルイズの手を握る彼の手は、まるで水のようにひんやりとしていて冷たいが、ルイズの小さな手の扱い方は本当に優しいものだつた。

ひんやりした冷たい手とは裏腹に、とても暖かい彼の仕草に、ルイズは、ボツと顔を赤くした。

ルイズの様子を見て、アルマロスは、分からぬのか、首を傾げた。

ハルゲニアのある宇宙とは、別の宇宙で人間に憧れて、神に背き、墮天した天使達が

いた。

アルマロスもそのひとりであつた。

グレゴリと呼ばれる下級天使だつた墮天使達は、墮天に成功はするが大きなダメージを受けたため一気に老化したり、アルマロスのように声を失つたりしたが、冥界の王ベリアルと契約を結び、生命維持装置としてウォツチャースーツを手に入れた。

冥王ベリアルとの契約で、墮天使達は、肉体が滅んだ時、その魂をベリアルに奪われなければな無くなつた。しかし彼らはそれを恐れはしても、それを上回る理想と覚悟があつたので墮天したこと、ベリアルと契約したことにも後悔はなかつた。

そして自分達を崇拜する人間達を共にタワーに住み、それぞれが憧れた人間の魅力を実現した理想の世界を形成していくつた。

その過程で人間との交わりにより、ネフイリムという呪われた存在がたくさん生まれることとなつた。

禁忌の存在であるネフイリムは、共食いをし、やがて炎のネフイリムになつて地上を焼き払うほどの脅威となつてしまふ。

そこで神は、洪水計画によつて炎のネフイリムを地上に生きる者達もろとも駆除しようとしたのだ。

人間でありながら神の国の書記官として召し上げられたイーノックが、地上の洪水計

画を阻止するために墮天使束縛の任につき、アルマロスを含むすべての墮天使達が永遠の牢獄に繋がれたはずだつた。

アルマロスは、かなり遅れて墮天した時、不幸にもタワーに向かつて墜落した。そこでネザー化したアラキエルが身を徹して彼を受け止めたため、地上に衝突することは防げた。結果アラキエルは死亡し、その魂は彼のネフイリムに取り込まれ、アルマロスが管理することになる階層の水の中で水のネフイリムとして存在することになり、死ねばベリアルに魂を奪われることを警戒していた墮天使達に、ネフイリムに魂を預ければベリアルに魂を奪われずに済むという対策を知るに至つた。

そのおかげか、墮天使達の中で比較的ダメージが少なく（それでも声を失つたが）、生命維持装置であるウォツチャースーツを脱いでも多少は活動できた。

アルマロスは、墮天したものの純粹に人間を愛し、人間同士の友情に憧れていた。だから墮天したことで敵同士となつてもイーノツクのことを親友として見ていた。

イーノツクがイシュタールの骨を求めて冥界に下りた時は、イーノツクを現世へ戻すための死者の腕を使い冥界の王ベリアルの目を搔い潜つて彼を助けたりしている。

なのでアルマロスが管理する階層にイーノツクが来た際には、露出が多い踊り子の恵好をして派手なステージで彼を出迎えた。さすがに戦う時はウォツチャースーツを着込まなければならなかつたが…、アルマロスは、ウォツチャースーツが苦手だつた。

そう言う意味では、墮天した天使勢の中で、アルマロスは、一番の変わり者だつたと言えるかもしない。

アルマロスは、人間に憧れるきつかけとなつたイーノツクを第一に考えていた。だから冥界に誘拐されたナンナという人間の少女を救うために危険を承知で冥界の最下層まで飛び込んでいつたイーノツクを救いに行くために、イーノツクと旅路を共にする大天使ルシフェルに言われるまま冥界に下りた。

そしてベリアルの闇の力に侵されたイーノツクを救うために命を懸けて戦い、闇の呪縛から解放もした。

しかし怒つたベリアルに捕まり、更にアルマロスにイーノツクを助けるように仕向けて大天使ルシフェルによつて冥界に置き去りにされ闇に飲み込まれてしまつた。（この件については、今までグレゴリの天使達が墮天するのを時間操作で阻止していたルシフェルが、今まで参加しなかつたアルマロスに邪魔をされてしまい墮天を許してしまつたのが関係しているとかしてないとか？）

そして、色々とあつたが、復活したイーノツクの前に再び現れたアルマロスは、もはやアルマロスではなくなつていた。

ネザー化。それは、墮天使が墮天使になる時に、たつた一回だけ使える最後の手段。これを使えばせつかく手に入れた人間の肉体を失い、怪物の姿に変り果ててしまう。

ベリアルの闇と冥界の瘴気によつて強化されたネザーとなつたアルマロスは、ベリアルの手先にされ、ベリアルに見限られたアザゼルにとどめをさし、イーノツクと戦つた。他の墮天使達とネザー化しても意識はしつかりあつた他の墮天使と違ひ、冥界の底で闇にどっぷり漬かつてしまつたアルマロスの心は、消えかけていた。イーノツクの旅路を補佐してきたアークエンジエル達が諦めろと言うほど手遅れな状態だつた。

そんな状態のアルマロスがイーノツクを見て、望んだのは。

イーノツクに自分を倒してもらい、闇の束縛から解放してもらうことだつた。

そして、望み通りイーノツクに倒され、浄化されて消えていく最中アルマロスは、正氣を取り戻し、失つた声で、口の形で、イーノツクに伝えた。

『ありがとう』と。

そしてアルマロスは、他の墮天使同様に永遠の牢獄に送られたはずだつた。  
しかし牢獄に送られる途中で七色の鏡が出現したのだ。

肉体を破壊されてから送られてきたアルマロスがそれを回避することができるはずがなく、そもそも鏡があつたことすら知らないまま、彼は鏡の向こう側にある別世界へ召喚されることとなつた。

ルイズという少女によつて召喚されたアルマロスは、なぜか倒される直前だつたネザー体のままだつた。

アルマロスを創造した神も、墮天使た後生命維持装置としてウォツチャースーツを与えたベリアルもいない別世界で、下級天使でしかないアルマロスが存在を保てるはずがない、このまま崩れて消滅するしかない状態だつた。

それをルイズが救つた。

ルイズが口づけをした瞬間、アルマロスは、ハルゲニアに存在する二つの大きな力によつてこの世に存在することを許されたのだ。

左手と、右胸にあるルーン。

それは、ブリミルの使い魔である伝説のガンダルーヴと、名前さえ語り継がれていな  
い四人目のブリミルの使い魔だとされる名前を言うのも憚れると歌に詠まれる、リーヴ  
スラシルのルーンだつた。

これが、別の世界で人間に憧れて墮天使となつた天使と、ゼロの二つ名を持つ人間の  
少女の物語の始まりであつた。

# 第一話　人間を愛する堕天使

ルイズがアルマロスを召喚し、契約を終えたことで、恐らく学院史上一番長かつた進級試験が終わりを告げた。

ルイズの同級生達は、ルイズをからかいながら空を飛んで学院に戻つて行つた。  
悔しがるルイズと、ルイズの同級生達が魔法を使つて飛行していく光景を見て目をぱちくりさせるアルマロス。

そして何か言いたげにルイズの方を見た。

「何よ…。飛ばないのかつて言いたいわけ？」

アルマロスが言葉が喋れないだけに目線と雰囲気でそう伝えてくるのが分かつて、ルイズは、言葉で言われるよりも辛く感じた。

「きよ、今日は、あんたを召喚するのに疲れたの。だからもう魔法は使えないから歩くわよ、いいわね？」

苦しい言い訳をしたが、アルマロスは、素直に頷いた。彼にとつてルイズが他の生徒のように飛んでいかないことについてはそこまで気にすることじやなかつたらしい。

身長差があるぶん、歩幅も違うのだが、アルマロスは、ルイズの歩調に合わせて歩いた。

意外と紳士なのね？ つとルイズは、思った。

そしてルイズはアルマロスを連れて、学院の寮にある自分の部屋に戻ってきた。

部屋に入つて扉の鍵をかけたルイズは、あらためてアルマロスをじつくり見た。  
見たこともない禍々しい気を感じさせる奇妙な黒い鎧。指先まで覆い、鎧の隙間から  
見える青い色は、肌着だらうか？

首の後ろの背中から延びている尻尾のようなものはなんなのか？

鎧はまるでアルマロスの体と同化しているかのようにピッタリなのだが、それでも彼の体形はよく分かる。

手足は長くしなやかで、腰も綺麗にくびれている。鎧を着ているのに無駄がない見事に鍛えられた肉体であることは、まだ十代と年若いルイズでも分かるほどだ。

そして普通に立っている立ち姿もまた、アルマロスが素人でないことを物語つている。

名家の令嬢として生まれたルイズは、何人の腕の立つ武人を見てきたし、達人と呼ばれるほどの人物を目にしたことだつてある。

アルマロスは、一見若いが、人生を武に捧げてきた達人が持つ美しい姿勢をしていた。

召喚した時に見た、あの黒い巨体に埋め込まれるような形になつていた姿もだが、ルイズは、ますますアルマロスが何者なのか分からなくなつた。

ルイズは、唾を飲み込み、表情を引き締めてアルマロスに直接聞くことにした。勉強机に置いてあつたノートと筆を渡し。

「ねえ、アルマロス。あなたは、いつたい何者なの？」

言葉を喋ることができないらしいアルマロスに筆談で彼自身のことを聞いた。

アルマロスは、少し困った顔をして、それでいて切ない小さな笑みを浮かべてノートに字を書き始めた。

そして書き終えるとノートをルイズに見せた。

『ボクは、かつて神に仕える天使だつたけれど、神の意思に背き、人間と共に生きたいと願つて墮天した。』

文字を読んだルイズは、目を見開いて、ノートの字とアルマロスを交互に見た。

墮天使。ルイズが住むこの世界でも良い意味をもたないその言葉。

一目見た限りでは、人間に見えるが、元が天使で、しかも墮天使となれば浮世離れした雰囲気を持つ理由に合点がいく。

しかし、アルマロスは、ルイズが書物で読んだり、イメージする墮天使とはまるで別物だつた。

黒い翼があるわけでもなく、神に背いた邪悪な精神を持つて いるようにも見えない。海の青さと同じ瞳は、どこまでも澄み切つており、子供のような無垢な純粋ささえ感じ取れるような気がするほどだ。

「墮天使つて…、嘘でしょ？」

ルイズは、口の端をひくつかせながら、アルマロスがまつたく墮天使に見えないこと を言葉に込めて言つた。

だがアルマロスは、首を横に振つた。

そしてノートにスラスラと筆を走らせ、書いた文章をルイズに見せた。

『背中の尾のようなものがあるでしょ？ これは、天使の翼の残骸なんだよ。ボクは、墮天した時に負つた傷で声を無くした。』

アルマロスの背中にある不自然な尻尾のようなものが、天使の翼があつたことの名残で、墮天した代償に言葉を喋ることができなくなつたことをアルマロスは、文字で語つた。

「そこまでして墮天するつて。どうして？ そんなに気に入らないことが…、つ。」

言いかけてルイズは、ハツとした。

最初に文字で語られた内容に、人間と共に生きたいと願つて墮天したという理由が記されていていたことを思い出したからだ。

天使が神に背いてまで、人間と生きていきたいから神を裏切るなんてことがあるのか？

天使のような高貴で人間などとは比べ物にならない強い存在が、脆弱な人間と生きたいと思う理由は？

『人間は、素晴らしい種族だよ。天使はない、無限の可能性を秘めていた。ボクらは、人間に憧れた。人間の肉体を手に入れるために墮天し、大きな傷を負つたり、老化したりもした。けれど人間と同じ存在になれるなら、そんなことは些細なことだつたんだ。』

迷うことなくスラスラと字を書いて、ルイズに自分の意思や墮天した理由などを伝えるアルマロスの表情は明るい。本当に墮天使に見えない。

ルイズは、頭が追いつけなくなつてきていた。

ひたむきに弱い人間が持つていて天使にはなかつた無限の可能性というもののために、不便な人間の肉体を得て、しかも代償に癒えることのない大怪我をしたり、急激に老化したりするなんて、正気の沙汰じないとルイズは、思つた。

天使がそこまで魅了されるほどの魅力が、人間なんかにあるのか？

ルイズの頭に沢山の疑問が浮かんでくる。

ルイズは、貴族だ。それも王家との関係が深いヴァリエール家という超名家だ。

だからこそ、人間の悪い部分を嫌と言うほど見てきた。

貴族は、魔法が使えるか使えないかだけで平民を見下し、意味もなく殺すことだつて少くない。

上級の貴族が下級の貴族を虐げることさえ少くない。

落ちぶれた貴族が野盗に身を落とし、あらゆる犯罪に手を染めることだつてある。

平民同士でも争いはある。

名家の令嬢でありますながら、魔法成功率ゼロであるために疎まれ見下されるルイズは、人間の悪意に晒されてきたから分かる。

人間は、醜い。

とてもじやないが、アルマロスのような純粹な天使が墮天してまで、共に生きたいと願うほどの魅力があるとは思えなかつた。

アルマロスは、恐らくこの世界の天使（墮天使）ではないのだろう。

もしそうなら、ひたむきに人間を愛する彼が、人間と共に生きたいからという理由で神に背くはずがない。

本当に異世界の墮天使なのだとしたら、ハルゲニアの人間の在り方を見たら、きっと失望するに決まつている。

ルイズは、知らず知らずのうちに拳を握りしめ俯いて、涙を零していた。

彼を穢したくない、失望させたくない。

だつて、アルマロスは、こんなにも優しくて純粹で美しいのだから。

なぜ自分は、人を愛するあまりに堕天したこの天使を、この醜い世界に召喚してしまつたのだろう。

「うう～～つ」

「！ フオオン？」

急に泣き出したルイズを見てアルマロスは、びっくりしてオロオロとした。

「ごめんなさい。私みたいなのがあなたを召喚するなんて、身の程知らずにも程があるわよね……」

幼い子供のようにグズグズと泣くルイズを撫でたり、優しく抱きしめたりして慰めようとしているアルマロスは、ルイズの言葉を聞いて、えつ？ つという顔をした。

神に背き墮天という禁忌を犯した自分を召喚したのが、どうして身の程知らずになるのかまつたく分からなかつた。

アルマロスは、ルイズから手を離して、素早くノートに字を書いて。

『ボクは、汚らわしいよ。』

つと、自分が神を裏切り永遠の牢獄に繋がれるだけの穢れた存在であることを伝えようとした。

「そんなこと言わないでよ——！」

「フォーンツ!?」

しかし否定されたあげく、ルイズは、大泣きし始めてしまった。アルマロスは、ただ戸惑うことしかできなかつた。

その後、泣きつかれたルイズは、ベットでそのまま眠り、ルイズに布団をかけてあげながら、アルマロスは、ため息を吐いた。

アルマロスは、部屋の窓を見た。

二つの月が夜空に輝いている。

アルマロスが知る月は、ひとつしかなかつたはずだ。

元下級天使とはいえ、高次元のエネルギーの塊である種族に属するアルマロスは、あの草原で目を覚ました時から、すでに気付いていた。

この世界が、自分がいた世界とは全く違う理からなる世界であることを。

つまり自分は、異物だ。

自分の創造主である神も、墮天してから生命維持のために契約を結んだ冥王ベリアルもいない世界なのでアルマロスという存在を保つことはできない。

なのに自分は、今こうしてここにいる。物に触ることも、ルイズと意思の疎通（筆談）をすることもできる。

ネザー化した体は、人の形に戻り、苦手なウォツチャースーツも傷一つない。

アルマロスは、右胸と左手の甲にあるルーンに指で触れた。

ルイズ達の言葉を聞く限りでは、これは召喚した使い魔に刻まれる印であるらしい。

この二つの小さな印が異世界の堕天使である自分の存在をこの世界に固定化させているのだろうか？

アザゼルなら分かるかもしれないが、残念ながら彼はいないし、他の堕天使もいない。  
もちろん、大天使長ルシフェルや他のアークエンジェルもない。

アルマロスの身に起こつた現象を解明できる者はいない。アルマロスは、困つたと肩を落とした。

数分後、過ぎたことは仕方ない、悩んでも仕方ないと気を取り直したアルマロスは、ルイズが寝ているベッドを背もたれにして、床に座り、体操座りの体制で目を閉じた。

\*\*\*

翌朝。

ルイズは、布団の中でモゾモゾと動いて、微かなうめき声を漏らした。

「…うー、あれ？ なんで制服のまま寝ちゃってるのかしら？」

目をこすり、起き上がろうと足を動かした途端、何かを蹴つてしまい、『フオっ！』つ  
という独特な高い声が聞こえた。

驚いて上体を起こすと、金色の髪止めをつけたアシッドグレイの頭を摩る褐色の肌の  
男がいた。

「誰つ？ …つて、あ……。」

ルイズは、焦つたがすぐに思い出した。

ベットに背を預けていたため、ベットの端に寄つていたルイズに頭を蹴られてしまつ  
た男は、昨日の使い魔召喚儀式で召喚した墮天使アルマロスだ。

自分が召喚したのに起き抜けにいきなり誰呼ばわりするなんて、とんでもない馬鹿だ  
と、ルイズはベットにふさぎ込んで枕に顔を押し付けた。

「フウウオオン？」

アルマロスが立ち上がり、ルイズを心配して声をかけた。だが言葉が喋れないと独  
特の甲高い声しか出ない。

「本当にごめんなさい…。」

枕に顔を押し付けたままルイズは、消えそうな声で謝った。

アルマロスは、なぜ謝られたのか分からず首を傾げた。

アルマロスは、ルイズが学業の身であることを理解しているので、このまま寝かせておいてはいけないと思い、ルイズの肩に触れて優しく揺さぶった。

「うう……。ハツ！ 大変、遅刻しちゃう！」

起きるのを渋るルイズだつたが、今日は授業がある日だつたことを思いだし飛び起きた。

ルイズが起きてくれたので、アルマロスは、よかつたと安心した顔をした。

慌てて着替えようとしたルイズだつたが、ボタンを外そうとして急に止まつた。  
そしてちらりと後方にいるアルマロスを見る。

ルイズは、アルマロスを召喚し、彼があの黒い巨大な物体から今の姿に変わるまでのことを思い出そうとした。

あの禍々しい黒い鎧を纏うまでの短い時間だつたが、アルマロスの裸体をルイズは見ている。

……男と女を区別する生殖器がなかつたような気がする。

かといつてアルマロスの体格は、女性のように丸みがあるわけじやなく、むしろ人間の男性と変わらない形をしていた。

鍛えられた胸筋の膨らみは確認できるが、女性の脂肪の乳房かと言わいたら絶対違う

と断言できる。

そういえば天使というのは、様々な形でイメージされ、描かれ、形作られている。美術品や本に描かれる姿は、背中の翼は共通しているが、女性であつたり、赤ん坊であつたり、男性だつたり、どちらともとれない中性的な姿だつたりと様々だ。

天使の性別について真剣に考えたことなどなかつたが、ルイズの記憶にあるアルマロスの体からするに、恐らく性別の概念というものが無いのかも知れない。つまり生殖器がない。生殖による繁殖をしない。無性。

ルイズは、そう頭の中で答えを出した。

一方アルマロスは、ルイズが止まつて、こちらをジツと見てるので、どうしたんだろうという顔をして立っていた。

……年頃の娘が目の前で着替えようとしていても気にしてない様子なので、アルマロスは、無性（子孫を残そうという生物的本能からくる羞恥心がない）であるというルイズが出した答えは本当みたいだ。

だがそれを確信したとて、気になるものは気になる。

ましてや相手は、人間を愛するあまりに墮天した天使なのだ。今だつて、ほら、外見は大きいのに子供みたいな表情をしている。

神の背いた悪であるはずなのに、信じられないくらい清らかだ。

ルイズは、頼まれてもないのにハルゲニアの人間代表みたいな重たい重大な役割を無意識に己に架してしまつており、アルマロスに失望されるのを恐れていた。

だからルイズは、事前にメモしていた使い魔の躰をアルマロスに強要しないし、昨晩からアルマロスを召喚してしまつたことを謝罪して泣いたりしているのだ。

どう動けばいいのか分からず固まつて いるルイズを見ていたアルマロスは、ルイズが年頃の少女であることを認識し、そういうことかと納得したように手をポンと叩いて、素早く部屋から出て行つた。

「えっ、ちょ……、そういう意味じやなかつたんだけど……。うう……」

アルマロスが気を利かせてルイズの着替えを見ないように部屋を出でていつたので、ルイズは、しまつたと思ひ重いため息を吐いて、着替えをした。

一方、部屋を出て後ろ手で扉を静かに閉めたアルマロスは、二つの気配を感じ、そちらを見た。

数メートル先にいたのは、鮮やかな赤毛と褐色の肌の少女であつた。

少女というには、かなり発育が進み過ぎて いるようでも今にも制服がはち切れそうな巨乳だつた。小柄でほつそりとしたルイズとはまるで対照的だという印象を持つた。

もうひとつ 気配は、赤毛のその少女の足元にいる、かなり大きな火トカゲ……、サ

ラマンダーだ。彼女の使い魔だろう。

「あら、あなたは……確かに、あの黒いゴーレムが変化した人ね？」

黒いゴーレムとは、恐らくネザー化したあの姿のことを言っているのだろうとアルマロスは、すぐに理解した。

赤毛の少女は、ジロジロとアルマロスを上から下まで見る。

「人間じや……、ないわね。」

僅かに警戒の色を帯びた少女の表情と言葉を聞き、アルマロスは、頷いた。

「不思議ね。あなたが着ているその鎧、悪い気配を感じるのに、それを身につけてるあなたは、すごく澄んだ目をしてる。ルイズは……あの子、いつたい何を呼んじやつたのかしら？」

赤毛の少女の言葉を聞いて、アルマロスは、自分の掌に字を書いて自分のことを伝えようとした時、ルイズの部屋の扉が開いた。

「ちょ、ちょっと、キユルケ！ 何やつてるのよ！」

ルイズは、赤毛の少女の存在に気付くなり、慌ててアルマロスの腕を掴んで引っ張り、彼女から距離を取つた。

「ねー、ルイズ。この人いつたい何者なの？ 人間じやないのは分かるんだけど。」「そ、それは……、あんたに説明する義理はないわよ！」

彼が堕天使だと知れたらまずいのでルイズは、必死だ。

「ケチねー。あんまりカリカリしてると、発展途上の胸がますます育たないわよ？」

「黙りなさい！ それとこれとは別でしょ！」

ルイズをからかうキルケと呼ばれた赤毛の少女と、敵意をむき出しギヤーギヤー言うルイズ。

アルマロスが、二人の言い合いが終わるまで待つてると、足に温かいものが当たった。見ると、キルケのサラマンダーがアルマロスにすり寄つてきていた。

キルケと甘えるような鳴き声をあげ、何か期待するようにアルマロスを見上げるサラマンダー。

アルマロスは、微笑み、かがんでサラマンダーの頭を撫でた。撫でられたサラマンダーは、気持ちよさそうに目を細めて鳴いた。

「あら、フレイムつたら、その人のこと気に入っちゃつたの？」

「ウソつ!? サラマンダーが懐くつて……、なにやつたの!？」

詰め寄つてきたルイズに、アルマロスは、何もしてないと手を振つて意思表示をした。

正直なところ、アルマロスは、サラマンダーに懐かれてちよつと微妙な気分だつた。

まだルイズに見せていないが、アルマロスは、水を操る能力があり、火属性のサラマンダーとは相性が悪いはずなのだが……。

「せめて名前くらい教えてくれたつていいでしょ？」

なおアルマロスのことを知りたがるキュルケに、アルマロスは、ルイズが動く前に目にも留まらぬ速さでキュルケの傍へ移動し、彼女の手を取つて、その掌に字を書いた。

「あ…、るまろす。アルマロスっていうの？ 私は、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。キュルケって呼んでもらつていいですわ。」

アルマロスの素早さに驚いたが、すぐ平静を取り戻したキュルケは、アルマロスの名前を覚えると、妖艶な微笑みと共にそう自己紹介した。

アルマロスは、困つたと笑みを浮かべた。

そのアルマロスの様子を見て訝しんだキュルケは、理由を聞こうとしたが、アルマロスはルイズに腕を引っ張られて引き離された。

「あのね！ この…、その…、アルマロスはね、言葉が喋れないのよ。」

「フウオオオオ。」

「…つて感じの声しか出ないの。」

小柄で細身ながらかなり強い力でアルマロスを引っ張つてキュルケから引き離したルイズが、キュルケを睨みながらややしどろもどろしながら説明すると、アルマロスがそれに合わせて言葉を失つた独特の甲高い声を出してみせた。

キュルケは、アルマロスの声を聞いて一瞬驚いたが、すぐに納得したと頷いて腕組を

した。

「まるでクジラの鳴き声そつくりじやない。」

「つ…」

キュルケの言葉に、アルマロスは、ピクリと反応した。

ちなみにアルマロスの世界の天使は、それぞれ決まつた動物を使役することができるのだが、アルマロスの動物は、クジラだつた。

墮天後に手に入れた最後の手段であるネザー化が、使い魔として使役している動物の形に依存することを考えれば、アルマロスが墮天の後遺症で声を失つた後、自分の使い魔のクジラと同じ声になつたは、当然だつたのかもしれない。

「立ち話はこれでお終いにしましょ。授業が始まるわよ。」

「やだ！ 遅刻しちゃう！ あ、アルマロス、来て！ 使い魔はね一緒に授業に出なきやいけないから！」

ルイズは、キュルケの手前、アルマロスに弱腰でいることをさらけ出すわけにはいかず、必死に泣きそうなるのを堪えながらいつもの強気な姿勢でアルマロスの腕を掴んで教室に向かつた。

キュルケとサラマンダーのフレイムも、教室に急いだ。

\*\*\*

教室についた時、すでにルイズとキュルケ以外の生徒達が教室に入つており、ルイズとアルマロスに生徒達の視線が集まつた。

使い魔召喚儀式で出現したあの黒い巨体が人間の姿に変わつたのは、あの場にいたルイズの同級生達も目撃している。なので興味が湧かないはずがない。

ルイズが引つ張つてきたアルマロスの姿を見た生徒達は、言葉を失う。

あの恐ろしく、痛々しい姿をしていた黒いゴーレムのようなものが、今は、奇妙な鎧をまとつた人間の男の姿に変わつている。

足まである癖のある長いアシッドグレイの髪の毛に、キュルケよりも濃い褐色の肌、海の青さを連想させる鮮やかな青い眼、それらを際立たせる整つた顔立ちと、長身と、一見細身に見えるが鍛え抜かれた肢体。

儀式が行われた場所では遠目にしか見てなかつたが、近くで見るとその美しさに驚く生徒達。

ルイズは、この空氣をなんとかしようとして、アルマロスの方に向き直る。

「使い魔は、教室の後ろ。あそこ、他の使い魔達がいるでしょ？ あそこで授業が終わるまで待つて、いいわね？」

ルイズのその言葉を聞いて、アルマロスは、素直に頷いて、ルイズが指さした教室の後ろの方へ歩いて移動した。

すると教室にいた生徒達がざわつきはじめた。

あの奇妙だが美しい男を、ゼロと蔑んできたルイズが従えさせている。

あの男は実は大したことのないただの人間なのでは？ という疑惑を持つ者と。

実はルイズがすごい実力の持ち主だったのでは？ つという疑問を持つ者に別れた。

別れたと言つてもほぼ9割ぐらいの生徒が普段からルイズをゼロと蔑んでいるので、アルマロスのことを大したことのない存在だと考えた。

ルイズは、席に座ると、今すぐにでも机に頭を打ち付けそうになるほど疲れを感じた。だがここでそんなことをすれば、アルマロスが堕天使だとばれるきっかけになるかもしないから気力で踏ん張った。

ちらりと後ろを見れば、アルマロスが他の使い魔達と並んで立つている。離れて見ても美しい。あんなに純粹オーラをまき散らしているのに、なぜ堕天使なんだと言いたいぐらいだ。

やがて女教師シユヴルーズが教室に入ってきたため、ざわついていた生徒達が慌てて

席についていた。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですわね。このシュヴルーズ、こうやつて春の新学期に、様々な使い魔達を見るのが樂しみなのですよ。」

中年といえる年齢の彼女は、笑顔でそう言つた。

そして様々な珍獸たちの中に、ひとりだけ異色の存在がいるのが目に入り。

「おやおや、変わつた使い魔を召喚したものですね。」

変わつた使い魔と言われてルイズは、ギクッと大げさなほど肩を跳ねさせた。

「ゼロのルイズ！ 使い魔を召喚できなかつたからつてその辺の平民を着飾つて雇つたのかよー！」

ルイズの大げさな反応を見た生徒の一人がそんな野次を飛ばした。

それがきつかけで、他の生徒達もルイズを貶す言葉をルイズに浴びせはじめた。

シュヴルーズは、自分が口にした変わつた使い魔がルイズが召喚した使い魔だつたことを知り、しまつたと言う顔をした。

ルイズを見下し、からかいや野次を飛ばす生徒達を見て、アルマロスは、不快そうに眉を寄せた。

「違うわ！ みんな見たでしょ！ あの黒い大きなの！ あれがこう…、なんかよく分かんないけど、コントラクトサーヴァントをやつたらこの姿になつたよ！」

「そんなの聞いたことないよなー。」

「あの黒いのがそこの平民だつて証拠もないでしょ?」

「ほら、やつぱり嘘だぜ。」

勝手に決めつける生徒達に、ルイズは唇を噛み肩を震わせた。

アルマロスは、そんなルイズを見て、それから生徒達の方を見て、大きく息を吸い込み。

「フウウウウウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!」

大声を出した。

教室の窓がビリビリと震え、あまりの大音量と独特の甲高い音に、耳がキーンとなり固まつたり、椅子から転げ落ちたりした。

アルマロスが声を出し終えると、教室は、シーンと静まり返った。

アルマロスと並んで教室の後ろにいた使い魔達は、床に転がつてピクピク痙攣している。アルマロスの大声と墮天使のオーラで気絶したらしい。

シユヴルーズは、教卓に隠れてしまつて、腰を抜かして辛うじて片手が教卓の上に置かれている状態だ。

ルイズも耳が痛くなり固まつたが、真っ先に正気に戻りアルマロスの方を見ると、アルマロスは、ルイズに向かつて微笑んだ。

どうやらルイズへの野次を止めるために大声を出したらしい。

しかしアルマロスは、ルイズもダメージを受けていることに気付いているだろうか？  
微笑みかけてきた様子からするに、気付いてない。

これがアルマロスじやなかつたら、ルイズはキレて筆箱なり教科書なりをぶん投げて  
いただろう。しかしアルマロスに悪気がないのが遠目に見ても分かり、ルイズを助ける  
ためにやつてくれたことも理解できたので叱るに叱れなかつた。

「うう…、み、耳が…。」

「誰か起こしてくれ…。」

「ちよつとは瘦せろよ、マリコルヌ…。」

「うわー！　俺のラツキーが死んでるー！」

「落ち着いて！　氣絶してるだけよ！　使い魔全部が氣絶するつて、どういう声してん  
のよ、アレ。」

耳を抑えながら生徒達が立ち直り出す。

そしてアルマロスの大声による被害で大騒ぎになつた。

「お、お、おお、落ち着きなさい。皆さん…。」

「先生、大丈夫ですか？」

「ええ…、なんとか…。ああ、びっくりしました。これは、魔法ではなく、単に声が大き

かつただけのようですね。ミス・ヴァリエールの使い魔さん。ミス・ヴァリエールのために行動したのでしょうか、もう少し考えてから行動してもらえますか?」

ヨロヨロと立ち上がったシユヴルーズが、アルマロスに言つた。

言われてアルマロスは、自分がやり過ぎてしまつたことに気づいたらしく、慌ててルイズのところに行くと、ルイズのノートに『ごめんなさい』と謝罪の言葉を書いた。

「次から、気を付けてね!」

「フウォン。」

ルイズが疲れた声で言うと、アルマロスは、悲しげに眉を寄せて短い声を出して返事をして、頷いた。

「えっ? それ地声?」

アルマロスの声を聞いた近場にいた生徒が驚いて言つた。

あの独特の甲高い声が、この謎の男の声だなんて到底考えられなかつたのだ。

アルマロスが発する声が普通じやないと知れ、生徒達がまたざわついた。

アルマロスが人間じやない何かであるということは、まず間違いないことを彼らは認識した。

「オホンッ…。では、授業を再開しましよう。」

アルマロスの大声によるダメージで生徒も教師もヘロヘロだが、授業が再開された。

授業は、まず基礎となる四つの系統に始まり、シユヴルーズの二つ名『赤土』から、彼女の授業は土の系統魔法の講義になつた。

授業を聞いていたアルマロスは、この世界の魔法が人々の生活に欠かせないものだと理解し、これはマズイのではないか？ と片手で口を覆つて、他所に顔を背けた。アルマロスがなぜそんな反応を示したのか、その理由は後ほど本人がルイズに説明する。

「では、ミス・ヴァリエール。この石を望む金属に変えてみてください。」

シユヴルーズがルイズを指名した途端、教室内の空気が凍つた。そしてルイズにやめるよう生徒達が怯えた声で言つている。

意識を授業から逸らしていたアルマロスは、その空気を感じ取つて、首を傾げた。見れば、ルイズが教卓の方へ進み出て、教卓の上の石に向かつて杖を突き出し何か呪文を唱えた。

その瞬間、大爆発が起つた。

「だから言つたのよ！ あいつにやらせるなつて！」

「いつだつて成功確率、ほとんどゼロじゃないか！」

アルマロスは、煙が立ち込める教室に響く生徒達の声を聞いて納得した。なるほど、だからルイズは、ゼロと呼ばれているのかと。

しかしアルマロスが知る限り、魔法で意図せず爆発を起こすのは、呪文を間違えたか、魔力の暴走などが原因だつたはず。

魔法の暴走による爆発と、ルイズが起こした爆発は、性質が違う。  
なぜアルマロスがそう考えたのか。それは。

アルマロスと、その周囲1メートルぐらいの範囲だけ、爆風を一切受けておらず、綺麗だつたからだ。

アルマロスは、天使であつた頃、『魔法使いの魔法を無力化する方法を教える』という役目を持つていた。

そのためいかなる魔法も無力にする体質で、その体質から魔法の無力化方法をあみ出して人間に伝えて、魔法使いの技術向上に貢献してきた天使だつた。

墮天してからも、役目はなくなつたが、魔法使いの魔法が効かないというのは体質として残つていた。

もとの世界で墮天使をやつてた頃は、この能力を活用する機会がなかつた。なぜなら、天使（墮天使）は、総じて超高密度のエネルギーの塊であるため、超高確率で魔法使いの魔法が効かないからだつた。

アルマロスが、授業を聞いててマズイと思つたのは、自身のその体質が、メイジ（魔法使い）が主体のこの世界では最悪最強の天敵になるのでは？ つという考えに至つたか

らだ。

そして見事にそれは的中したらしい。

生徒達が失敗魔法と言っているルイズの爆発魔法を、自分と自分の周りだけ無効化してしまった。

なんて説明しようか：つとアルマロスが途方に暮れている姿を、青髪にメガネの少女がジツと見ていたのだが、アルマロスは、それどころじやなくて気が付かなかつた。

## 第二話 堕天使ＶＳ青銅

ルイズが起こした大爆発でメチャクチャになつた教室は、シユヴルーズからの罰でルイズが片づけることになつた。

ただし魔法を使わずに…、という条件付きなのだが、ルイズにはまともな魔法が使えないのに意味がない。

使い魔を使うなどは条件に入つていないのでアルマロスが片づけるのを手伝つていた。

「……もう、分かつてるんでしょ？」

「？」

ルイズの弱い声を聞いてアルマロスが振り向くと、ルイズは、背中を丸めて床にしゃがみ込んでいた。

見るからに元気がなく、心が暗くなつてているのが雰囲気で分かる。

「私…、魔法が使えないの。魔法成功率ゼロ。だからゼロのルイズって言われてんの…。基本の魔法すら爆発しちゃうだけで、一回も成功したことなんてない。小さいころからずっとよ。」

ルイズは、喋り続ける。

アルマロスは、ただ聞いていた。

「ずっとずっと努力したわ。ヴァリエール家の令嬢として恥かしくないメイジにならなきやつて！ いっぱい勉強もした、成績だっていつも首位をとってきた！ でも、魔法が使えないの！ それだけでメイジ失格よ。誰も私を認めてなんてくれないの。」

ルイズは、己の体を抱きしめ微かに震えながら言葉を吐きだし続ける。

「春の使い魔召喚儀式…、これを成功させなきや留年だつた。だからなんとしてでも成功させたかったの！ でも何回やつてもやつぱり爆発しか起こらなかつた！ でも！」

ルイズが、アルマロスの方に顔を向けた。

その目は潤んでおり、今にも涙が零れ落ちそうだ。

「あなたが…、来ててくれた。私の初めての魔法の成功だつた。」

ルイズは、ゆっくりと立ち上がりながら、アルマロスに言う。

その表情は、もう悔いはないという諦めと喜びが混ざつたものだつた。

「それだけで…、もう十分。ねえ、アルマロス。あなたは、私なんかに従う必要なんてないわ。だつて私は、ゼロだもの。人間を心から愛して人と共にありたいから神に背いた純粹で優しい天使のあなたに相応しくないわ。だから、ここにいなくつてもいいの。私

は、サモンサーヴァントが成功した、それだけで十分だから……」

ルイズの目からとうとう大粒の涙が溢れだした。

アルマロスは、苦しげに顔を歪め、ルイズに駆け寄り、その小さな体を抱きしめた。

「やめて……同情なんてしちゃダメ。私、アルマロスに失望されたくないの。心から人間を愛してるあなたに、失望させたくないの！」

ルイズは、ボロボロと涙を零しながらアルマロスを押し返そうとするが、体格差がありすぎて敵わない。

アルマロスの体は、ウォツチャースーツのせいもあるかも知れないがひんやりと冷たく、温かさがない。

けれどルイズを抱きしめる彼の腕は、信じられないくらい優しさが込められているのが分かる。

ルイズは、ついに抵抗をやめ、アルマロスの腕の中で声を上げて泣いた。

\*\*\*

十数分ぐらいしてルイズが泣き止み、教室の掃除が再開されたあと、ルイズは、ハツとあることを思い出した。

今思い出したが召喚されてからアルマロスに食事を与えた記憶がない。もちろん自分もだが。

思い出すとお腹の虫が急に鳴り出しルイズは赤面した。アルマロスは、クスッと優しく笑つただけだつたがルイズは余計に恥かしくなつた。

「食堂に行きましょう。：アルマロスは、『飯食べる？』

堕天使の生態系など分からないので聞いておく。

アルマロスは、少し考えてから、ルイズの掌に『食べなくても大丈夫だけど、人間の肉体を維持するのに適度に食べた方がいいらしい。』つと書いて説明した。

人間に憧れて、人間の肉体を手に入れたのだから食事は避けて通れないのは当たり前だ。

しかしアルマロスを含めた堕天使達は、ウオツチャースーツでエネルギーを供給し、肉体を維持しているので基本的に飲食は必要ない。堕天する前は、アストラル体という実体がない意思を持つたエネルギーだからか、飲食の習慣がないのが自然な状態だつたというのもあるのだろうが。

ルイズは、アルマロスの説明をうけて、腕組みをして悩んだ。

食べなくても平気だと言われても、適度に食事を摂取した方がいいらしいと付け足されたら、やはり食事を与えた方がいいに決まっている。

ルイズは、そう結論付けると、アルマロスをアルヴィーズの食堂に案内した。

食堂に入ると、衝動の入り口に近いところにいた生徒から順に、アルマロスの存在に気付いた生徒達がルイズとアルマロスの方に注目した。

教室でクジラに似た声による大声でダメージを与えてきた噂はとつぐに広まつており、アルマロスを見て身をすくめる者や、怒りや憎々しげな視線を向けてくる者など様々だ。

ルイズは、こうなることを予測していたため、やはりかとため息を吐き、横にいるアルマロスを見上げればアルマロスは、特に気にした様子もなく興味津々に食堂を見回していた。

本当に墮天使に見えない。ルイズは、あらためそう思った。

ルイズは、自分の席の向かい側の空いた席にアルマロスを座らせた。本来なら使い魔を食堂に入れるのもましてや座らせるのも禁じられているのだが、人型で、正体不明のアルマロスをルイズが食堂に招き入れても生徒達は咎めはしなかつた。

ルイズの前に豪華な食事運ばれてくる合間に、ルイズはメイドにアルマロスの食事を使用人達の賄でもいいから持ってきてくれないかと頼んだ。

そして間もなくルイズの食事と違い、質素な食事が運ばれてきた。

アルマロスは、自分の前に運ばれてきた料理とルイズの前にある料理を見比べる。

「ごめんなさい…。明日は、もつとちゃんとしたの頼んでおくから、我慢してくれる…？」

ルイズが、上目づかいで謝罪すると、アルマロスは、そんなことないと身振り手振りで意思を伝えた。

見比べたのは、別に不満があつたわけではない、単に食事というものに対する好奇心からだつた。

ここでは関係ない余談だが、アルマロスの仲間だつた墮天使のサリエルの主食はキヤベツだつたりする。しかもキヤベツしか食べないのである。

ルイズは、アルマロスが不満を持つてないというのを理解しても、己の心の中が申し訳ないという気持ちでいっぱいだつた。

しかしいつまでもウジウジしているわけにはいかないので、ルイズは、食事の前の祈りを始めた。

それを見たアルマロスは、驚いた顔をした。墮天してから数百年も経つており、接してきた人間達は自分達墮天使を崇拜する者達ばかりだったので、神に祈る姿や言葉は、本当に久しぶりに見た光景であつたからだ。

祈りを終えたルイズがこつちを見ているアルマロスに気付き、慌てる素振りを見せた

のでアルマロスは、慌てて何でもないと手を振った。

そしてやつとルイズは、料理を食べ始めた。

食べながらちらりと、アルマロスを見ると、アルマロスは、ゆっくりと味わうように質素なパンと具だくさんのスープを食べていた。

だが食べながら、隣のテーブルにいる生徒が食事を大量に残して退室していったのを目撃し、顔をしかめていた。

ルイズは、学院の生徒が平気で食べ物を粗末にする様を見て人間に失望したかもしないと思い、気が気じやなくなっていた。

「食べ物を残すのって悪いことよね……」

食事を得られることに感謝する祈りを捧げておきながら、平気で食べ物を残して酷いときは一口も食べずに捨てることさえある。

これは完全に祈りに反することじやないか。ルイズは、今更そのことに気付き顔を青ざめさせた。

ふと見るとアルマロスがルイズに顔を向けていた。さつきのルイズの咳きを聞いたからだ。

「アルマロス……、失望した？」

ルイズは、泣きそうな顔をして聞いた。

アルマロスは、ルイズが今にも泣きそうになつてゐるのに驚いてオロオロと困つた動きをした。

その時、アルマロスは、床に転がる、小さな小瓶を見つけた。

中には、紫色の液体が入つており、小瓶の蓋のあたりから良い香りがする。

「あ、それ、香水？ その色は、モンモランシーのかしら？」

ルイズがアルマロスが拾つたものを見てそう言つた。

アルマロスは、それを聞いて、ふむつと顎に手を当てて何か考えているような体制をとつた。

アルマロスが拾つたこの香水からは、強い人間の想いが込められている。野蛮で暴力的な想いじやなく、異性に向ける初々しい愛情を、アルマロスは、この香水から感じ取つた。

この香水の持ち主は、どうやらよっぽど誰かに大切に想われているのだろうとアルマロスは、心を和ませた。

だとすると無くして困つてゐるはずだと考えて、周囲を見回すと、近くのテーブルでこちらをチラチラ見てきている金髪の少年と目が合つた。

少年は、アルマロスと目が合うと慌てて背中を向けてきた。なぜか顔色が悪い。

アルマロスは、首を傾げていると、彼にそろそろと金色の巻髪の少女が近寄つていた。

「あの…、それ私が調合した香水ですわ…」

「あら、やっぱりモンモランシーのだつたのね。」

「ええ、どうしてこの方が持つているのかしら?」

「拾つたのよ。」

ルイズがそうモンモランシーという少女に言うと、アルマロスが彼女に拾つた香水の小瓶を手渡した。

モンモランシーは、教室であつた件もあるのでアルマロスのことを若干怯えていたため、小瓶を受け取るとそそくさに離れていつた。

そしてモンモランシーは、さつきアルマロスを見ていた金髪の少年のところへ行つた。

「ギーシュ様、落とすなんて酷いですわ。」

「も、モンモランシー…。」

ギーシュと呼ばれたその少年は、モンモランシーに小瓶を差し出されてますます顔色を悪くし汗までかきはじめた。

「おお! ギーシュ、おまえモンモランシーと付き合つてたのか!」

「その香水は、モンモランシーが自分のためだけに調合している香水だぜ!」「ギーシュ様…。」

ギーシュの友人達が囁し立てていると、怒りで低くなつた別の少女の声がその騒ぎを一瞬で鎮めてしまつた。

栗色の髪の少女がつかつかとギュースの近くに来る。

「け、ケティ！ 誤解だ！ いいかい、僕の中には…」

「言い訳など結構です！ やはりミス・モンモランシーと付き合われておられたのですね！ さようなら！」

ケティと呼ばれた少女は、ギーシュの弁解を最後まで言わさず思いつきり彼の頬に平手打ちをして走つて去つて行つた。

彼女が去つた後、彼女の背を見ていたモンモランシーがギギギツツという音がしそうなほどゆっくりとギーシュに顔を向けた。その表情は、怒りに染まつてゐる。

「モンモランシー…、誤解なんだ…、彼女とはただ一緒にラ・ロシェールの森まで遠乗りをしただけで…。」

「やつぱり、あの一年に手を出していたのね？」

「お願ひだよ、『香水』のモンモランシー。咲き誇る薔薇のような顔をそのような怒りで歪めないでくれよ。僕まで悲しくなるじゃないか！」

必死に許しを請うギーシュだつたが、次の瞬間、モンモランシーがワインが入つた瓶を掴み、その中身を彼の頭にドボドボとかけた。

「嘘つき！」

モンモランシーは、怒りと悲しみで顔を歪め去つて行つた。

残されたのは、静寂。

ギーシュは、しばらく固まつていたが、やや時間をおいてハンカチで顔を拭きながら。

「あのレディ達は、薔薇の意味を理解していないようだ。」

つと、キザつたらしくボーズを決めているが、すでに食堂にいる生徒や使用人達に彼が二股をかけて、ばれて二人に振られたという事実は知れ渡つてしまつてゐるため、ただの開き直りにしか見えない。

頭を濡らしていたワインを拭き終えたギーシュは、席から立ち上がりると、なぜかルイズのところへきた。

「何よ？」

「君の使い魔君のおかげで二人のレディの名譽が傷ついたんだぞ、どうしてくれんかい？」

「はあ？ 知らないわよ。そもそもあんたが二股かけたのが原因じやない。アルマロスは、そこの床に落ちてた香水を拾つただけよ。それを届けたのは、モンモランシー。私は、言いがかりつけて責任を追及するなんて、頭おかしいんじゃないの？」

ルイズがそう言うと、周りの生徒達も、ギーシュの無理やりな言いがかりについて不

当だ、おまえが悪いと野次を飛ばした。

ギーシュは、顔を赤くして、拳を握りブルブルと震わせている。彼は単に八つ当たりできる相手を咄嗟に探してたまたまルイズとアルマロスに白羽の矢を立てたのだ。顔に出さないようにしているが、二人の乙女にふられたギーシュは、まともな思考ができないほど混乱していた。

ギーシュは、アルマロスが自分を見ていることに気付き、そちらに顔を向けた。

アルマロスは、無表情でギュースを見つめていた。

その鮮やかな青い瞳と、人ならざる者が放つ圧倒的な迫力に、ギーシュは、冷や汗をかいたて後ずさりかけたが、ハツと我に返り頭を振つて恐怖を打ち消すと、アルマロスに薔薇型の杖を向けた。

ルイズは、ギョツとして席から立ち上がった。

「なんのつもり!？」

「僕を馬鹿にした目を向けてくる、このわけの分からぬ平民に貴族への礼儀というものを教えてやるのさ！ 立て！ 決闘だ！」

「ふ、ふざけんじやないわよ！」

ルイズがムチャクチャなギーシュの言葉と行動を止めようと動こうとしたが、それよりも早く、アルマロスが席を立ち、ギーシュの前に立っていた。

まるで、その喧嘩を買つたと言わんばかりに堂々と立つてゐる。

ルイズは、さーっと青ざめた。

アルマロスがどれくらい強いのか知らないが、ドットクラスのギーシュが戦つて勝てる相手だとは到底考えられなかつた。なぜならアルマロスは、墮天使だからだ。

ギーシュよりもずつと背が高いアルマロスを間近で見て、ギーシュは、一瞬腰が引けたが、喧嘩を売つた以上もう後に引けないため無理やり口を歪めて笑つた。

「貴族の食卓を血で汚すわけにはいかない。ヴエストリの広場で決闘だ。逃げるんじやないぞ？」

「フウウオオン？」

ギーシュの言葉に、アルマロスは、『逃げるわけがないだろう？』つと言おうとしてあの甲高い独特の声を発した。

「だめよ、アルマロス！」

ルイズが、アルマロスの左手を掴んで決闘を辞めさせようとした。

するとアルマロスは、優しくルイズの手を離させ、ルイズの頭に手を添えてルイズに目線を合わせて微笑んで見せた。まるで『大丈夫だ。問題ない。』と言つてゐるかのように。

ルイズがアルマロスの微笑みに見惚れている隙に、アルマロスは、ギーシュと共に食

堂から出ていった。

「アルマロス！」

ルイズは、慌ててアルマロスを追つた。

\*\*\*

「諸君！ 決闘だ！」

ヴエストリの広場にギーシュの声が響き渡る。

それに呼応して野次馬達が声援を送つた。

アルマロスは、腰に手を当てて、決闘の開始を待つていて。

その表情に怯えの色は一切なく、ただ静かに戦いの時を待つ武人の貫録があつた。

野次馬の壁に阻まれ、かろうじて隙間からアルマロスを見ることしかできないルイズは、両手を胸の前で握つてただ祈ることしかできなかつた。

「さあ、始めるとしよう！」

ギーシュは、アルマロスの貫録に気付かず薔薇の杖を振つてワルキユーレを鍊金した。

人間と変わらない大きさの精巧な美しい形状のゴーレムが現れても、アルマロスは、動じることなく、視線をワルキユーレに向けただけだった。

「僕はメイジだ。だから魔法を使うよ。文句はあるまいね？」

ギーシュが杖を振りかざしながら聞いても、アルマロスは動かなかつたため、ギーシュはそれを肯定と受け取つた。

「言い忘れたな。僕の二つ名は、『青銅』。青銅のギーシュだ。従つて青銅のゴーレム、ワルキユーレがお相手するよ。かかり！」

ギュースの掛け声と共に鍊金された一体のワルキユーレがアルマロスに拳を振るつた。

拳が眼前に迫つても動かないアルマロス。ギーシュは、口元を緩め、勝利を確信した。アルマロスの人ならざる圧倒的な雰囲気は所詮こけおどしだつたのだと愚かにも結論付けた。

ルイズは、固く目を閉じた。

しかし次の瞬間、ワルキユーレが消えた。

アルマロスの長い片足が頭にくつつきそうなほど上へ振り上げられた状態になつて

いる。どう見ても何かを蹴りあげたとしか見えない。

上に目を向けると、何か小さい物が上空にあり、それが徐々に落下してくる。

それがワルキユーレだと分かった時には、ワルキユーレは、地面に叩きつけられ、見るも無残な形にへしやげてしまっていた。

ワルキユーレが地面に叩きつけられた後、アルマロスは、振り上げていた足を地面に降ろした。

何が起こつたのか一瞬分からず、ギーシュはおろか、周りの野次馬さえ固まつた。

周りの静けさにルイズは、恐る恐る目を開けて、やつと何が起こつたのか理解した。やはり異世界の墮天使とはいえ、墮天使は墮天使だ。ルイズが予想した通りギーシュは、アルマロスに勝てない。

我に返つたギーシュは、杖を振るつて、七体のワルキユーレを鍊金した。さつきの素手のワルキユーレと違い今度は槍や剣、斧などの武器を装備している。

「青銅でできたワルキユーレを片足で一撃とはね？ 何かの武術の心得があるということか。恐れ入つたよ、だけどこれでもう手加減はしない。覚悟しろ！」

七体のワルキユーレが円陣を組んでアルマロスに襲い掛かつた。

四方から武器が突き出され、振り下ろされた直後、アルマロスが消えた。

「消え…、どこに？ なつ！」

アルマロスが消えたことに驚いてアルマロスを探したギーシュは、宙を見上げて驚いた。

アルマロスは、十数メートルも高い位置に跳躍していたのだ。とてもじやないが人間の跳躍力じゃない。

跳躍したらあとは落ちるだけだ、それを狙い、ギーシュは、ワルキユーレで落ちてくるアルマロスを攻撃しようとしたが、アルマロスは、空中で足を抱えて回転し、体制を整えると、一体のワルキユーレの両肩に着地して落ちてきた時の速度を利用して押し潰し、潰れたワルキユーレを踏み台にしてワルキユーレの陣形の外へ抜け出した。

地面に着地したアルマロスを残り六体のワルキユーレが襲い掛かるが、前方の四体のワルキユーレが、アルマロスの回転蹴りで粉々に粉碎された。

続けざまに槍のように突き出されたアルマロスの掌が一体のワルキユーレの顎に決まり、頭がもげる。

最後の一体が突撃してくると、アルマロスは、ワルキユーレの腕を掴み、凄まじい速度で背負い投げをして地面に叩きつけてグシャグシャにした。

頭がもげたワルキユーレがアルマロスの背後から剣を振り下ろそうとすると、振り向きざまに目で捉えられない速度で拳と蹴りの連打が入り、頭のないワルキユーレは、地面にバラバラになつて散らばつた。

自慢のワルキユーレがあつという間に素手で倒されてしまい、ギーシュは、足を震わせ、恐怖で今にもその場にへたり込みそうになつた。

アルマロスの格闘技。その動きは、実に優雅で、踊っているようにも見え、見る者を魅了する美しさがあり、まさに武術…と言うに相応しいものだつた。

アルマロスがただの人間じやないというのは、召喚された時と、教室であつた大声事件で分かつていたはずなのに、何をもつて彼をただの平民だと判断してしまつたんだとギーシュは今更に後悔したがすでに後の祭りである。

アルマロスが、スタスタと早くもなく遅くもない速度でギーシュに向つて歩いてくる。

ギーシュは、最後の力を振り絞つて九体目のワルキユーレを練成し、自分の前に立たせたが、先に練成して戦わせたワルキユーレ達がアルマロスに手も足も出ず素手で粉碎、潰されているので意味がないのは、分かつていたはずだ。それでも恐怖のあまり咄嗟にそうせざるおえなかつた。

ワルキユーレを挟んでギーシュの前に立つたアルマロスは、立ち止まり、ワルキユーレの後ろにいるギーシュを見た。

「お、おおお、おまえ…、なんなんだ？ 何者なんだ？ 人間じやない！ 人間であるはずがない！」

圧倒的な力の差に、涙を浮かべて喚くギーシュ。

アルマロスは、右足を顔につくほど高く振り上げ、踵落としでワルキユーレをペチャンコに潰した。

最後のワルキユーレが倒され、ついにギーシュは、地面に尻餅をついて、ずりすりとアルマロスから距離を取ろうともがいた。

それよりも早くアルマロスが、ギーシュに迫った。

ギーシュは、もうだめだ、殺されるつと思い、両腕を顔の前で組んで死を覚悟した。しかしアルマロスからの攻撃はこなかつた。

怪訝に思つたギーシュが恐る恐る腕を解いて、見上げると、アルマロスが彼を見おろしていた。

アルマロスの手がギーシュが握つていた薔薇の杖に伸び、彼の手から薔薇の杖を奪つた。

ワルキユーレの練成で花弁を失つた薔薇の杖を、指で弄び、アルマロスは、につこりと笑つて見せた。

その表情と動きから、言葉にせずともこちらの勝ちだと言つているのが分かり、ギーシュは、緊張が一気に解れた気がした。

「僕の負けだ……ハハ、ハハハ……完敗だよ。」

ギーシュは、なぜか笑いが込み上げ、降参だと両手を上げた。

途端、周りにいた野次馬達が歓声をあげた。

「アルマロス！」

ルイズが野次馬をかき分けて、アルマロスのもとに駆け寄つた。

アルマロスは、ルイズが駆け寄つて来ると同時に、ギーシュに薔薇に杖を返してそれからルイズと向き合つた。

「怪我はないわよね…。」

あれだけの圧倒的な攻撃力でギーシュのワルキユーレを撃退したのだから怪我などするはずがないのだが、一応確認のためにルイズは聞いた。

アルマロスは、大丈夫だと身振り手振りで伝えた。

「う…、ふ…、ふえええええんっ」

「フォーン!?」

急に泣き出したルイズに、アルマロスは、さつきまでの武人の貫録はどこへやらであたふたと慌てた。

さつきまでの戦う姿とのギャップに野次馬達の間で笑い声が聞こえた。

この決闘事件によつて、美しい武術と、泣いちやつたルイズをどう慰めればいいか分

からず困つて慌てる姿のギャップに、謎の多いアルマロスに対する周囲の警戒心は緩み、貴族や平民間わずアルマロスに対して親しみを感じるようなるのであつた。

### 第三話　堕天使とハルケギニアの伝説

大泣きするルイズをどうやつて泣き止ませようかとオロオロするアルマロス。一方そのころ、ヴエストリの広場で起こつたギーシュとアルマロスの決闘を、遠見の鏡で観察していた者達がいた。

「…か、勝ちましたね。それも圧倒的に。」  
「うむ…。」

コルベールとこの学院の院長のオールド＝オスマンである。

彼らは、学院長室で壁にかけられた大鏡使い遠見の鏡という魔法で広場を観戦していたのだ。

ルイズが召喚した正体不明の使い魔、アルマロスのことを調べるためにである。

「ミス・ヴァリエールが召喚したモノ…、崩れかけのゴーレムのようでいて、それではないナニかだつたのは間違ひありません。しかしへミス・ヴァリエールがコントラクトサー・ヴァントを行つた途端に今の人間と変わりない姿に変化したのです。」「背中から垂れ下がつておる尻尾のようなもんはなんじやろうな？」  
「さあ？　それは私には…。」

「あの体と一体化しているような黒い鎧もじやが、あの者は人間ではない何者かであるのは間違いないじやろう。」

「ディテクト・マジックで確かめようとしたのですが、なぜか呪文がかかる前に無効化されてしまうのです。ゴーレムのような姿だった時も、ミス・ヴァリエールに向かつて倒れた時、私は咄嗟に攻撃魔法を使いましたが、これも当たる前に消え去りました。」

「魔法の無効…、じやが使い魔の儀式は成功しておる。」

アルマロスの左手と右胸に使い魔のルーンがしつかりと刻まれている。しかも鎧の上からである。

「ルーンのことですが、珍しいルーンでしたので調べたところ、彼の左手に刻まれたルーンは、伝説の『ガンダールヴ』のものと一致しました。しかしあらう一つの方は、まだ分かつていません。あくまで私の推測なのですが、右胸のルーンは、ブリミルの四人の使い魔の内、記されることのなかつた四人目のものかもしません。」

「伝説の四人の内、二人のルーンを一人に刻まれたということかね？　伝説が一度に二つもこの学院に降臨したというのか。」

オスマンは、椅子に深く座り込み大きく息を吸つて吐いた。

「神の左手と呼ばれる、あらゆる武器を使いこなしたとされるガンダールヴに、名を記されることができなかつた四人目の使い魔のルーン…、一つでも強大な力を秘めているという

のにそれが二つ、一人に…。それほどあの者は特別なナニかということなんじやろうか？」

オスマンは、髪をいじりながら遠見の鏡をチラツと見て、アルマロスを見た。  
泣いてる少女一人を前にしてオロオロしてる様からは、まつたくそんな特別な感じはしない。

ドットクラスのギーシュのワルキユーレをとてつもない身体能力で、それも素手で全部破壊した時の戦いぶりは圧巻だったが、伊達に長生きしているオスマンは、そういう強者がいることを知っているし見たこともあるのでそれだけで特別だとは決めつけることはできなかつた。

「ミス・ヴァリエールからは何か聞いたのかね？」

「いいえ…、まだ何も…、ただ、ミス・ヴァリエールは、何か隠している様子ではあります。」

「何かあつてからでは遅いからのう。学院…、いやトリステインのためにもあの者の正体を知つておかねばならん。ミス・ヴァリエールとその使い魔殿をここへ呼びなさい。」「承知しました。」

ルイズとアルマロスを学院長室に呼ぶよう命じられたコルベールは一礼し、部屋を退室した。

\*\*\*

それから十分後ぐらいして、目を真つ赤にはらしたルイズと、ルイズの後ろからついてきたアルマロスが入室した。

「オールド・オスマン…。」

ルイズは、まるで死刑台に立たされる前の罪人のような顔をして、恐怖で声が震えていた。

オスマンは、一目でルイズがなぜここに呼ばれたのか、そして彼女の後ろにいる存在のことについて彼女が何か知っているのを見破つた。

「まあ、座りなさい。」

机を挟んでルイズとアルマロスがソファーに座つた。

肩を震わせ、俯いてスカートの裾を握りしめるルイズを、隣にいるアルマロスが心配そうに見ていた。

「そんなに緊張しなくてもよい：つというわけにはいかんじやろうな。ミス・ヴァリ

エール、言われんでも分かつておるじやろうが、ここにお主を呼んだのは他でもない、お主の隣にある、お主の使い魔殿のことについてじや。」

オスマンが言うと、ルイズは大げさなぐらいい体をびくりと跳ねさせた。

ルイズの反応と、オスマンの言葉を聞いたアルマロスは、ルイズの手にソツと手を添えつつ、オスマンを警戒するよう向ける視線に刃のような鋭い敵意が込められた。

「わしの名は、オスマン。このトリステイン魔法学院を預かるメイジじや。使い魔殿、名を教えてくれぬか？」

「…フウウオオン。」

「オールド・オスマン…、彼は…、アルマロスは、言葉を喋ることができません。」

甲高い独特の声で返答したアルマロスに代わり、ルイズがそう答えた。

「そうか…、アルマロスとやら、筆談はできるかの？」

オスマンがそう確認を取ると、アルマロスは、頷いた。

「机の上に指でよいから、それでお主のことを聞かせてもらおう。お主は、何者じや？」

オスマンの質問に、ルイズがまた大げさなぐらいい体を震わせた。

一番知られたくないことだつたからだ。彼が、アルマロスが悪いイメージしかない墮天使などと知られたら…。

アルマロスは、ルイズの心配を他所に机の上に指でスラスラと自分が墮天使だと書いていた。

「墮天使……じゃと？　お主が？　ハハハ、まつたくそろは見えんのう。いや、良い意味でな。」

「フォオン？」

オスマンが和やかに笑つたことにアルマロスは、首を傾げた。

ルイズもオスマンの反応にハトが豆鉄砲をくらつたような顔をした。

「墮天使」というと、神に背いた悪というイメージがあるんじやが、お主からはその身につけておる鎧には禍々しさがあるというのに、お主にはまつたくそのような邪気が感じられん。なぜそんな純粹な目をしておるのか、それでいてグラモンの体と決闘した時もグラモンの体を傷つけはしなかつた。背中に黒い羽もないし、墮天使じやと言われても恐らく誰も信じないじやろうな。」

「フウウオン？」

アルマロスは、『そうなのか？』つと言ふ風に声を漏らした。

「嘘をついておらんじやろうな？」

「フォオン。」

オスマンがわざとらしく意地悪な口調で聞くと、アルマロスは、ブンブンと首を横に

振った。

「ふむ、確かに嘘をついてはおらんようじやな。お主の目がそう語つておる。本当に墮天使なのか疑つてしまふわい。そんな子供みたいな純粹な目をされとつたらのう。オスマンにそう言われ、アルマロスは、意味が理解できないのか目をぱちくりさせていた。

「では、次の質問じや。アルマロス殿、お主は、いつたいどこから来たんじや？」

その質問に、アルマロスは、どう説明したらいいか困り、机に字を書くのを止めた。  
 「神の世界…、あるいは魔界か。そのどちらかと考えるのが普通じやが、お主はわしのイメージする墮天使とはかけ離れ過ぎておる。もしや、この世界の者ではないのか？」  
 ずばり言われアルマロスは、顔を上げてオスマンを見た。

アルマロスの反応を見て、オスマンは、やはりかと笑つた。

「わしらの世界とは違う、異世界の墮天使ということならば、話の辻褄が合うわい。サモンサーヴァントと召喚された時のゴーレムのような姿も、今の人間のような姿も、ディテクト・マジックなどの魔法が無効化されたのも、墮天使とは思えぬ純粹なその眼も。」「オールド・オスマン…、アルマロスは、どうなるのですか？」

「墮天使が召喚されました、なんて王宮に通達しても信じてもらえんじやろう。墮天使

「というのは、空想の中でしか描かれていない、いるのかいないのかもはつきりしとらん存在じや。実際にその目で実物を見たという話は、聞いたことがない。じやが：」

オスマンは最後に警告はした。

「あまり堕天使じやということをふれて回らんようにすることじや。いくら異世界の堕天使で、堕天使とかけ離れた姿と心を持つとはいえアカデミーに噂が入ればどうなるか分かつたもんじやないからのう。」

「はい……」

ルイズは、ビシツと姿勢を正して返事をした。

「それと、これは質問ではないんじやが、アルマロス殿のルーンのことについてじや。」

するとオスマンは、一冊の本を机に置いて、葉を挟んでいたページを開いて二人に見えるようにした。

「（こ）に記されておるのは、始祖ブリミルの四人の使い魔のことについてじや。一人は、神の左手『ガンダールヴ』、二人目は、神の右手『ヴァインダールヴ』、三人目は、神の頭脳『ミュズニトニルン』、四人目は：、記されておらんから不明。この四人の使い魔のルーンの内、二つが、アルマロス殿、お主に刻まれておるんじや。」

オスマンは、アルマロスの左手、そして右胸を順に指さした。

「左手はガンダールヴで間違いない。右胸は、まだ調査中じやが、四人目のルーンである

可能性が高い。なぜアルマロス殿に伝説の使い魔のルーンが、二つも刻まれたのか、そのことについて心当たりはあるかの?」

オスマンの言葉に、アルマロスは、分からないと首を横に振った。

ルイズは、口を開けたまま呆然とした。

アルマロスに刻まれた使い魔ルーンが伝説でしか語られていないあらゆる武器を操られたと言われるガンダールヴと、名前すら記されなかつたと伝えられる謎に包まれた四人目のルーンである可能性があるることに。

偉大なる始祖として尊ばれている始祖ブリミルの伝説を、メイジとして失格者な己が再来させてしまつた。異世界の堕天使を呼び出したこともだが、とんでもない大事件だ。

驚愕するルイズとは反対に、いまいち話が理解できていならしいアルマロスは、自分の左手と右胸のルーンを交互に見て首を傾げていた。

異世界の元神の使いであつた者であるアルマロスにとって、こちらの世界で神のごとく尊ばれ、伝説として語り継がれているものだと説明されてもうまく理解できないものだつた。

アルマロスが纏つてているネザースーツの上から浮き上がつてゐるルーンがただの印でないのは間違いないのだが、そこまですごいものだと感じられなかつたのだ。

実は、アルマロスが伝説のルーンの力を感じ取ることができない理由は、別にあつたのだが、その内身を持つて知ることになる。

「このことについては、王宮には知らせないこととする。ミス・ヴァリエール、今後の身の振り方についてはどうするつもりである?」

「えつ。そ、それは…。」

急に話を振られてルイズは、口ごもつた。

正直何も考えてなかつた。ただアルマロスに失望されたくないのと。堕天使だとうことがばれたらよくないということをいつぱいいつぱいで。

「まあ、そう力むこともないじやろう。気楽にいきなさい、気楽に。」

「き、気楽にですか?」

「変に気を使われても困るじやろ? アルマロス殿。」

「フウウオオン。」

振られたアルマロスは、そうだと言う風に頷いた。

「でも…。」

ルイズは、食い下がる。

「フウォン。」

アルマロスは、ルイズの片手を取り、その掌に指で字を書いた。

『僕は、もといた世界で人間達に崇められていたことがあつた。でも、それは間違いだつて友人から教えられた。だから僕のことを特別視しないで。それはルイズのためにならないから。』つと書いた。

そうアルマロスから伝えられても、ルイズは、どうしても踏ん切りがつかなかつた。ルイズは、アルマロスが墮天使だから氣を使つてゐるのではない。アルマロスが心から人間を愛し、その愛ゆえに神に背いた一途さと覺悟にショックを受け、その純粹な彼の心が貴族が偉ぶつてゐるこの世界の在り方のせいで穢れてしまふのではと心配だからついつい氣を使つてしまつてゐたのだ。

だから氣を使わざ氣楽にしろと言われてもルイズの気持ちの問題でできない。

オスマンには、まだアルマロスが墮天使になつた経緯は話してない。オスマンになら伝えてもいいだろうが、伝えたところでルイズの気持ちが変わらないだろう。

ルイズは、アルマロスを見た。

褐色の肌、金色の髪止めがついた癖の強い銀色の長い髪の毛、引き締まつた頬とぼつてりした鼻、優しげなラクダ目、海を思い浮かばせるような鮮やかな青い瞳。

先ほどアルマロスは、もといた世界で崇められていた時期があつたと言つていた。崇めたくなる気持ちは別世界の住人のルイズでも分かる気がする。なんと例えればいいか分からぬが人の心を惹きつける力が、おそらく無意識なのだろうがアルマロスは無

差別に放つて いるのだ。

ルイズは、額に汗を滲ませてウーウーと声にならない呻き声をあげるだけで今後のことをについて考えがまとまらない状態に陥った。

「…とりあえず、今日のところはここまでじゃ。部屋に戻つてゆっくり休みなさい。」

見かねたオスマンがそう言つて対談を終わらせた。

ルイズがアルマロスに支えられながら退室していくのを見送つた後、オスマンは、ソファーの背もたれにぐつたりと背中を預けた。

ただでさえ高齢でしわしわの顔が無理な減量をしたボクサー並みにげつそりやつてしまつっていた。

「さすがわし…、よく頑張つたわし！　あー、まさか墮天使だつたとは…、それも異世界の…。しかも伝説の再来を同時に目撃することになるとは、長生きしててこんな後悔したことはないわい。」

この後、秘書ロングビルが水を持つてきて、オスマンがまともに動けるようなるまで数時間はかかつたそうな…。

アルマロスに睨まれた時に放出されたアルマロスの墮天使のパワーの前に、偉大なメイジであるオスマンも大ダメージをは避けられなかつたらしい。

下手にビビッて、なめられたらまずいと精神力を削つて耐えてダメージを受けている

ことを隠し通したのである。オスマンの意地だつた。

\*\*\*

オスマンとの対談の後、ルイズの部屋に戻つたルイズとアルマロス。

ルイズは、疲れたのでベッドで横になるなりあつという間に眠つてしまつた。

アルマロスは、ギーシュと決闘したにも関わらず疲労感はなかつた。

なのでとても暇だつた。

暇つぶしにルイズの机にある本を読んだりしていたが、暇つぶしにならなかつた。

アルマロスは、首を回したり、腕を伸ばしたりした。ギーシュと戦つたはいいが、ギーシュが自分より弱いと分かつていたとはいえ実に呆気なく戦いが終わつたのがアルマロスにとつて物足りなかつた。

かつてもといだ世界でイーノックよりも優れた格闘技の達人であつたアルマロスは、わざと手加減したこともあり体が疼いていた。足りないのだ。もつと激しく動きたいとのだ。

アルマロスは、フツと自分の体を見おろした。自分が嫌っていたウォツチャースーツがぴつちり体を覆っている。

左手の甲と右胸に浮かぶルーンを除けば、ウォツチャースーツの機能はしつかりと働いている。

そしてアルマロスは、他の墮天使達と違う自分にだけあつた特権を思い出し、それを実行してみることにした。

直感で指先で右胸のルーンをそろりと触る、そして念じてみる。

するとアルマロスの身を包んでいた肉体と一体となつていたウォツチャースーツが闇となつて散つて消え、代わりにかつてイーノックと対峙した時のダンス衣装になつた。

アルマロスは、それは嬉しそうに衣装の布地を触り、ふと寝息を立てているルイズのことを思いだし、部屋の窓を開けて窓から外へ飛び出した。

彼の左手の甲と、大胆に晒された上半身の右胸には、ウォツチャースーツの上から刻まれていたルーンがあつた。

夕暮れの時間帯。

メイドのシェスターは、運んでいた洗濯籠を持ったままその光景に目を奪われていた。そこは、広間でもないが通路でもない学院の敷地内にある開けた場所だつた。そこで水色のダンス衣装を纏つた、銀髪と褐色の男が踊つていた。

シェスターは、彼の顔を見たことがある。

いつものように食堂で給仕をしていた時だ。

体と一体化しているのではというほどフィットした奇妙な黒い鎧に、首の後ろの背中辺りから垂れている尻尾のようなものがあるが、それを除けば人間と変わりない姿をしていた。

給仕の仕事をこなしながら他のメイド達も、調理場の人間達もこぞつてルイズの使い魔の男を珍しい物を見るように観察した。

そんな時、ギーシュがムチャクチャな理由をつけて彼に決闘の言葉を吐いた。

焦るルイズとは逆にギーシュに堂々とその決闘を受けて立つと言わんばかりに彼の前に立つた使い魔の男の姿に、メイド達も調理場から覗いていたコツク達も息を飲んだ。

圧倒的。

例えられる言葉がこれしか浮かばなかつたが、使い魔の男が纏うオーラは、常人のそれではなかつた。

ヴエストリの広場で始まつた決闘を、シエスタ達も遠くから見ていた。野次馬の壁でほとんど見えなかつたが、高く打ち上げられたワルキユーレと、野次馬の言葉と、ワルキユーレを破壊していると思われる鈍い音が使い魔の男がギーシュを圧倒していることをシエスタ達に教えた。

奇妙な、正体不明の人間。そもそも人間かどうかも怪しいところだが、ルイズの使い魔の男は素手でドットクラスのメイジであるギースに完勝した。

戦いが終わつた後、彼のもとへ駆け寄つたルイズが大声をあげて泣いてしまつたので、使い魔の彼がどうしたらしいかオロオロしていたという。

それから間もなく、学院の教員に学院長室に呼び出された一人がどうなつたかは、ただのメイドであるシエスタには分からない。

そして今、ヴエストリの広場でギーシュに勝つたルイズの使い魔が、あの奇妙な鎧ではなく、水を連想させる色のダンス衣装を纏つて踊つている。

ルイズの姿はない。

シエスタは、メイドとして仕事をこなしながら、この学院にいる貴族達の娯楽や祭りなどで様々なダンスを見てきた。もちろん故郷のタルブでだつて収穫祭の時には村の者達が豊作を祝い、大地への感謝のための踊りをすることがある。

しかしシエスタが今見ているルイズの使い魔の男の踊りは、娯楽というよりは神や大

地への感謝を伝えるそれに近いように思えた。

男は、実に優雅に、だが本当に楽しそうに舞い踊っている。

上半身が大きく晒される大胆な衣装のせいで彼の鍛えられた腹筋や胸筋などが惜しげもなく見えるし、地面につくほど長いアシッドグレイの髪が舞い踊るたびに宙を舞い絡まることなく夕日の光の下で輝いている。

シエスタは、踊つている男の姿に心を奪われ魅入っていた。

ダンスは、激しさを増し、突如男が前に歩く動作をしながらなぜか後ろに後退すると、いう奇妙な動きをしたところで、シエスタは、その見たことがない奇怪な動きに堪らず短い悲鳴をあげて持つていた籠を落としてしまった。

シエスタの声と籠を落とした音に気付いた男が、踊りを止めてシエスタの方に振り返つた。

「フオオン？」

「きやっ！　あ、あの…すみません！」

男が独特な甲高い声を出しながら近づいてきたので、シエスタは、慌てて籠を持つて逃げ去つていった。

残された男、アルマロスは、ポカンッとその場に取り残されたのだつた。

シエスタに逃げられてしまい、しょんぼりするアルマロスの後姿を、キュルケが物陰

から見ていたのだが、アルマロスは気付いてなかつた。

あと実は、アルマロスが踊りを踊りだしてからずっと見られていたのだが、そのことにも気付いていなかつた。

キルケは、それはそれはうつとりした目でアルマロスを見ていた。

\*\*\*

翌日目を覚ましたルイズが見たのは、なんか落ち込んでいるアルマロスだつた。

ダンス衣装ではなく、ウォツチャースーツ姿に戻つている。

「なにかあつたの？」

「フォオン…。」

アルマロスは、布団の上に指で字を書いた。

「嫌われたかも？つて、なにしたのよ？」

昨日のこととアルマロスが説明した。

暇だったのでダンスを踊つてたら、それをメイドらしき少女に見られ、籠を落として

いたので声を掛けようとしたらそのまま逃げられてしまつたのだと。

「別にあんたが悪いわけじゃないんでしょ？」

「フォン…。」

「気にしない方がいいわよ。」

ルイズはそう言つて励まし、アルマロスは、少し考えたが頷いた。

「ねえ、アルマロス。明日は、虚無の日なんだけど、城下町に行つてみない？」

ルイズからの提案に、アルマロスは、キヨトンッとした。

「アルマロスは、まだこのトリステインのこと知らないでしょ？ もしよかつたらって思つて…。嫌なら、いいわよ？」

するとアルマロスは、そんなことはないと首を振つた。

あ、でもつと…、ルイズは言つた。

「その恰好は目立つわね…。」

「フォン？」

アルマロスは、自分のウオツチャースーツを見た。確かにこれでは悪目立ちしてしまう。

ならばと、アルマロスは指の関節をパチンッと鳴らした。

すると一瞬にしてアルマロスの衣装が変わつた。

古代ギリシアの衣装のようなそれは、上半身の片側半分が見えてしまっている。

「も、もうちょっと、露出が少ないのがいいわね！」

アルマロスの肉体は美しく、目立つのでルイズは慌てた。

フムツと考えたアルマロスは、再び指を鳴らし、衣装を変えた。

かつて天使だった頃、身に着けていた質素な衣装になつた。

「うん…。まあいいじゃないかしら？」

「フォン。」

アルマロスは、街に行つたら、この世界の衣装を見て参考にしようと決めた。

## 第四話　喋る剣

翌日、予定通りルイズは、アルマロスを連れて城下町へ行くことにした。

「アルマロス。馬乗れる?」

聞くと、アルマロスは頷いた。

馬の首を撫でながらアルマロスは、軽々と馬に乗つて見せた。

質素な僧侶服のような格好だが、なぜか様になる。

いらぬ心配だつたトルイズは肩を落とし、自分も馬に乗つた。

学院から馬で約3時間走つたところに城下町がある。

馬を駅に置き、二人は歩き出した。

やはりというか予想通りというか、アルマロスは目立つた。

隠しきれない人ならざるオーラもあるのだろうが、質素な服を身に着けていても目

立つた。立ちゆく人たちが必ずと言つていいほどアルマロスを見るのである。

一方でアルマロスは、キヨロキヨロと楽しそうに街を見回していた。その様は、子供のようである。

声を出したいのを必死に抑えているのか、時々口を押えている。

アルマロスを街に連れてきて正解だったのか、不正解だったのか、ルイズは悩んだがアルマロスが楽しそうなので良しとすべきかと思つた。

しかし、ふいにアルマロスが立ち止まつた。

「どうしたの？」

ルイズが声をかけたがアルマロスは、宙を見上げているだけで反応しない。すると、突然アルマロスが路地裏に入つて行つた。

「アルマロス！」

ルイズは慌てて後を追つた。

何かに導かれるように動くアルマロスの後ろを必死に追いかけた。

「アルマロスつてば！ ブツ！」

しばらく歩いて急に立ち止まつたのでその背中に思いつきりぶつかつてしまつた。  
「ちよつと、急に止まらないでよ！」

「？ フォン。」

今氣付いたと言う風にアルマロスが振り向いて声を漏らした。

「どうしたのよ、急に。」

ルイズが聞くと、アルマロスは困つたように頬を指でかいた。

「？　本当にどうしたの？」

アルマロスは、ルイズの手を取り、手のひらに『よく分からぬ』と書いた。

ルイズは、はあつ？ と声を出した。

アルマロスは、キヨロキヨロと周りを見回して、すぐ横にある店を見た。

「ここは、武器屋ね。でも武器なんていらないんじやないの？」

ギーシュの青銅のゴーレムを素手で破壊するほどなのだ、正直武器なんていらないだろうとルイズは思った。

「フォオン。」

それはどうだろうと言いたげに、アルマロスが声を漏らした。

「武器、ほしい？」

聞くと、アルマロスは頷いた。

「じゃあ、買つてあげる。でもあんまり高いのは買えないわ。それでもいい？」

更に聞くとアルマロスは、うんうんと頷いた。

二人は武器屋に入つた。

「らっしゃい。」

店主の男が奥にいた。

「武器を見せてくれる？」

「奥様、貴族の奥様、うちにはまつとうな商売をしてまさあ。お上に目を付けられるようなことなんか、これっぽっちもありまんせや。」

「客よ。」

「こりや、おつたまげた、貴族が剣を！　おつたまげた！」

つと店主はわざとらしくらい驚いていた。

アルマロスは、キヨロキヨロと店に飾られた武器や、束で置かれた武器を見ていた。

『ジロジロ見てんじやねえぜ！』

剣の束を見ていたら、突然店主の声じやない男の声が聞こえてきて、アルマロスもルイズも驚いた。

「誰よ？」

「やい、デル公！　黙つてろ！」

「でるこう？」

アルマロスは、声がした方を探して、乱雑に置かれた剣の束の中を探つた。

『あ、こら！　さわんじやねえよ！』

「フオ。」

アルマロスは、その中から一本の長剣を手にした。

剣は鋒びれており、お世辞にも見栄えが良くない。

しかしデル公と呼ばれたその剣は、アルマロスに柄を掴まれると急に黙つた。

「？」

アルマロスは、その剣をジッと見つめた。

『おめえ……、いや……おかしいな……。なあ、おめえ、左手見せてくれるか？』

言われて、アルマロスは、左手を見せた。

『そつちじやねえ。手の甲だ。』

言われて手の甲を見せた。そこには、ガンダールヴのルーンが刻まれている。すると剣は、今度はブツブツと何かつぶやきだした。

『んなはずねえ……、使い手のはずなのにこれは……、どうしたこつた？』

「フオン？」

『なあ、おめえ、俺を買わねえか？』

「何言つてんのよ。」

ルイズが言つた。

『娘つ子、おめえにや聞いてねえ。なあ、買えよ。おめえ、一応は使い手みたいだからよお。』

「？」

アルマロスは、使い手と言われても分からず首を傾げた。

自分を買えと言つて来る剣に、アルマロスは、しばし考え、剣を持つて店主の所に行つた。

「それでいいの？」

アルマロスは、頷いた。

「これ、いくら？」

「百で結構でさ。」

「あら、安いわね。」

「こつちにしてみりや、厄介払いみたいなもんでさ。」

ルイズは、お金を払い、アルマロスは一緒に渡された鞘と一緒に喋る剣を受け取つた。  
『デルフリンガーつてんだ。よろしくな。』

「フォン。」

『なんでえ、おめえ、喋れねえのか？』

「…フォオン。」

デルフリンガーに言われ、アルマロスは、少し悲しそうに声を出した。

『デルフリンガー…、デルフつて呼ぶわね。』

ルイズがそう言つた。

デルフことデルフリンガーを手に入れたアルマロスとルイズは、店を後にした。

その後、二人と入れ替わりに、キュルケが店に入店し、店一番の剣を格安で手に入れ、店主がやけ酒を飲むということがあつたのは別の話である。

\*\*\*

「どういうことよ！」

学院に帰つてから、ルイズが大声で叫んだ。

「だ・か・ら、ダーリンにプレゼントよ。」

キュルケが、綺麗な装飾の剣をアルマロスに差し出している。

アルマロスは、ポカーンつとしていた。

「ダーリンつて、ちよつと誰のこと言つてんの！　まさかアルマロスのことじやないわよね！」

「他に誰がいるのよ？　ねえ、ダーリン、どうせ剣を使うならこっちの方がいいんじやない？」

「フォ…。」

剣を持つてすり寄つて来るキユルケに、アルマロスはどう対応したらいいか分からずたじろいた。

『ダメだダメだ。そんな見てくればつかの剣なんざダメだぞ、相棒。』

「あら、その剣インテリジエンスソードだつたの？」

『オイ、赤い娘っ子、こいつにや俺がいるんだからそれ持つてさつさとどつか行きな。』  
『私が何をしようと勝手でしょ？ ねえ、ダーリン、ダンス、素敵だつたわ。』

「フォン。』

踊りをしてたのを見られていたのかと、この時やつとアルマロスは知つた。

『ダーリンが夕日の中、水のような衣装を着て踊る姿…、この世のものと思えないほど素敵だつたわ。あたしね、痺れちゃつたのよ。痺れたのよ！ 情熱！ ああ、情熱だわ！』

キユルケは熱弁する。

『あたしの二つ名の微熱はつまり情熱なのよ！ その日からあたしはぼんやりとしてマドリガルを綴つたわ。マドリガル。恋歌よ。あなたの所為なのよ。アルマロス。あなたがあの日からあたしの夢に出てくるものだから、フレイムを使って様子を探つたり……。ほんとあたしつてばみつともない女だわ。そう思うでしょ？ でも全部あなたの所為なのよ。』

「フ、フォオオーン…。』

そ、 そうなの？ つと言ふ風に、 アルマロスが声を出した。 困っている様子である。

そしてチラリッとアルマロスは、 ルイズを見た。

ルイズは、 キュルケの熱弁に呆気に取られていたが、 アルマロスからの視線を助けてほしいという意味ととらえるや否や、 キュルケとアルマロスの間に割つて入つた。

「ちょっと、 ヴアリエール。」

「アルマロスが困つてゐるでしようが、 この色ボケツエルプストー！」

「困つてないわよ、 ねえ、 ダーリン。」

「……。」

『いや、 明らか困つてるだろ。』

デルフリンガードがツッコミを入れた。

それを聞いたキュルケは、 少しショックを受けた様子であつたが、 すぐに目を潤ませて上目遣いでアルマロスを見上げた。

「あたし……、 迷惑だつたかしら……。 でもこの情熱を抑えられないの……、 恋と炎はフオン・ツエルプストー宿命なの。 身を焦が宿命。 恋の業火で焼かれるなら、 あたしの家系は本望なの。 でもダーリンが迷惑なら、 今この一時は身を引くわ。 でも忘れないで、 あたしはあなたを想つてゐることを。」

キュルケは、 目潤ませながら、 剣を持ってサツササート去つていった。

残されたルイズとアルマロスは、しばらく放心していた。

「…だ、大丈夫？ アルマロス。」

「フォオン…。」

先に我に返つたルイズがアルマロスを見上げて聞くと、アルマロスはルイズを見おろして頷いた。

「キュルケの言つたことは忘れなさいね。いつもの手なの…。」

『モテる男は辛いねー。』

デルフリンガーが茶々入れてきたが、うけなかつた。

『あ？ なんだこの微妙な空気はよお。』

微妙にもなる。

だつて、アルマロスは、無性だからだ。

「ねえ、アルマロス。念のため聞くけど、あなたの性別つて……、無性なの？」

念のためルイズは確認した。

するとアルマロスは、頷いた。

分かつたところで、これはこれで困つたものである。

キュルケは、完全にアルマロスを普通に男だと思つているようであるし、アルマロス自身、そういうことに興味がないようなのでただただキュルケからの情愛にどう対応し

たらしいか分からず困っているだけなのである。

「ああ、困ったわねえ。」

よりもよつてキュルケに目を付けられてしまつたことに、ルイズは頭を抱えた。キュルケがちよつと断つたくらいで諦めるような質じやないことは分かつてゐるから厄介なのだ。

「ねえ、アルマロス。嫌ならしつかり断るのよ。いいわね？」  
「フオ…。」

「いい!? しつかり断りなさいよ！ 何度来ても断りなさいよ！」

「フォーン!?」

ルイズが念を押して言つて來たので、アルマロスは、わけが分からずオロオロとした。デルフリンガーがひつそりと。

『モテる男は、辛いねー。』

つと呟いていた。

\*\*\*

夕方、アルマロスは、広場でデルフリンガーを握つて立っていた。  
そして構えて、デルフリンガーを振るつた。

しかし何度も振るつたところで、首を傾げてやめてしまった。

『やつぱしつくりこねえか？』

「フォオン。」

『おつかしいねえ。使い手のはずなのによお。』

「フォオン？」

『あつ？ 使い手が何かつて？ 使い手つてのはよお…、やべえ忘れた。』

デルフリンガーの言葉に、アルマロスはずつこけた。

『まあとにかくどんな武器でも使えんだよ。そのはずなんだけどよお…。しつくりこないんだろう？』

「フォ…。」

『左手のルーンが光つてねえしな…。どういうこつた？』

『言われてアルマロスは、自分の左手を見た。確かにルーンは光つていらない。』

『でもまあ、相棒はもともと武術の達人みたいだしよお、なんとかるとは思うけど、俺としては使いの手の印が使い物にならないってのは気がかりだ。』

デルフリンガーは、頭の隅に置いておけと言う。  
アルマロスは、右胸のルーンを指でなぞつた。

「フォオオン。」

『ん？ 右胸のルーンがなんだって？ そいつは…、やべえ忘れた。』

またも忘れたと言うデルフリンガーに、またアルマロスはずつこけた。

「アルマロスー。ご飯食べに行こう。」

「フォオン。」

ルイズが呼びに来たので、アルマロスはデルフリンガーを納め、ルイズのところへ  
行つた。

## 第五話　　土くれ

土くれのフーケ。

今トリスティンの貴族達を恐怖に陥れている、盜賊の呼び名である。

土くれという二つ名は、固定化の魔法をかけた強固な壁などをたちどころに土くれに変えてしまうほどの強力な鍊金の魔法を使うことから、付けられたものだ。

そのフーケは、現在、トリスティン魔法学院にいた。

本塔にある宝物庫にある、『神の拳（ごぶし）』と呼ばれる宝を狙っているのだ。  
だが魔法学院なだけなり、守りは頑丈だ。

固定化の魔法はかかっていないが、とにかく分厚いのである。

フーケが自慢とする30メートルもある土のゴーレムを使つたとしても壊せそうにないのだ。

これに困ったフーケであるが、お宝を目の前にして諦めるような根性はしていない。  
フーケは、どうするかと考え込んだ。

\*\*\*

アルマロスが、校舎の本塔を見上げていることに、ルイズは気付いた。  
「どうしたの？」

「フオン？」

ルイズに声をかけられて、アルマロスは、ハツとした。

「あそこは本塔よ。どうかした？」

ルイズが聞くと、アルマロスはなんでもないと首を振つた。  
そう言いつつ、アルマロスは、再び本塔を見上げた。  
まるでそこに何かがあるみたいに…。

「本当にどうしたのよ？」

ルイズは、不思議がつたが、アルマロスは答えなかつた。  
その謎は、その夜起つた。

「ねえ、ダーリン。やっぱり受け取つてもらえないかしら？」

「フォオオン…。」

またキュルケに言い寄られて、アルマロスは困った。  
身振り手振りで断っているのだが、キュルケは引かない。

「なにやつてんのよ！」

そこにルイズが駆けつけて、アルマロスはホツとした。

「おじやま虫のヴァリエールが来たわ。」

「誰がおじやま虫よ！ アルマロスが困っているのにしつこいのよ、あんた！」  
照れてるだけよ。ねえ、ダーリン。』

「……。」

『いや、マジで困つてるだろ。』

デルフリンガーがツッコんだ。

「そんなことないわよ！』

「フォオオン…。」

『いやいや、ほんとに困つてるだろ、コレ。』

デルフリンガーの言葉を聞いて、キュルケはショックを受けた。  
ルイズは、勝ち誇った顔をした。

「なによ、その顔！」

「ホントのこと言われて落ち込むあんた顔見れるなんて思わなかつたからね。」

ルイズは、クスクスと笑つた。

キュルケは、カチンツときたのか。

「言つてくれるじゃない‥。」

つと、怖い顔で声を低くして言つた。

「あら？ やる気？」

「決闘？ 望むところよ。」

「二人が杖を出したところで、二人の杖が吹き飛ばされた。

「危険。」

青い髪の少女が杖を構えていた。

こんなところで決闘をするなということらしい。

二人は、憎々しげにお互いの顔を見て、杖を拾い、外へ出た。アルマロスは、心配してその後を追つた。青い髪の少女も向かつた。

本塔の近くの中庭に、ルイズとキュルケ、アルマロスとデルフリンガー、そして青い髪の少女が来た。

「フオオオン。」

アルマロスが、やめとけと言うふうにルイズに話しかけた。

「心配しないで、アルマロス。こいつにだけは負けたくないの。」

ルイズはそう言いつつ、汗をかいていた。

ゼロという不名誉な二つ名を持つルイズは、どんな魔法を使つても爆発で終わつてしまふ。

キュルケは、魔法の使い手としては結構腕が立つ方である。万が一にも勝ち目はない。

だが負けるわけにはいかないと、ルイズのプライドが叫ぶ。

先祖代々恋人を奪われ、戦争ではお互いに殺し合いだつてしてきたライバルの家系であるキュルケにだけは負けたくないのだ。

そして…。

「私だって、アルマロスを守る。」

強く美しく優しい堕天使であるアルマロスに見劣りしないメイジになりたいと、願う自分がいる。

二人が同時杖を抜いた。

その時だつた。

アルマロスがルイズとキュルケを掴んでその場から飛びのいた。

次の瞬間、二人がいた場所に、巨大な土の足が踏み込んでいた。

「なに？ なんなの!?」  
「あれは…。」

本塔の傍に、30メートルはある巨大な土のゴーレムがそびえ立っていた。

普通の服を身に着けていたアルマロスの恰好が、ウォツチャースーツに変わる。ゴーレムの足がアルマロスに迫つた。

アルマロスは、後方に飛び、その足を避けた。

「アルマロス！」

ルイズが叫ぶ。

アルマロスは、体制を整え、ゴーレムを見据えた。

その時、ゴーレムの後ろ。つまり本塔の壁に誰かがいるのを見つけた。

あいつか、つとアルマロスは、狙いを定め跳躍した。

ゴーレムを足場にし、本塔の壁にいる人物目がけて飛んだ。

ロープで顔を隠したその人物は、薄く笑っていた。

アルマロスは、拳を握り大きく振りかぶった。

ロープを纏つたその人物、ゴーレムの操り手は、ヒヨイツと避け、アルマロスの拳が

本塔の壁に当たつた。

拳はめり込み、大きくヒビが入つた。

すると背後からゴーレムの拳がきた。

アルマロスは、壁に張り付き、壁を踏み台にして飛んでその拳を避けた。ゴーレムの拳により、アルマロスが殴ったためにヒビが入つていた本塔の壁が崩れた。

その崩れた隙間に、ローブの人物が入り込んだ。  
地面に着地したアルマロスは、本塔を見上げた。

ローブの人物が逃げていくのを見て、追いかけようとした時、崩れだした巨大なゴーレムの土が降ってきて、下にいたルイズが悲鳴を上げたのを聞いて、そちらに気をとられた。

その隙、ローブの人物は闇に姿をくらました。

その後、騒ぎを聞きつけた教師達により、宝物庫に。

『神の拳。確かに領収いたしました。土くれのフーケ』という字が、壁に書かれているのが発見された。

\* \* \*

翌日。

目撃者であるルイズ達は、学院長室に呼び出された。

魔法学院は大騒ぎであつた。

トリステインを騒がせている盗賊が盗みに入つたのだ。騒がぬ方がおかしい。夜の当直だつたシユヴルーズがさぼつていたとか、大人達は責任のなすりつけ合いで大騒ぎである。

「君達は、あの夜、あの場にいたのかね？」

「はい。巨大なゴーレムが現れ、本塔の壁を破壊していきました。アルマロスが言うには、ゴーレムを操つっていたと思われる人物が壁に張り付いていて、ゴーレムが破壊した穴に入つて行つたのを見たと言つています。」

「そうか…。」

「しかしどうやつて宝物庫の壁を…。」

教師の呟きを聞いて、ルイズは、ビクツと震えた。  
するとアルマロスが拳手した。

「アルマロス…。」

怯えるルイズの頭に、アルマロスは手を置き、微笑んだ。

オスマンがアルマロスを見る。他の教師達もアルマロスを見た。  
アルマロスは、机に指で字を書いた。

『自分が壁を壊したせいだ』と。

「貴様の責任じゃないか！」

「アルマロスは、ゴーレムを操つていてメイジを攻撃しようとただけです！」

教師の非難の声に、ルイズがそう反論した。

「しかし拳での壁を破壊するとはのう…。老朽化で脆くなつておつたかもしれんわ。」

「だが余計なことをしなければ宝物庫への侵入は防げたはずだ！」

そうだそだと周りの教師達が言つた。

「まあ落ち着きなさい。アルマロス殿は、ゴーレムの操り手を発見し、速やかに無力化するために行動したんじや。相手がよつぼどの手練れでなければどんなメイジもたちどころに無力化させておるじやろうて。聞くが、フーケの立場となつて己を考えて見よ、同じ目にあつて青銅のゴーレムを一撃で破壊するほどの拳を避けられる自信はあるかね？」

オスマンの言葉に、教師達は、黙つた。

冷静に考えてみれば、アルマロスの判断は間違つていない。

戦う上でゴーレムを扱うメイジは、メイジ自身を無力化させてしまうのがもつとも有

効的だからだ。

しかもアルマロスは、青銅でできたゴーレムを一撃で破壊するほどの身体能力を持つのだ。そんな奴の拳を喰らつたら、死ねる自信がある。

黙り込んでしまった教師達を見て、オスマンは大きく息を吐いた。

「当直の件といい、ここで責任を擦り付け合つても、盗まれたもんは戻つてこん。」

「オールド・オスマン！」

「おお、ミス・ロングビル。どこへ行つておつたんじや。」

「申し訳ありません。朝から急いで調査をしておりましたので。」

「して、フーケの居場所は？」

「はい。近所の農民に聞き込んだところ、近くの森に廃屋に入つていつた黒ずくめのローブの男を見たそうです。おそらく、彼は……。」

「ちょっと、待ちなさい。」

オスマンがロングビルを止めた。

オスマンの視線の先で、アルマロスが机に指で字を書いていた。

「……女じやないのか？ つと言つておるが……。女じやつたのか？」  
「フオオオン。」

「何？ 胸があつたじやと？ 本当に見たのかね？」

アルマロスは、間近でフーケを見ているので、強く頷いた。

「ミス・ロングビル。見間違えじゃないかのかね？」

「もしかしたらフーケは、女で、農民が見たのは変装している可能性があります。もしく

は、本塔に現れたフーケが変装していたという逆の説もありますわ。」

そう言われて、アルマロスは、考え込んだ。そんなことを言われたら自分が見たのが本当に女だつたかどうか怪しくなつてくる。

「ミス・ロングビル。そのフーケと思われる輩はどこに？」

「ここから徒歩で半日。馬で四時間といったところでしようか。」

「すぐに王室に報告しましょう！」

「ばかもの！ 王室なんぞに知られている間にフーケは逃げてしまうわ！ そのうえ……、身にかかつた火の粉を己で払えぬようで、なにが貴族じや！ 魔法学院の宝が盗まれたのは、魔法学院の問題じや！ 当然、我らで解決する！」

オスマンが迫力ある声でそう怒鳴つた。

ロングビルが、微笑んだ。

その微笑みを見たアルマロスは、はてつ？ つと、ピクリツと眉を動かした。

「では、捜索隊を編成する。我と思う者は杖をあげよ。」  
しかし誰も上げなかつた。

それを見かねたアルマロスが拳手しようと、隣にいたルイズが杖を上げた。

「ミス・ヴァリエール！」

シユヴルーズが驚きの声を上げた。

「あんたは生徒ではありませんか！　ここは教師任せて…。」

「誰もあげないじゃないですか。」

ルイズが言い放つた。

そんなルイズを見て、アルマロスは、微笑み立ち上がつた。

「アルマロス殿。行くのじやな？」

「フォオン。」

もちろんだとアルマロスは笑つた。

「なら私も行くわ。」

「ミス・ツエルプストー！　君は生徒じやないか！」

「ふん。ヴァリエールには負けられませんわ。」

キュルケが杖を上げたのを見て、青い髪の少女も杖を上げた。

「タバサ。あんたはいいのよ。」

「心配。」

キュルケは、そう言つたタバサを感動した面持ちで見た。

オスマンは、息をつき。

「そうか。では頼んだぞ。」

「反対です！ 生徒達をそんな危険にさらすわけには！」

「では、君が行くかね？ ミセス・シユヴルーズ。」

「い、いえ…、わたしは体調がすぐれませんので…。」

「彼女達は、敵を見ている。そのうえ、ミス・タバサは若くして、シユヴァリエの称号を持つ騎士だと聞いているが。」

「本当なの？ タバサ。」

キュルケが驚いて聞くと、タバサは頷いた。

「ミス・ツエルプストーは、ゲルマニアの優秀な軍人を数多く輩出した家系の出で、彼女自身の炎の魔法も、かなり強力と聞いているが？ ミス・ヴァリエールは……、数々の優秀なメイジを輩出したヴァリエール公爵家の息女で、その、うむ、なんだ、将来有望なメイジと聞いているが？ しかもその使い魔は！ グラモン元帥の息子である、ギーシュ・ド・グラモンと決闘して勝つたと言う噂だが。」

「そうですぞ、なにせ彼は、ガンダーワー…。」

言いかけたコルベールを、オスマンが口を押えて止めた。

「ムグつ、は、はい、なんでもありません！ はい！」

「彼らに勝てるという者がいるのなら、前に一步出たまえ。」

誰もいなかつた。

「魔法学院は、諸君らの努力と貴族と義務に期待する。」

ルイズと、キュルケと、タバサは、直立し、「杖にかけて！」つと同時に唱和した。

アルマロスは、そんな三人を見て、それからチラリッと、ロングビルを見た。

そして、フーケのもとに行くための案内役としてロングビルがついていくことになり、馬車に乗つて、問題の廃屋に向かうことになつた。

「ねえ、アルマロス。どうしたの？」

「……。」

アルマロスは、ジツとロングビルを見ていた。

それをおかしいと思つたルイズが話しかけてもアルマロスは答えなかつた。

「まさかダーリン…、ミス・ロングビルのが好みなんじや…。」

「そんなわけないでしょ！」

キュルケの言葉にルイズが反論した。

違うわよね!? つとルイズがアルマロスに聞くと、アルマロスは、ハツとして、キヨトンとした顔をしていた。

「アルマロス…。」

「フオ？」

「…もういい。」

ルイズは、拗ねてそっぷを向いた。

\*\*\*

やがて廃屋近くにつくと、途中から場所を降り、徒歩で向かつた。

「あれがフーケのいる廃屋？」

「誰かが偵察に行かないと…。」

「すばしつこいの。」

タバサがアルマロスを指さした。

言われたアルマロスは、茂みから立ち上がり、足音を立てず、ゆっくりと廃屋に近づいた。

やがて廃屋に入つて行き、しばらくして出てきて、ルイズ達を手招きした。

ルイズ達も廃屋に向かい、チエストの中から盗み出されたと思われる、神の拳を発見

した。

「これが神の拳?」

「……！」

アルマロスは、驚いて口を開けた。

アルマロスは、これを見たことがあった。

「ええ、宝物庫で見学した時に見たことがあるもの。」

キュルケが言った。

アルマロスは、まじまじと神の拳を見つめていた。

その時、地響きが起こつた。

慌てて外に出ると、巨大な土のゴーレムがいた。

「フーケだわ！」

キュルケと、タバサが杖を振るい、炎を、風を起こした。

だが巨大なゴーレムは、まるで意に介さない。

「こんなのどーしろっていうのよ！」

「退却。」

キュルケがお手上げだと声をあげ、タバサが冷静に言つた。

キュルケ達は、一目散に退却したが、アルマロスは、ルイズがいないことに気付いた。

振り向くと、ゴーレムの背後にルイズがいて、ゴーレムに杖を向けてルーンを唱えていた。

そしてゴーレムの表面が爆発し少しだけ削れた。

「フオオオオオン！」

何をやつているんだ！…というふうに、アルマロスが叫んだ。

「あいつを捕まえれば、誰ももう、わたしをゼロのルイズとは呼ばないでしょ！」

アルマロスは、踵を返し、ルイズのもとへ走った。

ゴーレムは、走ってきたアルマロスに向かつて拳を振るつた。

アルマロスは、それよりも早く走り、拳の下を走り抜けると、ルイズの腕をつかんだ。

「離して！」

「フオオオオオオン！」

『娘っ子！　いい加減にしないか！　相手の実力も分かんねえのかよ！』

『ここで逃げたら、ゼロのルイズだから逃げたって言われるわ！』

『言わせとけよ！』

「わたしは貴族よ！　魔法が使える者を、貴族と呼ぶんじゃないわ！

ない者を、貴族と呼ぶのよ！』

ルイズが、杖を振るい魔法を唱えた。

敵に後ろを見せ

だがゴーレムの一部を削つただけで終わつた。

ゴーレムの足がルイズ達を踏み潰そと振り上げられた。

アルマロスは、ルイズを抱きかかえて、飛びのいた。

アルマロスは、ルイズを降ろすと、ゴーレムを見据えた。

た。

土のゴーレムの肩と、腹の横が溶けるように崩れ、ゴーレムのバランスが悪くなつた。

だがやがてゴーレムの体は再生した。

アルマロスは周りを見回し、ゴーレムの操り手を探した。

だが見当たらない。

アルマロスは、ゴーレムを見上げ、やがて、廃屋が目についた。

意を決したアルマロスは、走り、廃屋に入つた。

そして両手に、神の拳という宝を構えた。

ゴーレムが振り向き、拳を振り下ろしてきました。

アルマロスは、跳躍し、ゴーレムの上に乗つた。

アルマロスは、両腕を交差し、神の拳を撫でるように、両手を振るつた。すると凄まじい光が放たれ、鈍い黒い色だった神の拳が光が輝き、神々しい白に変

わった。

「フオオオオオオオオオオオオ！」

アルマロスは、両腕を構え、ゴーレムの頭、肩、胸、腹と、神の拳で殴打した。

凄まじい打撃に、ゴーレムの体が砕け散つていき、ゴーレムはすべて崩れ去つた。

「アルマロス！」

ルイズがアルマロスに駆け寄ろうとした。

だが近寄れなかつた。

ルイズの背後に、ロングビルがいて、ルイズの首を掴んでいた。

「ミス・ロングビル!?」

「動くんじやないよ。」

ナイフが突きつけられ、ルイズは固まつた。

「まさか…、あなたが…。」

「そうだよ。あのゴーレムを操つっていたのは、あたしさ。」

ロングビルは、笑みを浮かべて答えた。

「ルイズ！」

逃げていたキュルケ達が戻ってきた。

「全員杖を捨てな。そつちの使い魔は、その神の拳を、こつちによこしな。」

キユルケとタバサは、仕方なく杖を捨てた。

アルマロスは、神の拳とロングビル…いや、フーケを交互に見た。

「寄越しなつて言つてるんだよ。迷うのかい？」

「アルマロス、だめ！」

「あんたは黙つてな。」

「ぐつ…。」

「フオオオン。」

アルマロスは、神の拳を手から離し、フーケの足元に投げた。

フーケは、ルイズの背中を乱暴に押してアルマロスの方に行かせ、足元に転がった神の拳を拾おうとしやがんだ。

アルマロスは、ルイズを受け止めた。

するとフーケは、目を見開いた。

神の拳が、一瞬にして消え、光の塊になつてしまつたのである。

「なつ…。」

「フオオン！」

その隙に距離を詰めたアルマロスの拳が、フーケの腹部に決まり、フーケは、倒れた。

「アルマロス？　これは…。」

『おでれーた。そんな仕掛けがあつたなんてな。』

倒れたフーケを見おろし、アルマロスは、宙に浮いている、光に手を触れた。すると、神の拳は、元の形に戻りアルマロスの手に収まつた。白く神々しい輝きに、夜目に慣れた目がチカチカした。

「これつてこんな色だつたかしら？」

キュルケが不思議そうに見て言つた。

「違う色。」

タバサが言つた。

『任務完了だろ？』

デルフリンガーが言つた。

アルマロスは、ルイズの傍に來た。

そして、ルイズの頬を軽くたたいた。

「な、なに？」

『おめえが無茶なことしたから、相棒怒つてんだよ。』

「……ごめんなさい。」

ルイズは、涙を浮かべ、謝罪した。

アルマロスは、ルイズの頭を撫でた。

土くれのフーケによる、  
盗難事件は、  
終わつた。

## 第六話 舞踏会

「まさかミス・ロングビルが、土くれのフーケじやつたとはのう。美人じやつたから、何の疑いもせず秘書に採用してしまつた。」

それを聞いた、ルイズ達は呆れた。

オスマンは、コホンッと咳払いした。

「フーケは、城の衛士に引き渡した。そして、神の拳も無事に戻ってきた。一件落着じや。君達には、シユヴァリエの爵位申請を、宮廷に出しておいた。追つて沙汰があるじやろう。と言つても、ミス・タバサは、すでにシユヴァリエの爵位を持つてゐるから精靈勲章の授与を申請しておいた。」

それを聞いて、キュルケは驚き、ルイズも目を見開いた。

「君達は、それだけのことをしたんじやよ。」

「あの…、アルマロスには何もないんですか？」

「彼は、貴族ではない。さて、今夜は、フリツグの舞踏会じや、この通り、神の拳も戻つてきたし、予定通り執り行う。」

「そうでしたわ！ すっかり忘れておりました！」

キュルケがパツと顔を輝かせた。

「今日の舞踏会の主役は君達じや。用意をしたまえ、せいぜい着飾るのじやぞ。」

ルイズ、キュルケ、タバサは、一礼をするとドアへ向かつた。  
ルイズは、アルマロスをちらりと見た。

「お主は、気付いておつたのか？」

オスマンがアルマロスに聞いた。

アルマロスは、机に指で字を書き。

確信はなかつたと書いた。

「そうか……お主も樂しむと良いじやろう。一曲踊つてみてはどうかね？」

「フオ？」

まさかオスマンにも見られていたのかと、アルマロスは、オスマンを見た。

「それと神の拳じやが……あれはお主にやろう。」

「！」

「オールド・オスマン、どういうことですか!?」

「あれは、今までただの物体でしなかつたか。じやが今どうじや？ あんな神々しく輝き、しまいに光の塊になつてしまつた。……あれは、お主が知る物じやないのか？」

「……。」

アルマロスは、机に字を書いた。

あれは、神の叡智、ペイルという武器だと。

「神の叡智か……。お主の世界のか？」

「フォオン。」

「そうか……。ならばやはり、あれはお主の者じや。自由に使いなされ。」

オスマンの言葉に、アルマロスは、頭を下げた。

神の拳、あらため、ペイルは、光の塊となり、縮んで、アルマロスの懷に収まつた。アルマロスが、机に、『どこでコレを？』と書いた。

「それは……、また今度話そう。」

オスマンは、そう言つて話を切り上げた。

ルイズ達が出て行つた後、オスマンは、椅子に深く座り直し。

「まさかアレを扱える者が現れるとはのう……。これも神の御導きなのか……。のう、黒い天使殿……。」

オスマンは、誰に聞くかせるでもなく、独り言をつぶやいた。

\*\*\*

アルヴィーズの食堂の上の階のホールにて、舞踏会が開かれた。美しく着飾つたルイズは、アルマロスを探していた。

「ねえ、アルマロス、知らない？」

「あら、ダーリンと一緒にやなかつたの？」

どうやらキュルケもアルマロスと探していいたらしい。

その時、ホール中の明かりが突然消えた。

「きやつ！ なに？！」

ルイズが驚いて悲鳴をあげた。

するとホールのお立ち台のところが、ライトアップされた。

そこに水のような色の衣装を着たアルマロスが決めポーズを決めていた。

「アルマロス？」

すると聞いたこともない派手な音楽が鳴りだし、アルマロスが踊りだした。

舞うごとに割り増しされたアシッドグレイの髪が、水のような衣装が宙を舞い、呆氣に取られていた生徒達や教師達は、やがてその踊りに魅入られていつた。

見たこともない踊りであつたが、激しく美しい踊りに激しい音楽は、心を打つ。

「素敵……」

キユルケが胸の前で手を組んで、うつとりと見入つていた。

なるほど、キユルケは、この踊りを見て惚れたのかつと、ルイズは納得した。  
音楽が終盤に差し掛かり、アルマロスが最後の決めポーズを決めると、音楽は一度鳴りやんだ。

次の音楽は上品なもので、アルマロスをライトアップする明かりとともに、アルマロスはお立ち台から降り、観客達である生徒や教師達が導かれるように道を開けた。  
優雅に歩く先には、ライトアップされたルイズがいた。

「えつ？　えつ？」

やがてアルマロスを照らすライトの明かりがルイズを照らし、アルマロスがルイズの前に立つた。

そして優雅に跪くと、ルイズの手を取り、軽く口付けた。  
顔を赤くしたルイズを、アルマロスが下から見上げる。

「フオオオオン。」

一緒に踊りましょうつと言いたげに、アルマロスが声をかけた。

パチンつと指を鳴らしたアルマロスの衣装が変わり、ルイズの衣装と並んでも装飾な

い黒いきつちりとしたダンス衣装に変わった。

立ち上がったアルマロスは、小柄なルイズをリードするように手を取り、体を支えた。ルイズは、導かれるままに動いていて、アルマロスと共に踊りだしていた。クルクルとステップを踏み踊る二人に、周りの観客達は魅入り、うつとりとしていた。体格差がありすぎるのにちつともそんなハンデを感じさせない。

教育として叩き込まれていた舞踏会でのダンスについては不安はなかつた。アルマロスに身を預けることにルイズはちども不安はなかつた。

こんなにダンスが楽しく気持ちの良いものだとは知らなかつた。あくまでも教育の一環として身に着けたものだつたから。

やがてダンスは音楽と共に終わりを告げる。

決めポーズを取つた二人を、周りの観客達が盛大に拍手した。それとともに、ホールの明かりが一斉についた。

ハアハアつと息を切らすルイズは、アルマロスを見上げた。

アルマロスは、ちつとも息を切らしていない。

「アルマロス。」

「フォオン?」

「…素敵よ。」

「フォン。」

アルマロスは、笑った。

疲れたルイズをリードして、ホールの隅にある椅子に座らせ、アルマロスはドリンクを取ってきた。

「ありがとう。」

ドリンクの入ったコップを受け取り、一口飲んでルイズは、一息ついた。

「フォオン。」

「大丈夫、大丈夫よ。あんな激しく踊ったの久しぶりだからちよつと疲れただけ。」

心配するアルマロスに、ルイズはそう言つた。

アルマロスは、微笑んだ。

ルイズの手を取り、字を書いた。

『無理をさせてごめん』 つと。

『いいの。私も楽しかつたし。』

「フォオン。」

「ねえ、ダーリン！ 私とも踊つてください！」

そこへキュルケが来た。

アルマロスは、キュルケとルイズを交互に見た。

「行つてくれば？」

「フオン？」

「まだ踊り足りないんでしょ？」

「！」

ルイズは、アルマロスがまだ踊り足りないでいるのを見抜いていた。

アルマロスは、ルイズからの了承を得ると、キュルケの手を取り、ホールの中央へ向かつた。

キュルケとアルマロスが踊ることに、キュルケの取り巻きである男子達もさすがに口出しはしなかつた。

椅子に座つたまま遠目に、キュルケとアルマロスが踊るのを見ているルイズは、こくりつとドリンクをまた一口飲んだ。

『いいのかよ？』

デルフリンガーがルイズの横に立てかけられていた。

『いいの。私疲れちゃつたし。一回ぐらいキュルケと踊つたくらいで怒つたりしないわよ。』

『寛大だね。てつきり絶対許さないつて激昂するもんだと思つたけどよお。』

『主人は時に寛大でなくちゃつね。』

ルイズは、ふふんつと鼻を鳴らした。

『格で言つたら、相棒のが上だつてのによお。』

「けど今は私が主人よ。」

『えらく相棒のことを信用してんだな。』

「なによ？」

『いや…、相棒はあれでも墮天使だぜ？　いつ何が起こつたつて不思議じやないだぜ？　なんでそんなに信用してんだよ？』

「……えつ？」

ルイズは、デルフリンガーの言葉に、ポカンツとした。

そういうえばそうである。

ルイズは、すっかりアルマロスを信用しきつていた。

アルマロスは、人ではない。墮天使だ。

人を愛するあまりに神を裏切り、墮天の道を選んだ天使なのだ。

一度裏切つた者は、次に裏切る可能性があることを教育で受けている。

だけど、なぜこんなにもアルマロスを信用しているのだろう？

そう思つたら、ルイズは、ゾツとした。

ルイズは、アルマロスの方を見た。

アルマロスは、まだキュルケと踊つてゐる。

楽しそうに。

別にあそこにいるのは自分じやなくともよかつたのだ。

自分が彼にとつて主人にあたるから、ダンスの相手になつただけのだろうか？一度疑問を持つと、次から次に疑問が浮かんでくる。

『相棒は自覚してねーみてーだけど、人間を魅了する力を持つてるとと思うぜ。』

かつて、アルマロスを崇め奉つていた人間達がいたと聞いていたが、自分もまたそんな人間の一人になつてしまつていたのだろうか。

ルイズは、スカートの端を掴み、一目散にホールから出て行つた。

『あつ、おい！……けど、一応言つておかなきやなんねーことだつたんだ。悪く思うなよ、相棒。』

キュルケと踊つていたアルマロスは、ルイズがいなくなつてゐることにすぐに気が付いた。

「ダーリン？」

急に踊りを止めたアルマロスに疑問を持つたキュルケが声をかける。

アルマロスは、キュルケをどけて、観客達を割つて、ホールから出て行つた。

「ダーリン！」

キユルケが呼ぶ声を無視して、アルマロスは、ルイズを探しに行つた。

\*\*\*

校内中を走り回つたアルマロスは、やがてルイズの部屋に來た。ルイズは、布団を頭までかぶつていた。

「フォオン？」

「来ないで！」

「！」

アルマロスが声をかけたら、ルイズに強く拒絕された。

「あんたが堕天使だつてこと忘れてた…。あなたは、創造主の神を裏切つて…、いくら人間を愛していたからつて…、なのに私、あなたのこと信用してた…。なんで？　なんでこんなにあなたのことすんなり受け入れてたの？　あなたが何かしたんじやないの？　あなたはそうやって人間を魅了して自分を崇めさせていたんじゃないの？　どうなのよ！」

まくし立てて来るルイズの言葉に、アルマロスは固まつた。

「答えられないでしょ？ 心当たりがあるんでしょ？ ねえどうして？ どうしてあなたは墮天使なの？ どんなに人間のフリしてたって、あなたは人間じやないの！ どうしてなのよ、どうして！」

「……。」

「どうして、そんなに、私に優しいの……？」

「……フォオン。」

「どうして……。」

ルイズのすり泣く声が部屋に響いた。

アルマロスは、ルイズの机の上にあるノートを取り、筆で字を書いた。

そして、それをルイズの傍に置いた。

ノートを置いた、アルマロスは、部屋から出て行つた。

泣いていたルイズは、やがて自分の枕の傍にノートが置いてあるのに気付いた。  
ノートには。

『君は、僕の命の恩人だから』つと、書かれていた。

「……アルマロス。」

アルマロスは、崇められることを望んではいなかつた。

ただ人間が好きだつたから、人間になろうとした。

だがその願いは、禁忌で。

彼は許されなかつた。

そんな彼にとつてルイズは、死の淵から救つてくれた、恩人なのだ。

ルイズに従うのも、全部、彼女を純粹に想うから。

ルイズの目に涙が再び込み上げてきた。

「ごめんなさい……」

ノートを抱えて、ルイズは泣いた。

泣き止んだ後、部屋の外にいたアルマロスに声をかけ、アルマロスを部屋に入れた。

「ねえ、アルマロス。」

「フォン？」

「また踊つてくれる？ 私と一緒に。」

そう聞くと、アルマロスは、微笑んで頷いた。

## 第七話　風と水

フリッグの舞踏会以来、アルマロスは大人気となつた。

最近じや、ダンスの講師みたいなことまでやつてゐるくらいだ。

ルイズは、むーっと口を膨らませていた。

「なに膨れてるのよ、ルイズ。」

「別に！」

キュルケに向かつて、ルイズは怒鳴つた。

アルマロスが、前に進む動作のようでいて、後ろに下がるという奇怪なダンスを披露

すると、アルマロスのもとに集まつていた生徒達が、おおーっと声を上げた。

ぜひやり方を教えてくれと教えを乞う彼らに、アルマロスは、筆談で教えていた。

「すごいわよね、ダーリンつてば。一夜でヒーローじゃない。」

「あんな奇怪なダンス見たことないわよ。」

アルマロスのダンスは、このハルゲニアでは、見たこともないものだつた。

娯楽の踊りのようでいて、儀式の踊りのようにも見える。前に進むようでいて、後ろに進むという動作だつて16年生きてきたルイズとて見たことも聞いたこともなかつた。

やはり彼は、この世界の堕天使ではないのだと改めて考えさせられた。  
アルマロスが、後ろに倒れた動作から、手を使わず起き上がるという動作までしてみせた。

アルマロスが人間じやないからできることだと思われたが、鍛えてコツさえ掴めば誰でもできる動作だと説明。実際やつてみると、できる生徒がいたことにも驚かされた。

踊るのも、教えるのも本当に楽しそうで、ルイズは、ますます膨れた。

やがて授業の時間になり、生徒達は解散し、ルイズはアルマロスを連れて教室に入つた。

\*\*\*

今日の授業の講師である、ギトーという男が入つてきた。

ギターは、アルマロスが視界に入ると、憎々しげな顔を一瞬した。

アルマロスが宝物庫の壁を破壊したことを一番に責めたのも彼である。

「？」

睨まれたアルマロスは、首を傾げた。

そして授業が始まった。

「最強の系統とはなにか、知っているかね？」

「虚無じやないですか？」

「伝説の話をしているわけではない。現実的に答えるのだ。」

虚無と聞いても、アルマロス的にはよく分からなかつた。

このハルゲニアには、虚無を含め、土、風、火、水の五つの系統があるらしい。

その中で虚無というのは伝説にしか語られていない系統であることを、ルイズの部屋でルイズの教科書などを読んだアルマロスは、知識として得ていた。

するとキュルケが、火こそが最強だと不敵に言つたことに対し、ギターが違うと答えた。

彼が言うには、風こそが最強の系統なのだと言ふ。

「そこの、ミス・ヴァリエールの使い魔君に、なぜ風が最強なのか実証させよう。」

「な、なにを言つてるのでですか！ ミスター・ギター！」

ルイズがギョツとして叫んだ。

「たしかアルマロスといったね。こちらに来てはくれないかね?」

「フオオオン?」

アルマロスは言われるまま、教室の前に来た。

「試しに私を殴つてみたまえ。」

「?」

「どうした怖いのかね?」

ギターが挑発する。

アルマロスは、仕方なくといった様子で拳を振つた。

すると、ギターは杖を素早く抜き、風を起こした。

しかし…。

ポコンツと、いうふうに、軽く、かるく、アルマロスの拳がギターの頬を打つた。

「なつ…。」

ギターは予想外な事体に目を見開き、頬を押えた。

「全然ダメじゃないですか、ミスター・ギター。」

キユルケの言葉に、生徒達は笑つた。

「こ、こんなはずじゃ…。ならば、これならばどうだ!」

血管を浮かせたギターが呪文を唱えだした。  
するとギターの姿が三人に別れた。

「見たか！ これこそが風の偏在！ 風が最強と呼ぶにふさわしい所以だ！」  
「……。」

アルマロスは、さすがに驚いたのか口を開けていた。

「さあ、どう出る、使い魔！ さすがにこれではおまえも……。」

しかしアルマロスは焦ることなく、両手から水球を分身の数だけ浮かせた。

「むつ？」

ギターが気付いた時には、アルマロスは水のエネルギーを投げつけていた。

バシヤンバシヤンと水のエネルギーが跳ね、風の偏在だけが大きく揺らぎ、跳ねる水で呼吸を遮られたギターが悶えた。その隙について、接近したアルマロスがギターから杖を奪つた。

杖を奪われた途端、風の偏在はすべて消え、残されたのは、びしょびしょになつたギターだけだった。

「み…水…？」

「あら、最強の系統は水ということですね。すごいわ、ダーリン！ 水まで操るなんて。」

キユルケが大きく拍手すると、他の生徒達も拍手した。

拍手を受けたアルマロスは、優雅にお辞儀をした。

「すごい…。」

ルイズも驚いた。

そういうえばアルマロスが、水のようなものをフーケのゴーレムに投げつけていたのを今思い出した。あれで30メートルもあるゴーレムが大きくえぐれていたのも思い出した。

アルマロスの武器は、武術だけじやなかつた。

ギターは、長い髪の毛から水を滴らせて、ブルブルと怒りに震えていた。

アルマロスの情けない姿を曝してやろうとしたら、逆に恥をかかされてしまつた。しかし不可解だつた。最初に起こした風の壁がアルマロスに当たる前に消えてしまつたのだ。だがしかし、そのことを考えられるほどギターには余裕がなかつた。

と、その時。

教室の扉が開かれ、コルベールが入ってきた。

しかし、恰好がおかしい。

なんか違う。主に頭が。

「おや？ ミスター・ギター、どうしたのですか、びしょ濡れですよ？」

「う、うるさい！」

コルベールに言われて、カツとなつたギトーが煩わしそうにハンカチで必死に濡れた顔を拭きだした。

「授業中ですよ！ 何の用ですか！」

「あわわわわ！ これは失礼しますぞ！ オホンッ。今日の授業はすべて中止です。」

いきなりの宣言にギトーだけじゃなく、生徒達も驚いた。

コルベールが言うには、アンリエッタ王女が来るから授業は中止だということらしい。

「フオオン？」

「アリンエッタ姫殿下は、このトリステインで一番偉い人よ。分かる？」

ルイズに説明を求めたアルマロスは、うんうんと頷いた。

授業は中止となり、生徒達は正装するため解散となつた。

\*\*\*

「アンリエッタ姫殿下のおな——り——ツ！」

やがてユニコーンに引かれた馬車が魔法学院の門に入ってきた。

まず馬車からマザリーニが出てきて、  
続いてアシリエッタが登場した。

すると大歎苦があがつた。

彼女はよっぽど人気があるのだろうなど、離れた位置から見ていたアルマロスは思つ

た。

「ふん、なによ、私の方が美人だわ。ねえ、ダーリン。」

「フオ?」

「もう！ ダーリンつてば、聞いてたの？」

「アルマロスにそんなこと求めないでよ。」

「あら、ダーリンはあなたの使い魔でも、女を選ぶ権利はあるわよ?」

「だからアルマロスは、無性だから、そういうこと分かんないのよ。」

「性別があろうがなかろうが、関係ないわよ。ねえ、ダーリン。」

「：フオオオン。」

『相棒が困つてゐるぞ。』

デルフリンガーがアルマロスの気持ちを代弁した。

困っていたアルマロスだが、ふとルイズが何かを一点に見つめているのに気づいた。

視線の先を見ると、羽帽子を被った凜々しい貴族がいた。アルマロスの目から見ても、かなりの腕利きであることが伺えた。

その人物をボーッと見ているルイズ。

しかも頬を微妙に染めている。

まあ、あのような男を見れば普通の女性ならば見惚れるだろうとアルマロスは思つた。それほどにいい男だつたのだから。

そして、その夜。事件は起ころる。

\*\*\*

羽帽子の男を見てからのルイズは、ずっと上の空だった。アルマロスは、そんなルイズを心配した。

声をかけても返事をしてくれない。

羽帽子の男に惚れ込んでしまったのだろうか？

しかしそれにしては…。つと思つていると、扉を叩く音がした。

初めに長く2回、それから短く3回。

ルイズがハツとして、大慌てで扉を開けた。

そこには、黒いずきんをまとつた少女がいた。

「あなたは…？」

すると黒いずきんの少女が杖を振るつて魔法を使つた。

「ディティクトマジック？」

「ど」に耳が、目が光つているか分かりませんからね。」

少女はそう言つた後、ずきんを外した。

「お久しぶりです。ルイズ・フランソワーズ。」

「姫殿下！」

なんと、少女の正体は、昼にやつてきた王女、アンリエッタ、その人だつた。

「ああ、ルイズ！ ルイズ、懐かしいルイズ！」

アンリエッタはルイズを抱きしめた。

「姫殿下、いけません！ こんな下賤な場所へお越しになられては！」

「ああ、ルイズ、ルイズ・フランソワーズ！ そんな堅苦しい行儀はやめてちょうどいい！」

あなたとわたくしはお友達！　お友達じやないの！」

どうやら見知った間柄らしいなつと、アルマロスは思った。

それもお友達いうからには、幼いころから遊んでいた仲なのだろうと思つた。

「あら？　そちらの方は？」

「彼は…、その…私の使い魔です。」

「まあ、ルイズつてば、昔からどこか変わっていたけど、相変わらずね。」

「ええ…、まあ…。」

言えない。アルマロスが堕天使だなんて言えない、つとルイズは、ダラダラと汗をかいた。

アルマロスは、汗をダラダラかいているルイズを見てハラハラしていた。やはり国の一一番偉い人を前にしたら死にそうなほど緊張するのだろうと思つた。  
するとアンリエッタがため息を吐いた。

「どうされましたか、姫殿下？」

「いえ、なんでもないわ。ごめんなさいね……。いやだわ。自分が恥ずかしいわ。あなたに話せるようなことじやないのに、わたくしつてば…。」

「おっしゃつてください。あんなに明るかつた姫様が、そんなふうに溜息をつくとは、なにかとんでもないお悩みがおありなのでしょう？」

「いえ…、話せません。忘れて頂戴、ルイズ。」

「いけません！ 昔はなんでも話し合つたじやございませんか！ わたしをお友達を呼んでくださつたのは姫さまです！ そのお友達に悩みを話せないのですか？」

「わたくしをお友達と呼んでくれるのね、ルイズ・フランソワーズ。とてもうれしいわ。アンリエッタは、嬉しそうに微笑み、そして決心したように頷いて語りだした。

「今から話すことは、誰にも話してはなりません。」

それを聞いたアルマロスは、退室しようと動いた。

「大丈夫ですか、使い魔殿。メイジにとつて、使い魔は一心同体、席を外す理由はありません。」

そう言つてアンリエッタは、アルマロスを引き留めた。

それからアンリエッタは、もの悲しい調子で語りだした。

彼女はもうすぐゲルマニアに嫁ぐこと。

それは、トリステインとゲルマニアの同盟の為であること。

アルビオンという国で貴族たちが反乱を起こし、今にも王室が倒され、トリステイン

に攻め込んできそうなこと。

「そうだつたんですか…。」

ルイズは、沈んだ声で言つた。

「いいのよ、ルイズ。好きな相手と結婚するなんて、物心ついたときから諦めていますわ。」

それは上に立つ者の宿命ともいえるだろう。

アルマロスも真剣にアンリエッタの話を聞いていた。

「礼儀知らずなアルビオンの貴族は、わたくしの婚姻をさまたがえるための材料を血眼になつて探しています。もし見つかってしまったら……。」

「まさか……姫様……。」

「おお、始祖ブリミルよ……、この不幸な姫をお救いください……。」

アンリエッタは、顔を両手で覆い、床に崩れ落ちた。

ちょっと動作が大きさというか、芝居がかっている。つと、アルマロスは思った。

「言つてください、姫様！　いつたい、姫様のご婚姻をさまたげる材料とはなんなんですか！」

「……わたくしが以前したためた一通の手紙なのです。」

「手紙？」

「それがアルビオンの貴族達に渡つたら……、彼らはすぐにゲルマニアの皇室にそれを届けるでしょう……。」

「どんな内容に手紙なのでしょう？」

「それは言えません……。」

「同盟が潰れるほどの内容なのだ、よっぽどのことなのだろうとアルマロスは思った。  
「その手紙はどこに？」

「それは手元にはないのです。実は、アルビオンにあるのです。」

「アルビオンですって！ では、すでに敵の手中に？」

「いえ……、その手紙を持っているのは、アルビオンの反乱勢ではありません。王家の  
ウエールズ皇太子が……。」

「プリンス・オブ・ウェールズ？ あの凜々しい皇太子が……。」

ルイズが言うと、アンリエッタは、のけ反り、ベットに横たわった。

一々動作が芝居がかっているな……と、アルマロスは思つた。

「ああ、破滅ですわ！ 遅かれ早かれ、ウエールズ皇太子は敵に囚われるわ！ そうした  
らあの手紙も明るみに出てしまう！」

アルマロスは、アンリエッタが何を言いたいのか、なんとなく察した。

ようするに、アルビオンに行つて、その手紙を取つてきてくれということらしい。

ゲルマニアがいかなる国なのかは分からぬが、同盟を結ばなければマズイほど世界  
情勢はよくないらしい。

そしてアルビオンの貴族達というのも、かなりの危険な連中らしい。

そんな状況に誰かを行かせるなんて、力モがネギしよつて行くようなものだ。下手する手紙が敵の手に渡る可能性が高い。むしろ死ぬ可能性が高い。

「アルマロス……」

「フォオーン？」

ルイズの言葉でハツとしたアルマロスは、ルイズの懇願するような目を見た。

ルイズが言いたいことは言われずとも分かつた。

ルイズは、アンリエッタの願いを叶えたい。だが一人ではできない。そのためにはアルマロスの力が絶対に必要だ。

アルマロスは、両手をすくめ。

「フオオオオオン。」

「アルマロス……いいの？」

ルイズが確認するとアルマロスは、頷いた。

「ありがとう、アルマロス！」

ルイズは感極まつて、アルマロスに抱き付いた。

「明日の朝にでも、ここを出発します。」

アルマロスから離れたルイズが、アンリエッタに言つた。

アンリエッタは、アルマロスを見た。

「頼もしい使い魔さん……。わたくしの大切なお友達をこれからもよろしくお願ひしますね。」

「フォオン。」

「……あの、そのお声は、どうしたのですか？」

「いえ、姫様……、アルマロスは、このような声しか出せないのでです。」

「まあ、そうなのですか？」

アンリエッタは、そう言つて口元を押さえた。

すると、アンリエッタは、左手を差し出した。

アルマロスは、それを見て、すぐに察した。

アンリエッタの前に跪き、その手に口付けた。

「貴様……、姫殿下に何してやるか――！」

そこへ、扉から転がり込んできた人物がいた。

ギーシュだつた。

「ギーシュ!?　まさかあんた立ち聞きしてたの!?」

ルイズが慌てて聞くと、ギーシュはキリッと立つてポーズを決めた。

「薔薇のように目麗しい姫様のあとをつけてきてみれば……、こんなところへ……。それで鍵穴からまるで盗賊のように様子をうかがえば……。」

ギーシュは、心底羨ましそうにまだ跪いているアルマロスを見た。

「フオオオン？」

「姫様のお手を…、お手を…。羨ましいじゃないか！　ちくしょう、決闘だ！」

半狂乱のギーシュが、薔薇の杖を振り回した。

アルマロスは、立ち上がつて、ギーシュを掴み床に抑え込んだ。  
それからルイズを見上げて、どうする？ つと視線で問い合わせた。

「今の話を聞かれたのは不味いわね…。」

「姫殿下！　その困難な任務、是非ともこのギーシュ・ド・グラモンに仰せつけますよ  
う。」

「グラモン？　あのグラモン元帥の？」

「息子でござります、姫殿下。」

「あなたもわたくしの力になつてくれるというの？」

「任務の一員に加えてくださるなら、これはもう、望外の幸せにござります。」  
ギーシュもこの危険な任務に加わることになつた。

アンリエッタは、ルイズの部屋の机を借り、手紙を書いた。

そして最後の一行。決心したように何かを加えた。

その手紙をルイズに渡し、さらに。

「母君から頂いた水のルビーです。せめてものお守りです。お金が心配なら売り払つて旅の資金にあててください。」

アンリエッタは、右手の薬指から指輪を引き抜き、それをルイズに渡した。

危険な旅が始まろうとしていた。

# 第八話 疾風のワルド

朝もやの中、ルイズとアルマロス、そしてギーシュは、馬の準備をしていた。ルイズは、乗馬用の靴を履いている。かなりの遠乗りになるようである。

「すまないが……、僕の使い魔を連れて行つていいかい？」

「使い魔？　どこにいるのよ？」

「……さ。」

ギーシュは、地面を指さした。

するとギーシュは、足で地面をたたいた。

すると、モコモコと地面が盛り上がり、顔を出したのは、大きなモグラだつた。

「ヴエルダンデ！　ああ、僕の可愛いヴエルダンデ！」

ギーシュは、愛おしそうにそのモグラを抱きしめた。

「あなたの使い魔、ジャイアントモールだつたの？」

「そうだ。ああ、ヴエルダンデ、君はいつも見ても可愛いね。困つてしまふね。どばどばミミズはいっぱい食べてきたかい？　そうか、それはよかつた！」

嬉しそうに鼻をひくつかせるヴエルダンデを、ギーシュは、また抱きしめてスリスリと頬ずりをした。

アルマロスは、よつぱどこのモグラのことが好きなんだなつと、ギーシュとヴエルダンデを見ていた。

「ねえ、ギーシュ、ダメよ。その生き物、地面の中を進んでいくんでしょ？ 私達はこれからアルビオンに行くのよ。地面を掘つて進む生き物を連れて行くなんて、ダメよ。」  
アルマロスは、それを聞いて、はてつ？と思つた。地面を掘り進んでいけないなんて、アルビオンとはどんなところなんだろうと思つた。

ギーシュは、地面に膝をつき。

「そんな…、お別れなんて辛い。辛すぎるよ…。」

「つと、泣きそうな声でブツブツと言つてはいる。」

すると、ヴエルダンデは、鼻をクンクンとさせて、ルイズにすり寄つて行つた。

「な、なによ、このモグラ…。キヤつ！」

突然ヴエルダンデは、ルイズを押し倒して鼻で体をまさぐりだした。

「や！ このモグラ、どこ触つてるのよ！ 助けてアルマロス！」

「フオオオオーン！」

アルマロスはヴエルダンデの首根っこを掴んでルイズから引き離した。

しかしヴエルダンデは、ジタバタと暴れ、アルマロスの手から逃れると、またルイズにすり寄つた。

ヴエルダンデは、ルイズの右手、彼女の薬指にある水のルビーにクンクンと鼻を寄せた。

「なるほど、指輪か。ヴエルダンデは宝石が大好きだからね。」

「フオオオン！」

「怒らないでくれたまえ。ヴエルダンデは僕のために貴重な宝石や鉱石を僕のために見つけてくれるんだ。土の系統のメイジの僕にとつて、この上もない素敵な協力者なのさ。」

その時、一陣の風がヴエルダンデを吹き飛ばした。

「ヴエルダンデ！ 誰だ！」

ギーシュが激昂した。

見ると、そこには羽帽子の男が立っていた。

あの羽帽子には見覚えがあつた。

「僕のヴエルダンデに！」

ギーシュが薔薇の杖を掲げた。

しかしそれよりも早く、羽帽子の男が杖を引き抜き薔薇の杖を吹き飛ばした。

「僕は敵じゃない。姫殿下より、君達に同行することを命じられてね。しかし、しかしお忍びの任務であるゆえ、一部隊をつけるわけにわいかぬ。そこで僕が指名されたわけだ。」

男は、羽帽子を外し、一礼した。

「女王陛下の魔法衛士隊、グリフオン隊隊長、ワルド子爵だ。」

ギーシュは、それを聞いて目を見開き、そして項垂れた。

魔法衛士は、全貴族の憧れであるからだ。ギーシュも例外ではない。

「すまない。婚約者がモグラに襲われているのを見て見ぬふりはできなくてね。」「ワルド様…。」

アルマロスは、ワルドという男と、ルイズを交互に見た。

ああ、なるほどっと、ポンッと手を叩いた。

だからルイズは、彼に見惚れていたのか。婚約者だつたのなら致し方ないつと思つた。

「久しぶりだな、僕のルイズ。」

しかも僕のルイズときたものだ。ワルドは、ルイズを抱きかかえた。

「相変わらず軽いね、まるで羽のようだ。」

「…お恥ずかしいですわ。」

ルイズは、頬を染めた。

そんなルイズは、アルマロスは、ニコニコ笑つて見ていた。

こんな素敵な男が婚約者にいたなんて、すごいじやないかと純粋に思つてゐるのだ。それからルイズは、ワルドに促されて、アルマロスとギーシュを紹介した。

「使い魔が人とは思わなかつたな。」

「えつと…あの…。」

「だがただの人間ではないね…。」

ワルドが目を細めた。

アルマロスは、普通の服を身に着けており、ウォツチャースーツは着ていない。しかし滲み出る人ならざるオーラは隠しきれていないのだ。

ルイズは、ドキリツとした。

墮天使だなんて言えない。だがいづれはバレる。今この場で言えばいいのかどうするか、ルイズは悩んだ。

アルマロスは、ルイズの手を取り、話してもいいよつと書いた。

「？ 彼は喋れないのかい？」

「はい…。」

「フォオオオオオン。」

「！」

「……こんな声しか出せないんです。」

「驚いた…。急に聞いたらびっくりするよ。」

「そうですよね…。」

だがルイズは、アルマロスが墮天使だとは言えなかつた。

アルマロスは、そのことを気にかけたが、ルイズが言いたくないのなら仕方ないと思つた。

「では、諸君。出撃だ！」

ワルドは、ルイズを抱えたままグリフオンに乗り、出発の合図をした。

アルマロスも、ギーシュも馬に乗り、グリフオンの後に続いた。

\* \* \*

出発してみると……。

まあしんどいのなんのつて…。

グリフォンに乗ったワルドが全然止まってくれないのである。

アルマロスは大丈夫だが、ギーシュが大変だ。

途中の駅で、何度も馬を乗り換えたほどだ。すでにギーシュは、馬の背にぐつたりと乗っている状態だ。どう見ても限界そうだ。

「フォオオオオ！」

アルマロスが大声を上げて前を進むグリフォンに訴えた。

「ねえ、ワルド。ペースが速すぎるわ。ギーシュがへばつてる。限界よ。」

「ラ・ローシエルの港町まで、止まらずに行きたいんだが……。」

「無理よ、普通は馬で二日かかる距離なのよ？」

「へばつたら置いていけばいい。」

「そういうわけにはいかないわ！」

「どうして？」

「だって仲間じやない？。それに使い魔を置いていくなんて、メイジのすることじやないわ。」

「やけにあの二人の肩を持つね。どちらかが君の恋人かい？」

「恋人なんかじやないわ！」

ルイズはすぐ否定した。

「そうかならしいんだ。婚約者に恋人がいるなんて聞いたら、ショックで死んでしまうよ。」

「フオオオオオン！」

更にアルマロスが訴える声を上げた。

「ねえ、本当に休みましょうよ。」

「頑張つてくれってエールを送つてやつてくれ。」

「うう……、アルマロス、ごめん！ ギーシュがんばつて！」

どうしても止まってくれそうにないワルドに、ルイズは申し訳ない気持ちで一杯になり、後ろにいる二人に向かつてそう叫ぶしかできなかつた。

それを聞いたアルマロスは、ギーシュを心配しながら馬を走らせ続けた。

\*\*\*

馬を何度も乗り換々、月ももう空に浮かんだ夜。辿り着いたのは、山道だつた。

「？」

確か港町に行くと言つていたはずだが、港がある場所じやない。水の匂いがしない。  
かといつて潮の匂いもしない。

「君はアルビオンを知らないのかい？」

「フォオン。」

ギーシュの言葉にアルマロスは頷いた。

その時、アルマロスは、嫌な気配にハツとした。

横の崖から松明が何本も飛んできて、道を照らした。  
いきなり飛んできた松明の炎に、馬が驚いて、アルマロスとギーシュを放り出した。  
そこへ矢が飛んでくる。

アルマロスは瞬時にベイルを出すと、ギーシュの上に降り注ごうとした矢を防いだ。

「すまない！」

「フォオン！」

いいから逃げろという風にアルマロスは叫んだ。

さらに降り注ぐ矢の雨。

すると小さな竜巻が起こり、それを防いだ。

「大丈夫かね！」

「大丈夫です！」

グリフォンに乗つて駆けつけてきたワルドに、ギーシュが答えた。

「まさかアルビオンの貴族の仕業？」

「いいや、貴族なら弓矢は使わないさ。」

疑問を飛ばすルイズに、ワルドがそう言つた。

すると、バサバサという大きな羽音が聞こえてきた。

崖の上にいる者達が慌てる声が聞こえた。

彼らは、攻撃対象を竜に向けたが、風が起こり彼らは崖から落ちて來た。

しこたま背中を打ち付けた彼らは、呻き動けなくなつた。

「あれは…、風竜！ タバサなの!?」

ルイズが叫んだ。

すると風竜から飛び降りて来る人間がいた。キルケだつた。

「おまたせ！」

「おまたせじやないわよ！ なにしに來たのよ!?」

「朝方窓から見たらあなた達が馬に乗つて出かけようとしてたのを見たのよ。それで急いでタバサを叩き起こして後をつけてきたの。もうダーリンがいるからびっくりしちやつて居ても立つても居られなかつたのよ。」

「フォオン…。」

すり寄つて来るキュルケに、アルマロスは、困つた顔をした。  
ルイズは慌ててグリフオンから降り、アルマロスを掴んでキュルケから引き離した。

「これはお忍びなの！ あんた達はお呼びじゃないのよ！」

「それならそうと言ひなさいよ。助けてあげたんだから感謝してよね。」

「誰が…。」

「あんたを助けたんじゃないわ。ダーリンを助けに来たの。それと…。」

キュルケはワルドを見た。

「おひげが素敵。あなた、情熱はご存知？」

「助けは嬉しいが、これ以上近寄らないでくれたまえ。」

「なんで？ どうして？」

「婚約者が誤解するといけないからね。」

「なあに？ あんたの婚約者だつたの？」

つまらなさそうに言いながらキュルケがルイズを見た。

ルイズは、アルマロスの斜め後ろで恥かしそうにもじもじとしだした。

「あ、違うのよ。ダーリン。あたしつてばついつい…。一番は、あなたよ？」

「フォオン…。」

そんなことを言われても信用ならない。キュルケの移り気は相当なものだというのをこの短期間で十分知つたつもりだ。

サリエルだつたなら、あらゆる女性の一面を受け入れたうえで愛するのだろうが……。ああ、今思えばサリエルつてすごかつたんだなあ……と、アルマロスはもの思いにふけていた。

それから襲つて来た者達に尋問したギーシュが、彼らがただの物取りだと主張しているのを聞きだし、ワルドが捨て置こうと言つて、一行はラ・ローシエルの街へ入つた。街に入つてみて、やつぱり船がないなあ……と、アルマロスは、街を見回して思つた。

\*\*\*

ラ・ローシエルの一番の宿を借り、一階の酒場でくつろぐ一行。

「アルビオンへの船は、明後日にならないと出ないそうだ。」「急ぎの用なのに……。」

ルイズは、唇を尖らせた。

「ねえ、ダーリン。酔つちやたわー。」

そう言つてアルマロスの腕にしなだれかかつて来るキュルケ。

「アルマロス！ 嫌ならちやんと断るのよ！」

「フォオオン…。」

「やだ、ダーリンつたら、ちょっとくらい腕貸してくれてもいいでしょ？」

そう言わると断りづらくなる。

別に嫌いでないから困るのだ。

「アルマロスつてば！」

「まあまあ、ルイズ。」

「ダメ！ ダメよ！ きちんと断らなきやずつと付きまとわれるわ！ そんなんでいい

の!?」

「！ フォオオン！」

「きやつ！ だ、ダーリン…。」

少し強引にアルマロスは、キュルケを引き離し、立ち上がった。

キュルケは、戸惑い目を潤ませた。

その目に罪悪感が湧くが、ここで強く出ないと本当にずっと付きまとわれてしまふだ  
ろうからアルマロスは我慢した。

「ごめなさい…、ダーリン。もうしないから許して？」

「フォオーン？」

本當かというふうにアルマロスが声を出した。

「本當よ？ 許してくれる？」

「フォオーン。」

「よかつた！」

キュルケは、喜び、笑顔でアルマロスに抱き付いた。

「この色ぼけキュルケ！ 何してんのよ！」

キーツと怒ったルイズが、キュルケとアルマロスを引き離そうとして、間に入ろうとした。

「やれやれ…、使い魔君はずいぶんと好かれているんだね？」

「フォオーン…。」

呆れて言うワルドの言葉に、困ったアルマロスが声を漏らした。

「さて、そろそろお開きにして、部屋で休もう。」

そう言つてワルドは、鍵束を机に置いた。

「タバサとキュルケは、相部屋。ギーシュとアルマロスは相部屋。そして、僕とルイズは相部屋だ。」

それを聞いてルイズは、慌ててワルドを見上げた。

「だ、ダメよ！ 私達まだ結婚もしないのに…。」

「大事な話があるんだ。一人きりで。」

ワルドはそう言つた。

「えー、私ダーリンと一緒がいいわあ…。」

「危険。」

「冗談よ。」

タバサに手を掴まれ、キルケはそう返した。それを聞いて、アルマロスは内心ホツとした。

ルイズは、アルマロスを見た。

「？」

何か言いたげなルイズに、アルマロスは、キヨトンつとした。

だが結局ルイズは何も言わず、ワルドと共に自分達の部屋へ行つてしまつた。

\*\*\*

翌朝、ギーシュとアルマロスの相部屋に、ワルドが訪れた。

「やあ、使い魔君。おはよう。」

「フォオン?」

「君は、伝説の使い魔ガンダールヴなんだろう?」

「言われてアルマロスは、自分の左手を見た。

「たしかこれがガンダールヴというルーンだつたはずだ。」

「フーケを捕えるのに君は大きく貢献したと聞いている。それで興味を持つたんだ。それで調べてみたらガンダールヴに行き着いた。僕は、君の腕に興味がある。どうだろう? ひとつ手合わせを願えないかい?」

「フォオン!?

つまり戦えということかと、驚いたアルマロスは、両手をあげて首を横に振った。

「君は人間ではないのだろう? そんなに気を使わなくていいんだ。」

「!」

「それに君の立ち姿、佇まいといい、素人じやない。かなりの達人と見ている。僕も魔法衛士隊長として腕に自信はある方だが、どうかね? 使い魔とは、主人を守る者だ。婚約者の使い魔が弱くては困るのだよ。」

「……フォオオン。」

アルマロスは、ワルドをまっすぐ見据えて、本当にいいのかというふうに声を出した。

「もちろんだとも。戦つてくれるね？」

ワルドが聞くと、アルマロスは、頷いた。

ワルドは、微笑み、戦う場所へアルマロスを案内した。

場所は、昔鍊兵場だつた所だ。

そこになぜカルイズがいた。

「ワルド……来てつていうから来てみたけど、これはどういうことなの？」

「彼と手合わせをしようと思つてね。君には介添え人になつてもらいたい。」

「なつ……！」

ルイズは大きく目を見開いた。

「だ、ダメよ！ ワルド、ダメよ！ アルマロスもなんで了承してんのよ！」

「彼を責めないでやつてくれ、こうなるよう仕向けたのは僕なんだ。」

「とにかくダメよ！ 風を操るギター先生でも手も足も出なかつたのよ！」 いくらワル

ドが疾風の二つ名を持つてるからって……。」

「ほう、そうなのかい？ それはますます興味が湧いたよ。ぜひとも戦いたい。」

「フォオオン。」

「アルマロス、ダメ！」

「では、介添え人も来たことだし、初めよう。」

ルイズは、あわあわと二人を交互に見た。

アルマロスは普通の衣服のまま構えた。

「おや？ 武器を使わないのかね？」

「フォ？」

「ガンドールヴは、あらゆる武器を操つたと聞く。剣を持っているのなら武器を使ってほしいのだが……。」

『仕方ねえな。相棒、俺を使え。』

アルマロスは、しぶしぶデルフリンガーを抜いた。

しかしガンドールヴのルーンは反応しない。

それを見たワルドは、眉を寄せた。

アルマロスが動いた。

ワルドは、ハツとしてすぐに杖を抜いてアルマロスからの一撃を受け止めた。

「くつ、重いな……。」

「フォオオオン！」

「だが君はどうやら武器は得意じやなさそうだね。嗜みはあるようだが。」

「フオオオオオン！」

ワルドの杖と、アルマロスが振るうデルフリンガーがぶつかり合う。それは殺し合いではなく、試合だつた。

お互に急所は狙わず、互いの腕を確かめ合うそれだ。だが身体能力の差からワルドが若干押されていた。

「そこまで！ もうやめて！」

「……やめよう。」

「フオオオン…。」

ワルドとアルマロスは、互いの武器を納めた。

「分かつたでしょ、ワルド！ アルマロスは強いのよ！ だつてアルマロスは…。」

「人間じやないか…。」

「つ…！」

ズバリ言われ、ルイズはぎくりつとした。

「君は一体何者なんだい？」

「フオオン…。」

アルマロスは、ワルドの手を取り、そこに指で字を書いた。

自分は墮天使だと。

「だ、墮天使！」

「アルマロス！ その…ワルド…。」

ルイズは、焦つた。

「驚いたね…。だが本当に墮天使なのかい？ そんなふうには全く見えないよ…。嘘じやないかい？」

ワルドが疑うと、アルマロスは、ブンブンと首を振つた。

「しかし身体能力は人間のソレを遥かに超えていくようだし…、本当なんだろうね。だがあまり触れて回らない方がいいだろう。このことは黙つておくよ。」

「ワルド…。」

ルイズは、ホツとした。

アルマロスが墮天使だということが広まつて、もしアカデミーにでも知られたら…。

ルイズは、アルマロスを見上げた。それに気づいたアルマロスもルイズを見た。  
「アルマロス…、自分の正体のことはあまり人に言わないで。ね？」  
「フォオン…。」

でも…つと言いたげにアルマロスが声を漏らした。  
「あなたに何かあつたら私…。」

俯ぐルイズの頭に、アルマロスは手を置いて撫でた。

その優しい手つきが、大丈夫だ、問題ないと言つてゐるようで、ルイズは、涙が込み上げてくるのを感じて我慢した。  
そんな二人を、ワルドは見ていた。

# 第九話 アルビオン

その夜。ベランダで月を眺めていたアルマロスのところに、ルイズが来た。

「？」

しかし何も言つてこないルイズは、しばらくアルマロスと並んで月を眺めていた。  
「ねえアルマロス……。ワルドから結婚しようつて言われたわ……。」

「フォオン。」

それはとてもおめでたいことじやないかと思つたが、ルイズの横顔はすぐれなかつた。

「返事は出してないわ……。」

「フォオン？」

どうして？つというふうにアルマロスが聞くと、ルイズは、アルマロスを見上げた。  
何か言いたげな……、何か言つてほしそうな顔をしている。

しかしアルマロスは、言葉を持たない。何を言つてほしいのかも分からなかつた。  
その時、アルマロスは、ハツとした。

月が陰つた。

巨大なゴーレムによつて。

「あれはゴーレム!」

「フォオオン!」

アルマロスがゴーレムの肩の上を指さした。

そこにいたのは、フーケだつた。

「フーケ!? 投獄されてたはずじや…。」

「覚えててくれてたのね?」

フーケが笑つた。

「親切な人がね、私みたいな美人はもつと世の中のために役立たなくてはいけないつて  
言つて、出してくれたの。」

フーケいるゴーレムの肩の反対側の肩には、白い仮面をかぶつた男がいた。

フーケを脱走させるのを手伝つた輩であろうか?

「素敵なバカソスをありがとうつて、お礼を言い來たのよ!」

狂的に笑つたフーケが操るゴーレムの拳がベランダを粉々に碎いた。

アルマロスは、それよりも早くルイズを抱えて飛びのいていた。

そのまま部屋を駆け抜け、一階へと駆けだした。

下に降りると、下も下で修羅場だつた。

ラ・ローシエル中の傭兵が襲い掛かつてきているのか、キュルケ、タバサ、ギーシュ、ワルドが石の机を盾にして、応戦していた。

「ダーリン！」

キュルケが叫んだ。

アルマロスは、瞬時にウォツチャースーツに変わると、矢の雨の中を駆け出し、傭兵の軍団に襲い掛けた。

鎧を碎くほどの威力を持つ打撃が、弓矢や剣よりも早く浴びせられ、次々と傭兵達が倒れていく。

あまりの速さに、強さに、傭兵達が後退しだした。

「いまだ！ 裏口へ！」

「アルマロス！」

ルイズがアルマロスの名を叫ぶ。

アルマロスは、床を殴り、水の壁を作つた。

その隙に、後ろへ駆け出し、ルイズ達の後を追つた。水の壁はすぐに止み、傭兵達が背後から追つて來た。

「まずいわ、前方からも敵が…。」

「…」のような任務は、半数が辿り着けば成功とされる。」

ワルドが言つた。

「囮。」

タバサが言つた。

タバサの指が、キュルケ、ギーシュを指さした。

「ううむ、仕方ないか…。ここで死んだら、姫殿下にも、モンモランシーにも会えなくな  
る…。」

「どうせ私はなんでアルビオンに行くか知らないもんね。」

それを聞いたアルマロスは、自分も残ろうと動こうとしたが、ルイズの手がアルマロ  
スの腕をつかんだ。

「君はルイズの使い魔だ。」

「！」

「いいね？」

アルマロスは、俯き、すぐに顔を上げた。

ワルドとルイズとともに走り出した。背後で凄まじい爆音や破壊音が聞こえて来た。  
飛んでくる矢は、ワルドが風の壁を作つたり、アルマロスがベイルで防いだ。

\*\*\*

桟橋というから、そこに船があると思つたら、全然違つた。とにかく大きな木がそこにあつた。

枝の先を見ると、そこに船が吊るされていた。  
えつ？ つとアルマロスは思つた。

「水に浮かぶ船もあれば、空を飛ぶ船もあるのよ。」

アルマロスが呆気に取られてゐるのを見たルイズがそう説明した。  
そして木の根元から中に入り、階段を駆けあがつた。  
するとそこへ、白い仮面の男が飛んできた。

「フォオオオオン！」

「アルマロス！」

アルマロスは、ルイズを庇い、白い仮面の男にベイルを振るつた。  
男が杖を構え、ベイルを防ごうとしたがベイルの先端が触れた途端、  
男の体がかき消えた。

「？」

「消えた……」

「走るんだ！」

ワルドの叫びで我に返つた二人は、再び走り出した。

アルマロスは、少し後ろ髪を引かれるような気持ちで走つた。やがて枝の一つに辿り着き、そこに吊るされた船には船員達と思われる人間達がいた。

寝ていた彼らを起こし、船長を呼び、交渉して多額の賃金を渡して、船を出航させた。

「……。」

「アルマロス？」

「フオオオン……。」

おかしいつと、いうふうにアルマロスは声を出した。

ベイルが触れた途端、消えてしまつた白い仮面の男。

あれは……。

ふと、先日戦つたギトーを思い出した。

彼は、風の魔法を使つて、分身を作つていた。

まさかつと、アルマロスは思つた。

しかしそうだとすると本体は？ 何が目的でつと考えていると、アルマロスの手を、  
ルイズが掴んだ。

「アルマロス。敵はもう振り切れたわ。」

「フォオオン…。」

「明日にはアルビオンにつく。今はそれだけ考えましょ。」

ルイズの言葉を聞きながら、アルマロスは、離れていくラ・ローシエルの街を見おろした。

あそこにいる、キルケ達は無事だろうか。そのことだけを思つた。

\*\*\*

甲板の端で座り込んで寝ていたアルマロスは、太陽の光で目を覚ました。  
空はすっかり青空で、船は白い雲の上を進んでいた。

空を飛ぶ船…、それはアルマロスの世界にはなかつたものだ。  
ああ、やはりこの世界は自分がもといた世界と理が違うつと改めて思つた。

「アルビオンが見えたぞ——！」

船員の声を聞いて、見るが、どこにも陸地はない。

「あそこよ。」

ルイズが来て空を指さした。

そちらを見てアルマロスは、驚いて口を開けた。

「フオオオン……」

まさに圧巻だった。

巨大な、そう、まさに大陸が空に浮かんでいた。

大陸から流れる川だろうか、滝があり、下まで落ちることなく途中で霧になつていて。

その霧が雲となり、アルビオンの下を覆つていた。

「アルビオンはね、通称白の国つて呼ばれているわ。」

ああ、確かに納得だとアルマロスは頷いた。

アルビオンの下の方の雲が白くて、確かに白の国と呼ぶにふさわしいだろう。

すると、船員が叫んだ。

右舷から船が来ると。

アルマロスは、嫌な予感がしてベイルを装備した。

「空賊だ！」

そんな叫び声が聞こえて、やはりかとアルマロスは思い、ルイズを守るように立つた。慌てる船長に、ワルドが魔法は打ち止めだと落ち着き払つて言い、空賊からの命令に従つて停泊することになった。

空賊の船が横にくつつき、空賊達がこちらに武器を向けて來た。

アルマロスは、いつでも動けるようベイルを構えた。

「やめたまえ、いくら君が早くても、向こうの大砲がこちらの船を碎くのが早いだろう。挑発しないように武器を下ろしてくれ。」

ワルドに頼まれ、アルマロスはしぶしぶベイルを外した。

すると一人の派手な空賊が甲板に降りて來た。

「船長はどこでえ。」

「私が：船長だ。」

震えていて、精一杯の威厳を保とうとしながら船長が手を上げた。  
「船の名前と積み荷は？」

「トリステインのマリー・ガラント号。積み荷は、硫黄だ。」「船ごと買つた。料金はてめえらの命だ。」

それを聞いて船長は屈辱で震えた。

「おや、貴族の客まで乗せてんのか？」

そう言つて空賊がルイズの頸を掴んだ。

「フオオン！」

アルマロスがその手を払いのけた。

「いつてえな。」

空賊は、プラプラと手を振るつた。

アルマロスは、空賊を睨んだままルイズを空賊から遠ざけるように前に立つた。

「いい度胸じやねえか。貴族の飼い犬君。」

「フォオオ…」

「アルマロス、落ち着いて。」

「そうだ。ここで君が暴れたら全員、船ごとハチの巣だ。」

それを聞き、アルマロスは、空賊を睨んで拳を握つた。

空賊は不敵に笑うばかりで意に介さない。

「てめえら、こいつらも運びな。たんまりと身代金をふんだくつてやる。」

ルイズ達は、船倉へ移動させられた。

ワルドとルイズは杖を取り上げられ、アルマロスは、デルフリンガーを取り上げられ

た。ベイルは光になつて消えたため取られていない。

しかし多勢に無勢。しかも空の上。

た。

「メシだ。」

すると扉から空賊の男がスープの入った皿を持ってきた。

扉の近くにいたアルマロスが受け取ろうとすると、ヒヨイツと持ち上げられた。

「質問に答えてからだ。」

「お前達、アルビオンに何の用だ？」

「旅行よ。」

ルイズは、腰に手を当てて毅然とした声で言つてのけた。

「トリステインの貴族が今時のアルビオンに旅行？ いつたいなにを見物にするつもりだい？」

「そんなことあんたなんかに言う必要ないわ。」

「強がるんじやねえぜ。」

空賊は笑い、皿と水を寄越した。

一つの皿からスープを三人で飲んだ。

飲み終ると、本当にやることが無くなる。

ワルドは、壁に背を預けて何かもの思いにふけていた。

ルイズは、体操座りで顔を伏せていた。

アルマロスは、座り込んで、暇なので鼻歌を歌いだした。

「あんた…、歌もうまいのね…。」

「フオ？」

「…もつと歌つてて。」

ルイズに言われるまま、アルマロスは、鼻歌を歌い続けた。

「こんな状況で鼻歌たあ、お気楽なこつたな。」

すると扉が開いた。

「おめえら、もしかしてアルビオンの貴族派かい？」

ルイズ達は答えない。

「おいおい、だんまりじやわかんねよ。」

空賊が言うには、空賊達は貴族派と商売しており、王党派に味方する者達を捕まえる密命を帯びているという。

「じゃあこの船は反乱軍の軍艦なのね？」

「いやいや、俺達は雇われてるわけじやあねえ。あくまで対等な関係で協力し合ってい るのさ。で、どうなんだ？ 貴族派だつたならきちんと港まで送つてやるよ。」

「誰が薄汚いアルビオンの反乱軍なものですか！」

ルイズは言つた、自分達は、王党派への使いだと、トリスティンの大使として来たのだ  
と、空賊に向かつて大使として扱うよう要求した。

アルマロスは、ポカンツとした。

状況的に不味くないかつと思つた。

空賊は笑い、お頭に伝えに行つた。

ああ、このままじや空から放り出されるかもつと思うと、ルイズだけでも無事に地上  
に降ろしてやらねばと考えを巡らせた。

もしもの時は……。

アルマロスは、ギュツと拳を握つた。  
すると空賊が戻つてきて言つた。  
お頭が呼んでいると。

\*\*\*

狭い通路を通り、三人が連れていかれたのは、船長のいる立派な一室だつた。頭と思われる男。ルイズの顎を触った派手な空賊が杖を弄つて上座の椅子に座り、周囲には、空賊達がいてニヤニヤ笑つてゐる。

「おい、お前達、頭の前だ。挨拶しろ。」

ルイズは、従わざキッと睨んでいた。

「気の強い女は好きだぜ。子供でもな。さてと名乗りな。」

「大使としての扱いを要求するわ。」

「王党派と言つたな？」

「ええ、言つたわ。」

「なにしに行くんだ？　あいつらは明日にでも消えちまうよ。」

「あんたらに言うことじやないわ。」

「貴族派につく気はないかね？　あいつらはメイジを欲しがつてゐる。たんまり弾んでくれるだろうさ。」

「死んでもイヤ！」

アルマロスは、強気なルイズを見て、氣付いた。

ルイズは、震えていた。怖いのだ、怖くとも真っ直ぐにお頭の男を見ている。

「もう一度言う。貴族派につく気はないかね？」

「フォオオン。」

「うお、なんだおまえ、変な声出すなよ。」

「彼は私の使い魔よ。」

ルイズは、胸を張つて言つた。

「使い魔？」

「使い魔よ。」

ルイズの言葉に頭は笑つた。大声で。

「トリステインの貴族は、気ばかり強くってどうしようもないな。まあ、どこぞの国の恥知らずどもより何百倍もマシだがね。」

ワハハハつと笑つた頭の豹変ぶりに、ルイズ達は顔を見合せた。

「失礼した。貴族に名乗らせるなら、こちらから名乗らなくてはな。」

そう言つて、頭は、黒髪を剥ぎ、眼帯を取り、髭をビリツと剥いだ。

現れたのは、凜々しい金髪の若者だつた。

「私は、アルビオン王立空軍大将、本国艦隊司令官……、本国艦隊といつても、すでに本艦イーグル号しか存在しない無力な艦隊だがね。まあ、その肩書きよりもこちらのほうが通りがいいだろう。」

若者は、威風堂々と名乗つた。

「アルビオン王国皇太子、ウェールズ・チューダーだ。」

なんと空賊のお頭だった男は、これから会いに行こうとしていたウェールズ皇太子、その人だつた。

ウェールズは、につこりと魅力的な笑みを浮かべ。

「アルビオン王国へようこそ。大使殿。さて、ご用の向きをうかがおうか。」

あまりのことには、すぐに反応できなかつた。

# 第十話　亡国と墮天使

なぜウエールズが、空賊を装っていたのか。

簡潔にまとめると…。

「いやあ、大使殿には誠に失礼を致した。しかしながら、君達が王党派ということが中々信じられなくってね。」

ウエールズは試すようなマネをしてすまなかつたと、謝罪した。

そこまで言つてもルイズはまだ口をポカンとさせていた。

急に目的の皇太子が目の前に現れたのだ。心の準備ができていない。

「アンリエッタ姫殿下より、密書を言付かつて参りました。」

代わりにワルドが優雅に頭を下げて言つた。

「ふむ姫殿下とな。君は?」

「トリステイン王国魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵。そしてこちらが姫殿下より大使の退任を仰せつかつたラ・ヴァリエール嬢と、その使い魔でございます。殿

下。」

「なるほど！　君のような立派な貴族が私の親衛隊に十人ばかりいたら、このような惨めな今日を迎えることもなかつたろうに。して、その密書とやらは？」

言われてルイズは、慌てて手紙を取り出した。

そして恭しくウエールズに近づこうとして途中で止まつた。

「あ、あの…。」

「なんだね？」

「その、失礼ですが、本当に皇太子さま？」

それを聞いたウエールズは笑つた。

「まあ、さつきまでの顔を見れば、無理もない。僕は、ウエールズだよ。なんならその証拠をお見せしよう。」

そう言つてウエールズは、ルイズの右手の指にある水のルビーを見ながら言つた。するとウエールズは、自分の右手の指輪を外し、ルイズの手を取り、水のルビーに近づけた。

すると二つの石は共鳴し合い、虹色の光を振りまいた。

「この指輪は、アルビオン王家に伝わる、風のルビーだ。君のはめているのはアンリエッタがはめていた水のルビーだ。そうだね？」

ルイズは頷いた。

「水と風は、虹を作る。王家の間にかかる虹さ。」

「大変、失礼をばいたしました。」

ルイズは、一礼して手紙をウェールズに渡した。

ウェールズは、手紙を開き、読み始めた。

やがて顔を上げ。

「姫は結婚するのか？　あの愛らしいアンリエッタが。私の可愛い…、従弟が…。」

そう呟くウェールズに、ワルドが頭を下げて肯定した。

「了解した。姫は、あの手紙を返してほしいとこの私に告げている。何より大切な、姫から貰った手紙だが、姫の望みは私の望みだ。そのようにしよう。しかしながら今は手元はない。ニューカッスルの城にあるんだ。多少面倒だが、ニューカッスルまで足労願いたい。」

こうしてニューカッスルの城へ向かおう事になつた。

しかし真っ直ぐにはいかない。

ジグザグに進み、やがて雲の中から巨大な船が現れた。

その船がかつて、ロイヤル・ソルヴリンと呼ばれた船だったが、今では貴族派に奪われ、レキシントン号と呼ばれていると説明された。

それからはまさに空賊のように見事な指示で、空を飛び、敵が知らない秘密の港に船を置いた。

そこは鍾乳洞で、コケが光っている。

ウェールズに促されて、ルイズ達は船を降りた。

それからウェールズとルイズ達を出迎えた老メイジが、ウェールズからマリー・ガラント号に積まれていたのが硫黄だと説明をうけると、それはそれは喜んだ。彼らは言つた。

これで王家の誇りと名誉を、示しつつ、敗北できると。

彼らはすでに敗北することを心に決めたうえで、戦つて散ろうとしているのだ。

アルマロスは、ここにいる者達を見渡し、それを感じ取り、拳を強く握つた。

ルイズも顔色を悪くしている。若い彼女にとつて敗北による死はおそらく夢のまた夢のような話だつただろう。

ルイズ達は、パリーというその老メイジに歓迎され、最後の戦いに向けた最後の祝宴に招かれることになった。

ニューカツル城へ案内されたルイズ達は、ウエールズの部屋へ案内された。

そこに問題の手紙があるらしい。

その部屋は、皇子の部屋とは思えないほど簡素だつた。

ウエールズは、机から宝石が散りばめられた小箱を出し、その箱の鍵を開けた。箱の内側には、アンリエッタの肖像画が描かれている。そこに一通の手紙が入つていた。

何度も読み返したのだろう。手紙はボロボロで、ウエールズは、愛おしそうに手紙に口づけ、手紙を読み返した。

それから手紙を丁寧にたたみ、封筒に入れると、ルイズに渡した。

「このとおり、確かに返却したぞ。」

「ありがとうございます。」

ルイズは、深々と頭を下げた。

それからウエールズは、明日イーグル号が非戦闘員を乗せて出航するから、それに乗つてトリステインに帰るようにと言つた。

ルイズは、躊躇いがちに、聞いた。

王党派に勝ち目はないのかと。

ウェールズは、首を振つた。

ウェールズ達は、300。敵は5万。とてもじゃないが方に一にも勝ち目がないのだ  
と。

本当にギリギリだつたのだと、アルマロスは思つた。

あと少し遅かつたらウェールズは、死んでいた。手紙も敵の手に渡つていただろう。  
ルイズは、聞こうとした。

ウェールズとアンリエッタは、恋仲だつたのじやないかと。

ウェールズは、微笑んだ。

手紙の内容が恋文であること。アンリエッタが永久の愛をウェールズに誓つている  
ことを。

それはそれは、愛おしそうに。切なそうに。

「殿下、亡命なさいませ！」

ルイズが叫んだ。

しかしウェールズは、首を横に振つた。

それでもルイズは懇願した。亡命してくれと。生きてくれと。

アルマロスは、そんなルイズを見て、辛そうに目をそらした。

「君は正直な女の子だな。ラ・ヴァリエル嬢。正直で、真っ直ぐで、良い目をしている。

忠告しよう。そのような正直では大使は務まらぬよ。しつかりしなさい。」

ウェールズは、微笑んで、ルイズの肩を叩いた。

「そろそろパーティーの時間だ。君達は我らが王国が迎える最後の客だ。是非とも出席してほしい。」

ルイズとアルマロスは、退室し、ワルドは居残つて、一礼した。

「まだ何か御用かな？」 子爵殿。」

「恐れながら殿下にお願いしたい議がございます。」

「なんなりと伺おう。」

ワルドは、ウェールズに自分の願いを語つた。

「なんともめでたい話じやないか。喜んでお役目を引き受けよう。」

ウェールズは、につこりと笑つた。

\*\*\*

明日滅びるというのに、華やかなパーティーだった。

ルイズとアルマロスは、会場の隅で、パーテイーを見ていた。

「明日でお終いなのに…、随分と派手なものね…。」

「フォオーン…。」

「終わりだからこそ、ああも明るく振る舞つてはいるのだ。」

ワルドが来て、そう言つた。

すると貴婦人達の歎声があがつた。ウエールズが登場したのだ。

あれだけ凜々しい男が現れたら、どこでも人気があるだろう。

それからは、誰も暗いことを一言も言わず、笑い、歌い、飲み、食い、華やかなパーティーとなつた。

アルビオン万歳つと叫ぶ彼らの声。

ルイズは、この場の空気に耐えられなくなつたのか、外へ行つてしまつた。

アルマロスは、すぐにその後を追おうとした。

するとワルドがアルマロスの肩を叩いた。

「明日、僕はルイズとここで結婚式をあげる。」

「フォオーン？」

「是非とも、僕たちの婚姻の媒酌を、あの勇敢なウエールズ皇太子にお願いしたくなつてね。皇太子も快く引き受けてくれた。決戦の前に、僕たちは式を挙げる。」

「……。」

アルマロスは何も言わなかつたし、何も言えなかつた。彼は声を持たない。

「君も出席してくれるかい？」

「フォオン……。」

自分はルイズと共にあるのだと、いうふうに、ワルドを見て、アルマロスは声を出した。

「そうか。頼もししい使い魔だね。君は。」

その一声で何が言いたのか察したワルドは、笑つた。  
そしてアルマロスは、ルイズを追つて去つた。

\* \* \*

暗い廊下を小走りで進んでいくと、ルイズを見つけた。

「フォオオン。」

「アルマロス……。」

ルイズがハツとしてアルマロスを見た。

ルイズは、泣いていた。

ルイズは、ふらふらとアルマロスに近づき、ポスツとアルマロスに抱き付いた。

「嫌だわ…、あの人達…。どうして死を選ぶの…？」

アルマロスは、ルイズを見おろした。

「ねえ、アルマロス…、あなたはどう思う？ 人間のために人間が死ぬの…、誇りだとか、名誉だとかのために、死ぬの。貴族だとか王族だとか、そんなもののために死んでいくの…。私だって口じやヴァリエール家のためだとか、名誉だとか言つても、怖いわ…。なのにあの人達は…。」

アルマロスの腰に手を回しているルイズの手に力がこもる。

「あなたの世界の人間はどうだつたの？ あなた達墮天使のために命を捧げたりしたの？ アルビオンの王党派のあの人達のように死んでいつた人達もいたんでしよう？」

それでもあなた達は墮天してよかつたつて思つてたの？ ねえ、……答えてよ。」「フオオオン…。」

言葉を失つているアルマロスは、ルイズの頭を撫でた。

自らの死の意味を選べることも、また可能性の一つなのだと、そう言いたかつた。でも、言えなかつた。

「トリステインに帰りたい……この国嫌い。あの皇子様もよ……、残される人達のことなんて考えてないんだわ。」

アルマロスに顔を押し付けて、泣きながら呟き続けるルイズの頭を、アルマロスは撫で続けた。

「アルマロス……、アルマロスう……。」「フォオン……。」

確かめるように名前を呼んでくるルイズに、アルマロスは返事を返した。

明日、ウエルズ達は死ぬ。

人間の儚さに触れ、アルマロスの目から、一筋の涙が零れた。

ルイズは、そのことに気付かなかつた。

# 第十一話　墮天使の怒り

始祖ブリミルの像がある礼拝堂。

そこにワルドとルイズが入場した。

ルイズの頭には、永遠に枯れぬという新婦の冠、新婦にしか許されないマントが羽織らされていた。

アルマロスは、礼拝堂の端でその様子を見ていた。結構離れている。

ルイズは、ちらりとアルマロスを見る。

アルマロスはその視線に気が付いていなかつた。

「では、式を始める。」

正装したウエールズが式の開始を告げた。

「新郎、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。汝は始祖ブリミルの名において、このものを敬い、愛し、そして妻とすることを誓いますか。」

「誓います。」

「新婦、ラ・ヴァリエール公爵三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール……。」

ウェールズが朗々と詔を読み上げる。

ルイズは、そんな中でも、またちらりとアルマロスを見た。アルマロスは、嬉しそうにルイズ達を見ている。

彼は祝福しているのだ。純粹に。

ルイズは、考えた。

なぜ自分は、ラ・ローシエルの宿でアルマロスに言葉を求めたのか。

それは……。

「新婦？」

ウェールズの言葉で、ルイズは、ハツとした。

「緊張しているのかい？」

ワルドが言つた。

違うつと、ルイズは思つた。

「まあこれは、儀礼にすぎぬが、儀礼にはそれをするだけの意味がある。では、繰り返そう。汝は、始祖ブリミルの名において、このものを敬い、愛し、そして夫と……。」「誓えません。」「ルイズ？」

ここにきて、やつとアルマロスは、ルイズの異変に気付いた。

「どうしたんだい、ルイズ。気分が悪いのかい？」

「違うの…。ごめんなさい。ワルド…、私…あなたと結婚できない…。」

ルイズは、フルフルと首を振った。

「新婦はこの結婚を望まぬか？」

「そのとおりでございます。御二方には大変失礼をいたすことになりますが、わたくしは結婚を望みません。」

ウェーレズは困ったように首を傾げ、ワルドを見た。

「子爵、誠に氣の毒だが、花嫁が望まぬ式をこれ以上続けるわけにはいかぬ。」

「……緊張しているんだ。そうだろルイズ。君が僕との結婚を拒むわけない。」

「ごめんなんさい。ワルド。憧れだつたのよ。もしかしたら、恋だつたのかも知れない。でも今は違うわ。」

するとワルドがルイズの肩を掴んだ。

「世界だ、ルイズ。」

ワルドの口調が、表情が変わった。

「僕は世界を手に入れる。そのためには君が必要なんだ！」

「ワルド？」

遠目に見ていたアルマロスは、ワルドの様子もおかしいことに気付いた。嫌がるルイ

ズに無理やり詰め寄っている。

「君の能力が！　君の力が、必要なんだ！　ルイズ、いつか言つたことを忘れたか！　君は始祖ブリミルに劣らぬ、優秀なメイジに成長するだろう！　君は自分で気づいていいだけだ、その才能を！」

「ワルド…！」

「この旅で、君の気持ちを掴むために、随分と努力したんだが…。」

ワルドがルイズから手を離し、首を振った。

ルイズが視線をアルマロスに向けた。

アルマロスは駆けだししていた。

「僕の目的は、ひとつ、ルイズ、君だ。二つ、君が持つている手紙。そして、三つ目…。」

ウェールズがハツとして杖を出して詠唱しようとした。

だがそれよりも早く、魔法を完成させたワルドの青白く輝く杖が、ウェールズの胸を貫いた。

ルイズが悲鳴を上げた。

眼前だつた。

アルマロスは、目を見開いた。

鮮血を散らし、倒れるウェールズ。

「フ  
……。」

アルマロスの唇が震えた。

アルマロスの絶叫が礼拝堂に響き渡りビリビリと震わせた。

アルマロスは瞬時にベイルを装着すると、その先をワルドに振るつた。

ワルドは、とんでもないスピードでそれを避け、ベイルは、ブリミルの像を破壊した。

アルマロスは、それどころじやなかつた。

「最初の手合わせの時は加減したが、本気で相手をさせてもらうぞ！」

ベイルを振るい続け、ワルドに襲い掛かる。だがすべての攻撃を避けられてしまう。

魔法によつて強化されたスピードでベイルを避けていく。

杖の切つ先がベイルを握るアルマロスの手に当たり、ベイルの片方が弾き飛ばされ

た。

「その武器は威力はあるが、鈍いな！」

「フオオオオオオオオオン!!」

アルマロスはベイルを捨てて、素手でワルドに殴りかかつた。

ワルドは、輝かせた杖でその拳を受け止め、瞬時に魔法を完成させて放つた。だがアルマロスに命中した魔法は、消えた。

「チツ、やはり魔法は効き目がないか。ならば！」

ワルドは、杖で応戦しながら術を唱えた。

「ユビキタス・デル・ウインデ…」

するとワルドの姿が本体と合わせて五人に増えた。  
ギターとは比べ物にならない力の現れるである。

「あの時、貴様に我が偏在を消された時は、正直焦ったよ。」

そう言つてワルドの分身の一人が、白い仮面を出した。

あの時現れた白い仮面の男はワルドだつたのだ。いや、正確にはワルドの偏在、分身だつたのだ。

魔法を無効化するアルマロスが触れた途端消えたのはそのせいだつたのだ。

「だがすべての魔法を無効化できるわけであるまい！」

五人のワルドがそれぞれ杖で攻撃、または魔法を使いだした。

凄まじい稲妻。ライトニング・クラウドがさく裂したが、煙の中からすぐに無傷のアルマロスが飛び出した。

四方八方から杖の攻撃がきたが、アルマロスはすべてを受け流す。

「くつ、さすが堕天使か！」

やがて偏在のひとりがアルマロスの拳を喰らつて消えた。

「だがこれはどうかな!?」

「キヤアアアア！」

「フオオオン!?」

ハツとして振り向いた時、ワルドの偏在の一人がルイズを捕えていた。

「動くな、堕天使！」

ワルドの杖の切つ先が、アルマロスの首に刺さつた。

さらに、三人のワルドからライトニング・クラウドが放たれ、吹き飛ばされたアルマロスは、崩れたブリミル像の上に倒れた。

「アルマロス！」

「ルイズ、今からでも遅くはない。僕と来てはくれないかい？」

「！ い、いや！」

「そうかそれならば、仕方がない……。」

ワルドの放つた風の魔法で、ルイズの体が吹き飛ばされ床に転がつた。

「う……。」

「残念だよ。ルイズ…。」

「……アルマロス…。」

ワルドの杖の切つ先がルイズに振り下ろされようとした。  
だがならなかつた。

ワルドの杖が半分に斬れた。

「なつ…。」

ワルドが横を見た時、アルマロスがそこに立つていた。

湾曲した、弓矢のような形状の、ギザギザの刃を持つ巨大な刃を持っていた。

アルマロスは、薄黒いその刃に手を触れ、撫でるように手を動かした。

すると刃が光り輝き、目をつむるほど光によつて白く輝きだしたその刃のギザギザ  
がひとりでに回転のこぎりの刃のように動き出した。

「それは…!?

「フォオオオオオオオオオオオン!」

アルマロスが刃…、神の叡智・アーチを振るつた。

ワルドが飛びのいた途端、他のワルドが斬られ、消えた。そしてワルドの横腹が切れ  
て出血した。

「ぐ……！ その武器はいつたい…。」

ベイルとは比べ物にならない速度で振るわれたそれをワルドは、避けきれなかつた。

「フオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！」

アルマロスがワルドに迫つた。

ワルドは、代わりの杖を出して応戦しようとした。

アーチの、巨大な刃の、凄まじい速度で繰り出される斬撃の雨は、ワルドの左腕を斬り落とした。

「がああああああ！　こ、この疾風のワルドが…遅れを取るとは…。」

その時、凄まじい轟音と共に、天井が崩れた。

「間もなく我がレコン・キスタの大群が押し寄せる！　ほら！　馬の蹄と竜の羽音が聞こえるだろう！」

確かに外から爆発音や地響きが聞こえてくる。

「愚かな主人と共に灰になるがいい！」

捨て台詞を残し、ワルドは、宙に浮き、空いた天井から逃げて行つた。

ワルドを見送つたアルマロスは、すぐにルイズに駆け寄つた。

「フオオオン！」

「アルマロス……。」

『相棒、どうするよ？　いくらおまえさんでも、5万の敵を相手にするにや分が悪いぜ

?』

アルマロスは、歯を食いしばった。

その時、床がモコモコと動き出した。

はつ？つと思っていると、そこからどこかで見た覚えがある大きなモグラが顔を出した。

モグラ…、ヴエルダンデは、ルイズを見つけると、その右手の薬指に鼻をこすりつけだした。

まさか水のルビーの匂いを嗅ぎつけて、ここまできたのかこのモグラ…と、アルマロスが呆気に取られていると、穴から更に。

ギーシュ、キユルケが顔を出した。

「ダーリン！」

キユルケが土で汚れた顔を輝かせた。

「どうしてここに…？」

「いやなに、土くれのフーケとの一戦に勝利した僕らは、寝る間を惜しんで君達を追いかけたのだ。なにせこの任務は、姫殿下の名誉がかかつていてるからね。」

「フォオン…。」

ここは空の上のはずだが…と言いたげにアルマロスが声を漏らした。

「タバサのシルフィードよ。」

なるほどあの竜によつてここまで来たのかつと納得した。

「なるほど水のルビーの匂いを追いかけたのか。僕のヴエルダンデは、とびつきりの宝石好きだからね、ラ・ローシエルまで、穴を掘つてやつてきたのさ。」

そりやすごい。すごい執念だ。つとアルマロスは思わず拍手した。

「ところでダーリン、こんなところで何をしてたの？」

「！ フオオオン！」

ハツと我に返つたアルマロスは、慌てて床に字を書きだした。

「ええ！ 反乱軍がもうすぐそこまできてるですって！？ それも5万！」

「ワルド子爵は!?」

「……。」

あいつは、裏切り者だつた。つと、床に書いた。

「子爵が裏切り者つてどういうことだい？」

「フオオオン！」

「今それどころじゃないわよ！ 早く脱出しなきや、ダーリン、来て！ この穴から逃げ

られるわ！」

アルマロスは、傷ついたルイズを抱きかかえて穴に入ろうとしてふと止まつた。

ルイズを床に置き、倒れているウエールズに駆け寄った。

ウエールズの体を探り、やがて彼の薬指にはまつた風のルビーに目が留まり、それを外した。

「フォオン…。」

アルマロスは、ウエールズの冥福を祈り、ルイズを抱えて穴に飛び込んだ。

\*\*\*

ヴエルダンデが掘った穴から飛び降りた先は、雲の上だつた。

落ちて来た四人と一匹をシルフィードが受け止めた。ヴエルダンデは、口にくわえられた。

ルイズは、アルマロスの腕の中で気を失っていた。

アルマロスは念のため、ルイズの心音を確認した。ちゃんと鼓動はあつた。

アルマロスがホツとしているとキュルケがアルマロスの首を指さして喚いた。

「ダーリン！ 首！ どうしたの！」

「フォオン?」

そういえばつとアルマロスは、自分の首を触った。

ワルドに開けられた穴からブスブスと小さな黒い煙が出ている。

アルマロスは、首を指で撫ると、ウオツチャースーツにより首の傷が塞がれた。するとシルフィードが暴れだした。

「うわー！」

「キヤー！ ちょっとタバサ！」

「落ち着いて。」

タバサがシルフィードの首を撫でて落ち着かせた。

シルフィードは、警戒する目でアルマロスを見た。

アルマロスは、ごめんねつと頭を下げた。

シルフィードは、力強く羽を羽ばたかせ、魔法学院へ向かつた。

## 第十一話 封印されていた、魔

シルフィードは、トリステイン城の中庭に着地した。  
途端、周りに城の兵達が取り囲んだ。

「杖を捨てろ！」

するとルイズがシルフィードから降りた。

「私は、ラ・ヴァリエールが三女、ルイズ・フランソワーズです。姫様にお取次ぎを願いたい。」

「要件とは？」

「密命なので言えません。」

「では、陛下への取次ぐわけにはいかぬ。」

「フオオオン？」

「うわっ！ なんだその声は！」

アルマロスの声に兵の隊長はびっくりした。

「フォン？」

「アルマロスが、やるかのかコラ？つというふうに、バキバキと拳を鳴らした。  
「アルマロス！ 気が立つてるのは分かるけど落ち着いて！」

ルイズがアルマロスを止めた。

「ルイズ！」

そこへアンリエッタが現れた。

「姫様！」

「ああ、無事に戻ってきたのですね！」

二人はヒシツと抱き合った。

兵達は、それを見て呆気にとられた。

「件の手紙は無事、この通りでござります。」

ルイズは、シャツのポケットからそつと手紙を見せた。

アンリエッタは、涙を浮かべ、ルイズの手を固く握った。

「やはり、あなたはわたくしの一番のお友達ですわ。」

「もつたいないお言葉です。姫様。」

しかしウエルズの姿がないことに気付いたアンリエッタは、顔を曇らせた。

「ウエルズ様は…。父王に殉じられたのですね。」

ルイズは深く頷いた。

本当は、ワルドに殺されたのだが、どちらにせよ彼は…。

「ワルド子爵は？」

「……ワルドは、裏切り者だつたのです。姫様。」

「えつ：？！」

アンリエッタは、驚いたが、他の兵達の視線に気づき、彼らは自分の客人だと説明して、城に招いた。

タバサ、キルケ、ギーシュを謁見の間に残し、アンリエッタは、自室にルイズとアルマロスを招き入れた。

ルイズは、アンリエッタの質問に答えていった。

道中、キュルケ達と合流したこと。

アルビオンへ向かう途中の船に乗つたら、空賊に襲われたこと。

その空賊がウエルズ皇太子だつたこと。

ウエーレルズの亡命を勧めたが、断られたこと。

そして……、ウエーレルズが結婚式の最中にワルドによつて殺されたことを語つた。

アンリエッタは、悲嘆にくれた。無事にゲルマニアとの同盟は保たれたが、やはり愛する人を失つた悲しみは拭い去れるものではない。ましてや永遠の愛を誓つた相手なのだ。

おまけに使者として送った信頼する男が裏切り者だつたときのものだ。泣きつ面に蜂である。

「わたくしより名譽が大事だつたのかしら？」

「フォオオン。」

アルマロスは、それは違うと首を振つた。

「姫様、皇太子は、きっと姫様に迷惑をかけたくないから、アルビオンに残つたのだと思ひます。」

「わたくしのため？」

「亡命してしまつたら、同盟が崩れてしまうと思ったのでしよう…。」

ルイズは、アルマロスを見上げた。アルマロスは、頷いた。

アンリエッタは、深く息を吐き。

「……残された女はどうしたらよいのでしよう？」

「私がもつと強く説得していれば…。」

「いいのよ、ルイズ。あなたは立派に役目を果たしました。それに私は、ウエールズ様に亡命を勧めて欲しいなんて言つていないのでですから。」

それからアンリエッタはにつこり笑つた。

自分の婚姻の妨げは防がれた。

ゲルマニアとの同盟は結ばれ、アルビオンはそう簡単には攻めてはこないだろう。危機は去つたのだと告げた。

ルイズは、右手の薬指から水のルビーを外した。

「姫様、これ、お返します。」

「いいの、ルイズ。それはさしあげます。せめてものお礼です。」「ですが……。」

「いいからとつておきなさい。」

ルイズは、頷き、水のルビーを再び指にはめた。

「フオオオン。」

アルマロスは、風のルビーをアンリエッタに渡した。

「これは、風のルビー！ どうしてこれを！」

「……。」

「そうですか……。」

黙つているアルマロスの様子に、アンリエッタは何か悟つたのか、哀し氣に表情を曇らせ、風のルビーを指にはめ、呪文を唱えた。するとブカブカだつた指輪が彼女の指にぴつたりのサイズになつた。

「優しい使い魔さん……、ありがとうございます。私は、勇敢に生きていくこうと思います。」

本当に、ありがとう。」

哀しそうな、寂しそうな笑みを浮かべたアンリエッタは、風のルビーを撫でながらそう言つた。

\*\*\*

トリステイン城から魔法学院に戻る空の上。

ずっと黙っているルイズとアルマロスに、キュルケが任務の内容についてなんやかんや聞いていた。

だが二人とも答えなかつた。

「あれだけ手伝わせておいて、教えてくれないのお？」

キュルケがついてきたのは、彼女の勝手なのだが……、つとアルマロスは思つたが、言う気は起きなかつた。

「おまけにあの子爵が裏切り者だつたなんて。でもダーリンが倒したんでしょ？」

「フォオン。」

「結局どんな任務だつたの?」

アルマロスは口をつぐんだ。

キュルケは、ギーシュを見た。

ギーシュは、自分は知らないと首を振つた。

取り戻してほしいと言われた手紙の内容までは彼は知らないのだ。

キュルケは、ブーブー文句を言つてタバサにも意見を求めたが、タバサは興味なさげに本を読んでいるだけだつた。

ルイズは、ソッとアルマロスに身体を預けるように身を寄せた。

アルマロスは、何も言わず、ルイズの肩を抱いた。

ひんやりした温度のない手。けれどとても優しい手。

アルマロスの顔を見上げると、どこか憂いを帯びた、もの思いにふけるているような顔をしていた。

「なあにい!? ダーリンつてばルイズとできてたの!?

「ち、ちがうわよ!」

「フオつ!?

「ぎやつ!」

キュルケが悲鳴じみた言葉をあげたため赤面したルイズは、咄嗟に、勢いでアルマロ

スを突き飛ばしていた。

突き飛ばした結果、ギーシュが巻き込まれ、二人は風竜から落ちてしまった。ギーシュは、悲鳴を上げながらなんとか途中でレビテーションを唱えたが、魔法が使えないアルマロスは、空中で体制を整え、地面に着地した。結構な高さがあつたため、足が地面にめり込む。

「あ、ああああ、アルマロスウウウウ!!」

「ダ――リ――ン!」

「無事。」

ルイズとキュルケは顔を青くさせて叫んだ。誰もギーシュの心配はしなかつた。

「フオオオン?」

「ああ、大丈夫だよ。君こそ大丈夫かね?」

自分は大丈夫だと、アルマロスは身振り手振りで伝えた。

「しかしあの高さから落ちて平気なんて、本当に君人間じゃないんだね?」

「フオオン。」

「その声といいね…。」

アルマロスは、自分が墮天使だと打ち明けるべきかと考えたがルイズがあまり言うな

と言つていたので、言わないでおくことにした。

「ところで君。」

「フォ？」

「姫殿下は…、僕のことで何か言つてなかつたかね？」

ギーシュが造花の杖をいじりながら聞いてきた。

アルマロスは、困つた。アンリエッタとの会話に、ギーシュのギの字も出てこなかつたただなんて…。

アルマロスは、それを表情に出してしまつていたため、ギーシュは目に見えて落ち込んだ。

「そうか…、僕は姫殿下のおめがに叶わなかつたのか…。」

「フォオオン…。」

ギーシュの肩を、アルマロスはポンポンと叩いて励ました。

二人は仲良く魔法学院まで歩いた。

一陣の冷たい風が吹き。

アルマロスは、ふと顔を上げた。

だが気のせいだと思い、視線を前に戻した。

\*\*\*

ニユーカツトル城は、惨い、の一言に尽きる惨状となつていた。

傭兵達は、その城の跡地から、宝石や装飾品などをみつけるたびに大はしやぎしていった。

傭兵はやがて、礼拝堂だつたであろう場所を見つけ、またお宝がないか探りだした。彼らの足元に、ドロリッとした土留め色の液体が広がつた。

彼らはそれが血ではないことに気付いたが気にも留めなかつた。

それはやがてボコボコと沸騰し、突如、傭兵達の足に絡みついた。

「ひつ！」

悲鳴を上げた時にはすでに遅く、足に絡みついた液体が、彼らの体を丸呑みにしていた。そこにいた傭兵達は、液体の中にゴポンっと飲み込まれ姿を消した。

『……無様な……』

地の底から上がるような低い声がどこからか聞こえて來た。

『目覚めてみればなんと醜いことよ……。忌々しいアルビオンの王族どもめ……、この我

を封印し続けておきながら最後はこの様か…。』

液体がゴボゴボと泡立つた。

「おお…、そこにおられたのですね？」

そこへ一人の男がやってきた。

『誰だ？』

「失礼しました。」

男は恭しく跪いた。

「私は、オリヴィア・クロムウエル。レコン・キスタの総司令を務める者です。」

『そのような男が、我に、何用だ？』

「何を言つておられるのです？　あなたはこのアルビオンの真の守護たる存在であるのなぜぞんざいにできましよう。」

『ククク…、我を守護だと？　我はこの世界の神により、名を奪われし、無様な墮天使よ。確かにこの大陸は我がかつて支配していた地ではあるが、すでにお前達人間ものではないか。』

「そのようなことを言われないでください。あなたは、封印されてなおその力はご健在でしょう。アルビオンの大陸が浮かんでいるのがその証拠ではありませんか！」

『…アルビオンの王族の祖は、我をこの地に埋め込み、陸地ごと浮かせて我を目覚めか

ら遠ざけんとした。だがその子孫共は己が臣下どもに反旗を翻され、この様…。我がこの手でと思っていたのだが…、ああなんと嘆かわしい…。』

『申し訳ない…。ですが、彼奴らは、名譽ある死を選び、我ら反乱軍に自軍の十倍もの損害を出したのです。彼奴らは、あなたを封印しこの地へ封印した伝説に勝る戦いをしたのです。』

『…ほう？ そうか…。しかし忘れられた伝説を知つてると、随分と物知りだな？』  
「これよりこの地の実質的な統治者となる者として、その大地の知識は知つておかねばなりません。しかし真の支配者はあなただ。』

『ほう？ 人間が自ら我に支配を求めるのか？』

『この大地を支える者。あなたこそが真にアルビオンの支配者ではないですか？』

『……いいだろう。』

土留め色の液体が大きく波打つた。

『ならば、我的ため、捧げよ。血を、肉を。我を封印せし王族共は滅んだ。代わりに、貴族共の血肉を我に捧げよ。魔の力を操りし、血統は、供物なり。王家の血は、さらに上の極上の供物なり。』

『仰せのままに。』

『その前に聞く。』

「はい。」

『この地に、我の知らぬ天使の気配が残つてゐる。これは、なんだ?』

「さあ……、申し訳ございません。存じ上げません。」

『これは……、恐らくは異界の天使のものだろう。異界より誰が天使を呼んだ? なぜ我から名を奪つた神は、その天使を見逃している? その天使はどこへ行つた?』

「……申し訳ありません。」

『まあいい……。異界の者では口クに力を使えんだろう。今は捨て置く。』

「さようですか。』

『では、早速だが、供物を用意せよ。我をこの大地の楔より解き放て。』

「仰せのままに。』

アルビオンに、冷氣の風が吹いた。

\* \* \*

魔法学院に戻つて、三日。

アルマロスは、ブルツと震えた。

誰かに噂でもされたかと、周りをキヨロキヨロ見渡したが、そんなことはなかつた。

そういえば、アンリエッタが、ゲルマニアに嫁ぐことが正式に発表されたことを思い出した。

ウエールズを好いていた彼女が、上に立つ者として国を守るためにその身を捧げる。好いた人間と結ばれないのは、上に立つ者の宿命といえるだろう。

彼は：、ウエールズは、空の上で見守つてくれているだろうか？

そんなことを思いながら、空を見上げた。

「アルマロス先生！」

「フォオン。」

呼ばれてアルマロスは振り返つた。

最近じや、そう呼ばれることがしばしばだ。

ついでに体育の授業じや、アルマロスのダンスに魅了された教師が生徒達に教えてやつてくれと頭を下げに来るくらいだ。

アルマロスもできるだけ応えようとした。

激しいダンスばかりじやなく、簡単な振り付けから、知つていてる限りの色んな種類の踊りを披露した。

どの踊りが一番とかはない。だが思春期の生徒達の多くは、技術点が高い踊りを踊りたがつたが、体がついていけず、ほとんどがへばつた。

教えるのはダンスばかりじやなく、格闘技も教えることもあつた。

メイジは、基本的に詠唱を使い魔や誰かに守つてもらわなければならず、疾風の二つな名を持つていたワールドのように詠唱を素早く行う訓練を行わないとすぐに魔法を妨害されてしまう。まあ、言つてしまえば基本的に肉体的には弱いのだ。

メイジ殺しなどと呼ばれる鍛え抜かれた平民がいるほどなので、肉体的には平民の方が上であろう。まあ魔法を使えないハンデを乗り越えるために鍛えた結果なのだろうが。

特に魔法衛士ともなれば、詠唱をしつつ体を動かすという難易度が高い技が要求されるため、普段から体を動かすべきだとオスマンが提唱。結果、格闘技の達人であるアルマロスに白羽の矢が立つた。

だがすぐには格闘技は教えない。まずは基本からと、走らせたり、柔軟をさせたりと、体力づくりと身体づくりから始めたのだが、まあ、生徒達からブーイングが上がつた。魔法の源である精神力を基本とするメイジ達にとって、体力を使う作業は地獄だつたのだ。

アルマロスは、生徒達の体力の無さに溜息をつかずに入れなかつた。

基本の身体づくりをしないことには、格闘技を教えても怪我をするだけだと主張。それに技を決めることすらできないのだと。

ダンスだつて身体づくりからしないとこれまた怪我をするだけだと、ダンスの教えを乞う生徒達に教えた。

実際にアルマロスの真似をして、足をくじいたり、肉離れを起こした生徒達が出てしまった。

基本ができない奴には、教えないといふと、アルマロスは心を鬼にして主張した。

これを聞いた生徒達は、多くが心を改めて基本から始めだした。最初は筋肉痛に悶えていた生徒達も、若さからすぐに慣れ、徐々にだが体ができると、自然と技術も上達してくる。それを実感し、彼らはますますアルマロスを酔狂するようになつた。

もちろん、アルマロスに対しても反感を持つ者達はいたが、多勢に無勢、アルマロスを慕う者達が多く、表立つて批判することができず、影でヒソヒソとしているだけにとどまつた。

中には魔法を使つてアルマロスを妨害しようとした者もいたが、アルマロスに魔法が効かないと分かり、驚愕していた。

アルマロスが何者なのか? つと疑問視する者達と、何者であろうがどうでもいいといふという者達とに別れていった。

ルイズに直接アルマロスの正体について聞こうとした者達もいたが、ルイズは口をつぐんで何も答えなかつた。

オスマンは、アルマロスが学院のために貢献してくれている以上、無用な詮索はするなど厳戒令を出した。

アルマロスの最近の身の回りは、こんな感じであつた。

ルイズは、生徒達から慕われるアルマロスを見て、頬を膨らませていた。

## 第十三話

### 冷たい手

「フオオン？」

「来ないで！」

「フオ…。」

「……めん。嘘よ。」

こんなやりとりを何度もやつた。

最近ルイズの態度が変だ。

なんと言つたらいいのか、…なんか変だ。

近頃、体育の授業の講師をしたり、生徒達のダンスの先生として生徒達に教えているから忙しくて、構つてなかつたせいだろうかつと、アルマロスは思った。  
それは寂し事だと、アルマロスは思い、肩を落とした。

「アルマロス…、怒つた？」

ルイズが恐る恐るといつた様子で、アルマロスを見上げた。

アルマロスは、ハツとしてそんなことはないと身振り手振りで伝えた。

「そう……ごめんなさい。」

「フォオン。」

謝らないでつとアルマロスは、ルイズの頭を撫でた。

ルイズがポロポロと涙をこぼした。アルマロスは、ギョツとした。

「だつてだつてえ、アルマロスは、私の使い魔なのに、使い魔なのに、寂しかったんだもん！」

「フォオン。」

ああ、そうか、ルイズは寂しかったのだ。他の生徒達にアルマロスが取られたと思つて。

アルマロスは、ルイズの手を取り、字を書いた。

『僕は君の使い魔だよ。』つと。

「ふえええええん！」

「フォーン!?」

そしたらルイズは声を上げて泣きだしてしまつたため、アルマロスはオロオロとした。

とりあえず泣き止むまでルイズをよしよしと撫でた。

授業の時間になつたので、ルイズは、アルマロスを連れて教室に入つた。

\*\*\*

コルベールの授業は、彼の炎蛇の二つ名の通り、火についての授業であつたのだが……。

なんか途中から彼の作つた研究品である、からくりの話になつてきた。

魔法による生活が定着しているこの世界で、こういつたからくりは無駄なものと捉えられるようで、生徒達はあまり興味を示してなかつた。

アルマロスは、コルベールの発明品をどこかで見た覚えがあつた。  
もつと精巧で…、巨大で…、または小型で…。

あつ、つとアルマロスは手を叩いた。

アザゼルが統治していた階層で見たんだつと思いだした。

アザゼルは、進化と技術を司る天使であつたため、彼が墮天したことで地上界に様々  
な技術が流出することになつた原因にもなつた。おかげで彼が統治していたタワーの  
階層は、通常なら何百年、下手すると千年単位で発展する文明が短期間で築かれていた。

コルベールの発明品は、アザゼルの技術から作られたエンジンというものによく似ていた。

熱弁するコルベールとアザゼルが出会えたなら、きっと話が合つただろうな…つとアルマロスは遠い目をした。

アルマロスがボーツとしていたら、教卓の方が爆発した。

見るとルイズとコルベールが倒れてた。しかも周りは火の海。ギヨツとしてアルマロスは、すぐに水を生成してぶつかけ、ルイズのところへ駆け寄つた。

「あ、アルマロス…、ごめんなさい。」

「フオオオン。」

あとで聞いたら、コルベールが誰かこのからくりを動かすために点火してみないかと持ち掛けたのだが、反応が薄い状況で効果はなさず、モンモランシーに挑発されたルイズが名乗り出てやつたところ、見事に爆発で終わってしまったのだそうだ。

後片付けは大変で、前の爆発事件（シユヴルーズの授業の時の鍊金）の時より手間がかかつた。なにせ水浸しだつたのだから。「そういえばアルマロスって水を操れるのよね。武術の達人だし、水も操れるなんてどんだけ万能なのよ。」

「フォオン。」

そんなことはないとアルマロスは、首を振った。

これだけの力はあつたが、イーノツクに完敗したのだ。

アルマロスは、溜息を吐いた。

あの時、ワルドを倒しきれなかつた。自分の力はこの程度だつたのだろうかと自分の拳を見つめた。

「アルマロス？」

「フォオン。」

なんでもないとアルマロスは首を振つた。

後片付けが終わつたのは、結局夜になつてしまつた。

クタクタのルイズは、ベットに倒れ込むように横になり、アルマロスは、それを見てからカーテンを開け、空の月を見た。

二つの月が浮かんだ夜空。

ああ、やはりこの世界は自分がいた世界じやない。

あらためてそれを思う。

「ねえ、アルマロス…。」

「フォ？」

「…元の世界に帰りたいって思う？」

いきなりそんなことを聞かれたので、アルマロスは、キヨトンンツとした。

「別に変な意味はないわよ…。ただ、あなたはこの世界の堕天使じやないんでしょ？だから、元世界が恋しいとか…そういう気持ちとかつてやっぱりあるのかなって、思つて…。」

「フオオン…。」

恋しくないと言つたら嘘になるが、元の世界に帰つたところで、待つてているのは永遠の牢獄だ。

墮天という大罪を犯した天使に待つのは、過酷な罰だけだ。

不可抗力とはいえ、この世界に来て、アルマロスは、よかつたと思つてゐる。

アルマロスは、ベットの端に腰かけ、ノートに字を書いた。  
『僕を召喚してくれて、ありがとう。』つと書いた。

ルイズは、その字を見ると、涙ぐんだ。

最近涙腺が弱くなつてゐるなど思いつつ、ルイズは、ぐしつと涙を乱暴に拭つた。

「ねえ、アルマロス。…ベットで寝る？」

「フオ？」

「いやなんていうか…、いつも床で座つて寝てるでしょ？ やっぱり横になつて寝た

方がいいんじゃないかと思つて……。それとも私と一緒に横になつた？」

アルマロスは、そんなことはないと首を振つた。

ネグリジエに着替えたルイズは、ベットの横をあけ、そこにアルマロスを招いた。

アルマロスは、布団に入り、ルイズと一緒に横になつた。

「ねえ……、アルマロス。」

「フオ？」

「……私、一人前のメイジになりたい。強力なメイジじゃなくていい。ただ普通に魔法が使えるようになりたいの。お父様もお母様も誰も私に期待なんてしてなかつたわ。学院でもゼロ、ゼロ、ゼロつて……。自分の得意な系統を唱えるとね、体の中で渦巻くものがあるんですって。自分の中に何かが生まれて、それが体の中を循環して、それはリズムになつて、そのリズムが最高潮に達した時呪文は完成するんですって。でもどの系統を使つてもなんだかぎこちなくつて……。そんなこと一度もなかつた。私の得意な系統なんてないのかもしない。でも私は、みんなが普通にできることできるようになりたい。」

「……。」

アルマロスは、ソッと横にいるルイズの頭を撫でた。

アルマロスが撫でてくる手に、ルイズは気持ちよさそうに目を細めた。

「あなたが伝説のガンダールヴなのに、どうして私は魔法が使えないままなんだろうつて…。そういえばガンダールヴって、どんな武器でも使えたって言われてるけど、なんかアルマロスって違う…わよね?」

「フォオン。」

確かにアルマロスは、ガンダールヴのルーンが刻まれているが、武器を使つてもいまいちしつくりこないでいた。

「不思議よね。伝説つて言うくらいだから何かあつても不思議じやないのに。」

「フォオン。」

アルマロスは、左手のルーンを見た。

黒っぽいそれはアルマロスの褐色の手の甲にしつかりと刻み込まれている。

「右胸のそれだつて、四人目の伝説の可能性があるんでしょ? それつて何か意味があるのかしら?」

言われても分からぬ。名前の記されていない四人目の使い魔のルーンなので、分からぬ。

「アルマロス、何か変わつたつて思つたことある?」

「……、フォ!」

変わつたことがあつたと、思い出したアルマロスは、ルイズの手に字を書いた。

『神の叡智を浄化できるようなつた』つと。

「じょうか？ それ前はできなかつたの？」

アルマロスは頷いた。

「そもそも神の叡智つてなに？」

そこからアルマロスは、ベイルとアーチが、かつてアルマロスがいた世界の神の世界の技術と知恵で、自分達グリゴリの天使が墮天したことと流出したのだと説明。『それがハルケゲニアにも流出しちやつたわけ？』

その理由は分からんといつとアルマロスは答えた。

あとひとつ。ガーレという武器も存在するのだが、もしかしたらそれも流出していくどこかにあるかもしれないと答えた。

「分かんないことだらけね。」

「フォオン…。」

「ほんと…、分かんないことばっかり…。」

やがてウトウトとルイズが眠りだした。

ルイズが寝入ったのを確認してから、アルマロスも目を閉じた。

\*\*\*

暗闇。

どす黒い。冥界の闇とも違う、どんよりとした気持ちの悪い黒が広がっていた。  
それでいて冷たい。

自分の体は、墮天したことで冷え切つてしまつたが、それ以上に冷たい気がした。  
氷よりも冷たいような気がした。

『…………れ…………。』

地の底から響いてくるような低い声が聞こえた。

『おのれ……おのれ……！　よくも、よくも！　名を……、我の名を……、返せ！』

どういうことだつと、アルマロスが思つていた時、ドスッと右胸に衝撃が走つた。  
見ると……右胸に……。

そこで目が覚めた。

ガバリツと起き上がりつたアルマロスは、額を抑えた。

それから確かめるように右胸を見た。なんともなつてなかつた。

ホツとして、溜息を吐いた。

横を見ると、ルイズが静かに寝息を立てて寝ていた。

ルイズがいる。これは現実だと分かり、もつとホツとした。

あの夢は何だつたのだろう？

夢にしては不気味であつたし、あの声は…。

「ううん…。」

ルイズが眉間にしわを寄せてうなされた。

何か悪い夢を見ているのかと、そつと手を伸ばして、頭を撫でた。

それに安心したのか、ルイズの顔が安らぎ寝息も一定になつた。

ルイズの頭を撫でてやりながら、アルマロスは再び横になつた。  
あの夢の中に出てきた声がいまだ頭から離れない。

嫌な予感がする。

アルマロスは考えた。

もしものことがあつたなら…、自分は…。

脳裏に、自分を慕ってくれる子供達、大人達、そしてルイズの顔が過つた。

アルマロスは、拳を握り、決意を新たにし、目を閉じた。

ルイズは、ふと目を開けた。

目の前にはアルマロスの寝顔。

「……冷たい手…。」

自分の頭に置かれていたアルマロスの手を、ソッとどける。  
撫でていてくれたのだろうか？

よく覚えていないがちょっと嫌な夢を見ていて途中からいい夢に変わったような気がする。

なんとなくアルマロスの手に自分の手を重ねて、大きさを比べてみた。

「大きな手…。」

身長差もあるのだから手の大きさの差もある。

左手の甲を見れば、ルーンが刻まれている。自分の使い魔である証だ。右胸は服と布団で隠れているが、そこにもルーンがあるはずだ。

「ねえ、アルマロス…。私、感謝してるのよ？　あなたが私の召還で来てくれたこと…、あなたに会えたこと…。好きよ…、アルマロス。」

果たしてその好きという言葉の意味は…。

ルイズにもよくわからなかつた。けれど素直に出てきた言葉だつた。  
親愛でもない。恋愛的な意味でもない。なんだつていい。

ただ好きだと思う気持ちだけ。

今はそれで十分だとルイズは、微笑み。 目を閉じた。

## 第十四話　堕天使とメイド

その日の夕方。

アルマロスは、踊っていた。

するとそこへ。

「あ…、あの…。」

「フオ？」

「先日はすみませんでした！」

メイドに急に頭を下げられた。

アルマロスは、首を傾げた。謝られるようなことはしてないはずだがつと思つていたら、どこかで見覚えがある顔だつた。

ああ、そういえば前に一人で踊つていた時、洗濯籠を落して逃げ去つていつたメイドだ。

アルマロスは、頭を下げたままのメイドの手を取り、そこに字を書いた。

『怒つてはいないよ。』と書いた。

「ほ、本当ですか？」

「フォオン。」

「あの……、そのお声って地声なんですか？」

アルマロスは、少し考えて頷いた。

彼女の名前は、シエスタというらしい。

この学院でご奉仕の仕事をしている平民だそうだ。

「あの……、ミス・ヴァリエールの使い魔だつて噂……本当なんですか？」

アルマロスは頷いた。

「大変ですね。貴族の方の使い魔だなんて……。」

「フォオン。」

そんなことはないとアルマロスは首を振った。

「あの、すごい踊りがお上手ですね。どこかで踊り子でもしていたんですか？」

そう言われるとちょっと迷う。自分を崇拜する人間達の前でダンスを披露していくことを思えば、踊り子といえば踊り子だつた。

「あ、聞かれたらイヤなことでしたか？　すみません。」

「フォオン。」

そんなことはないとアルマロスは身振り手振りで伝えた。

「でも素敵ですね。あんなに素敵なダンス……、私初めて見ました。貴族の方たちの講師

を頼まれるのも当然ですよね。すごいですよ。」

「フォオン。」

そんなことはないと、アルマロスは首を振った。

アルマロスは、手に指で字を書き。

『よかつたら、一緒に踊る?』つと聞いた。

「えつ! わ、私は、ダンスなんて踊つたことないし……。」

教えるよつと書いて伝えた。

シエスタは、オロオロとしていたが、アルマロスを上目づかいで見上げて、小さく、お願いします……と言つた。

「アルマロスー。どこー? あら?」

「フォオン。」

「あつ!」

ルイズがメイドと踊るアルマロスを発見した。

メイドの少女は慌ててアルマロスから離れて、ルイズに深々と頭を下げる。キヨトンつとしているルイズに、アルマロスは、手に字を書いて、この子に踊りを教えていたと伝えた。

「あらそうなの？ よかつたじやない。」

「いえ…、あの…その…。」

「そんな怯えなくともいいわよ。誰かにダンスを教えちゃダメって禁止なんてしてないんだから。」

「そ、 そうなんですか？」

「中々上手だつたわよ。」

「滅相もありません。」

シエスタは、恐縮したままだつた。

「フオオン。」

アルマロスは、シエスタの手を取り、字を書いた。

『また暇があつたら教えてあげる』 つと書いた。

「あ、 ありがとうございます。」

シエスタは、頬を染めてお礼を言つた。

\*\*\*

あの日の夕方から、シエスタとは、親しくなつた。  
彼女の仕事の合間にデザートや果物の切れ端を持つてきて談笑（筆談）したり、踊りを教えたりした。

「アルマロスさんって、どこから来られたんですか？」  
「フォオ…。」

それを言われると困る。

なんと説明したらいいか分からぬからだ。

「もしかして、ロバ・アル・カリイエから来られたんですか？」

なんだそれつと思つたが、聞いたら東方の未開の地らしい。

とりあえずそこから來たということにした。自分の正体を隠しているのもあるので。  
堕天使だなんて言つたらまた怯えられちゃうかもしれない。

「そうなんですか？　でもアルマロスさんって、その…、なんというか…。」

おつとばれたかつと思つたら違つた。

「ゲルマニア系とも違いますし、やっぱり東方から来られたんですね。」

「フォオン。」

君は、どこから來たのつと聞いてみた（筆談）。

「私ですか。私は、タルブという村からこの学院にご奉仕に来ています。辺鄙な村ですが、草原が綺麗で…。」

故郷を思い出し、目を閉じて語る彼女の言葉。アルマロスはほのぼのした気持ちで聞いていた。

「あの…アルマロスさん…。」

「フオ？」

「よかつたら、私の村に来ませんか？」

「フオオン？」

「…あ、あの…変な意味じゃないんです。ただ踊り教えてもらつたお礼なんて私にできることなんて限られてて…、でも今の季節、草原のお花が綺麗で…、その……。故郷の弟達にも教えてあげたいなつて思つて…。」

なるほどつと、アルマロスは思った。

しかしそうなるとルイズからの許可が必要だ。  
果たして許可が下りるだろうか？

キュルケをライバル視して、必死にアルマロスを取られまいと強い気に出ている彼女だ。さすがにシエスタにそんな態度は…、とるまい。

ルイズに聞いてみると、アルマロスは返答した。

\*\*\*

その夜。

早速ルイズに、シエスタの故郷に行つてみてもいいかと聞いてみた。

「ダメよ。」

速攻で却下された。

なんでつと聞こうとすると、ルイズは、アルマロスの目の前に、古い本をずいっと見せてきた。

「使い魔わね。主と一心同体なの。それなのに離れるなんて許さないんだから。」「フォオーン……。」

「それと、私、大役を任せられたの。」

「フォオ？」

「姫様の結婚式の際の巫女に選ばれたの。この本は始祖の祈祷書っていう本よ。」

「それは大役だ。」

「巫女はね。式の前からこの始祖の祈祷書を肌身離さず持ち歩いて、式では始祖の祈祷書を手に、式の詔を読み上げるの。詔は、自分で考えなきやならないの。」

「そりや大変だ。

「というわけで、私は手が離せないの。だから行くのは禁止。」「フォオン…。」

アルマロスは、がつくりと肩を落とした。  
シエスタには悪いが断るしかないようだ。

「……そんなにあのメイドが気にかかるの？」

「フォ？」

「別にいいけど…。あんまり色目振りまかないでよ。」

それはどういう意味だと思ったが、ルイズが却下するなら仕方がないかと、アルマロスは、シエスタに伝えるべく部屋を出ようとした。

「どこ行くの？」

「フォオン。」

「あのメイドのところ？ 今行くの？ 別に明日でもいいじゃない。」

なんだか最近ルイズの様子が変な気がする。

なんと言えばいいのか分からぬが、なんとなくそう思う。

## 第十五話　　宝探し

アルビオンから帰つて、十日以上が経過した。

日が経つにつれ、あの日、あの場所であつたことは、現実味を失つていく。

けれど現実は現実。あの日、ワルドに裏切られ、ウェールズを目の前で殺され、アルマロスが怒り狂つた。その事実は変わらない。

ルイズは、アウストリの広場のベンチに腰かけ、編み物をしていた。

アルマロスは、少し離れた位置の樹の木陰に座つている。

ルイズは、編み物の合間に、始祖の祈祷書を開いたりして、時折溜息を吐いていた。思いつかない。全然、良い詔が思いつかない。

まさか同盟の婚姻時の巫女に選ばれるなんて、そんな夢のまた夢みたいな大役を仰せつかるなんて思わなかつた。

そんな一生に一度とないことを急にやれと言われて、できるものじやない。だがやらなければならぬ。

ふとアルマロスの方を見ると、ウトウトと木陰に座つたまま居眠りをし始めていた。

「……のどかねえ……」

のんびりとした昼休み。確かに昼寝には絶好の気温と天氣である。

ウトウトと寝かけているアルマロスを見ていると、こつちまで眠くなつてきて、ルイズはあくびをした。

このままアルマロスに寄りかかつて寝ちゃおうかなんて考えも過るが、昼休みが終わればまた授業があるのでやめた。

「何してるの？」

後ろから急に声を掛けられて、ビクツとなつたルイズは慌てて振り返ると、そこにはキユルケがいた。

ルイズは、慌てて作っていた作品を始祖の祈祷書で隠した。

「なによ、隠さなくたつていいじやない。」

「べ、別にいいじやない。」

「あらあら、ダーリンつてばお昼寝？ 私も一緒に寝ちゃおうかしら？」

「ダメ！ ダメよ！ ダメだつたらダメ！」

「しーつ。ダーリンが起きちゃうでしょ？」

小声でキユルケに言われ、ルイズは、口をつぐんだ。

「なにその本。白紙じやない。」

「これは、始祖の祈祷の書よ。国宝よ。」

「なんでそんな国宝を持つてるわけ？」

ルイズはキュルケになぜ自分が始祖の祈禱書を持つているのか説明した。

「なるほど、じゃあこの間の旅は、ゲルマニアとの同盟が絡んでたわけね。」

キュルケの言葉に、ルイズは、少し考えて頷いた。

「誰にも言っちゃダメよ。」

「ギーシュのようにお喋りじゃないわよ。ところで、同盟国同士になつたんだし、あたしあたちも仲良くしようじゃないの。」

「だからってアルマロスは、あげないわよ？」

「…ちえ…。」

「こら。」

「冗談よ。ねえ聞いた。アルビオンの新政府は、不可侵条約を持ちかけて來たそうよ。あたしたちがもたらした平和に乾杯。」

キュルケがルイズの肩に手を回して微笑んだ。

ルイズは、アンリエッタのことを想うと、あまり明るい気分にはなれなかつた。好きでもない相手に嫁がなければならないのだから。

「ところで何作つてたの？」

ルイズの隙をついてキュルケが祈祷書の下にある、ルイズの作品を引っ張り出した。

「あ！ ちょっと、返しなさいよ！」

「なにこれ？」

「せ、セーターよ、セーター…。」

「どこがよ？ ヒトデにしか見えないわ。それも新種の。」

ルイズは、編み物がド・下手だつた。

「セーターなんて編んでどうする気？」

「別にいいでしょ。あんたには関係ないわ。」

「…は、はーん…。なるほどねえ。」

キュルケは、何か察したのか意地悪く笑つた。

「ダーリンにプレゼントしようつてことね？」

「ち、違うわよ。」

「いいのよ。ルイズ、私分かつてるから。」

「違うつてば！ いいから返しなさい！」

「ねえ、ダーリン。プレゼントだつて。」

「えつ？」

見るとアルマロスが、キヨトンッとした顔でルイズ達を見ていた。 いつの間に目を覚

ましたのだろうか。

「これだけ騒いだら起きちゃうわよねえ。」

「あ、アルマロス…。」

「フォオン？」

「あの、これは…その…。」

ルイズは、涙目で赤面していた。

アルマロスは、首を傾げた。

やがて場に空気に耐えられなくなつたルイズは、キュルケからセーター（？）を奪うと、始祖の祈祷書も持つて走り去つてしまつた。

残されたアルマロスは、キヨトンツとし、キュルケは、くすくすと笑つていた。

\* \* \*

走り去つたルイズは、自室のベットに潜り込んでいた。  
追いかけて來たアルマロスは、ルイズに声をかけた。

「べ、べべべべ、別に変な意味はないんだからね！」

「フオ？」

「もう勝手にしなさいよ！ どこへなり勝手に行きなさいよ！ あのメイドの故郷とかにも行つてきなさいよ！」

「フォーン！」

いきなりまくし立てられ、アルマロスは戸惑つた。

「いいわね！」

「フオ…フオオン…」

アルマロスは、とりあえず頷いた。

えつ、これつて許可が下りたつてことかつと悩みつつ、アルマロスは、部屋を出た。

仕事の休憩中のシエスタを見つけ、シエスタにシエスタの故郷に行つていい許可が下りたことを伝えた。

「本當ですか！ よかつたあ。」

シエスタは、喜んだ。

「でも急にですね。どうしたんですか？」

「フォオオン…」

説明しづらい。なんか急に許可が下りたのだから。

「ダーリーン。」

そこへキュルケが来た。

「フオ？」

「ねえねえ、ダーリン。お宝探しに興味ない？」

急に言われた。

アルマロスがキヨトンツとしていると、キュルケは何枚もの宝の地図を出した。

「面白そうでしょ？」

「フオオーン…。」

宝探しは楽しいだろうが、危険も付き物だ。悩んでいると、シエスタが横から来て。

「だ、ダメです！ アルマロスさんは、私と私の故郷に行くんですから！」

「あら、ダーリンつてば、私というものがありながらメイドまで引っかけてたの？」

アルマロスは、ギョツとしてブンブンと首を横に振った。

「ルイズもすねつちやつてるんでしょ？ だつたらすごいお宝見つけてルイズをびっくりさせてみない？ どう？」  
「……。」

なぜか拗ねてしまつたルイズの機嫌を直すには…、つとアルマロスは悩んだ。

何か珍しい物を見つけて話題でも作るかと思い、キュルケの提案に同意した。

「やつた！ それでこそダーリン！」

「わ、私も行きます！」

なぜかシエスタもついていくことになった。

なお、キュルケがタバサも誘い彼女もついていくことになった。

\*\*\*

ルイズは、勢いで言った後、後悔していた。

なんであんなこと言つちやんんだろう？

アルマロスは、いない。他の使用人に聞いたら、シエスタとキュルケとタバサと共にどこかに出かけたというらしい。

キュルケと行つてもいいなんて許可はしていない。

ルイズは、アルマロスが帰つてきたらこつてり怒つてやろうと決めた。

アルマロスのいない授業はつまらない。

アルマロスがいない。それだけで今までの生活がまるで色を無くしたみたいにつまらなくなってしまった。

「早く帰つて来なさいよ‥。」

ルイズは、授業をさぼつてベットでクツシヨンを抱きかかえて横になつていた。  
アルマロスがない。

目を閉じると、嫌なことが脳裏をよぎる。

ゼロ、ゼロと蔑まされること、親からも期待されていないこと、ワルドの裏切り‥‥。  
「アルマロス‥‥。」

アルマロスがない。たつたそれだけのことでの、心が押し潰されそうになりそうな気がした。

少し開けていた窓から、ひゅうつと風が入つてきた。

「さむつ！」

その風の冷たさに驚き、起き上がりつて窓の外を見た。

「えつ？」

そして驚いた。

雪が降つていたのだ。

初夏なのに。

窓の隙間から冷たい風が入つてくる。  
なんだからとても嫌な風だつた。

\*\*\*

宝探しであるが。

まあ案の定というか、地図のほとんどは外れであつた。

こうした詐欺は多いのだと、いつの間にか同行していたギーシュが言つていた。

襲つて来たオーク鬼をアルマロスがアーチとベイルで倒していく。

「ダーリン、その武器どうしたの？」

キユルケがアーチを見て言つた。

アルマロスは、アルビオンで手に入れると説明した。

「なんだかそれ、神の拳と似てる気がするわね。」

「神の拳って、宝物庫に納められていたものだろう？ なんでそれを君が持つているんだい？」

「フォオン。」

「オスマンからもらつたと説明した。

「なんだとお！ 宝物庫の宝を！ 君は一体何者なんだね、本当に！」  
「まあ別にいいじゃない。ダーリンが何者でも。」

キュルケはそう言つてギーシュを宥めた。

「みなさーん。ご飯できましたよー。」

すると、シエスタが食事ができたことを伝えに来た。

鍋の中に、ぐつぐつと色んな具材が入つたシチューが入つていた。

「どうぞ、ヨシエナヴエです。」

「うまい！ これは何の肉何だい？」

「オーク鬼の肉です。」

ギーシュがブーツと噴き出した。

「う、嘘です。ウサギです。」

「驚かさないでよね。それにしても森にある物でこんな美味しい物を作るなんてすごい

じやない。」

「田舎育ちですから。」

シエスタははにかんだ。

「しかし、これで七件目だぞ。」

ギーシュがジト目でキュルケを見た。

そうここまで収穫はゼロ。

今までの地図は全部偽物だつたのだ。もしくはお宝とは名ばかりで、安物しかなかつた。

「あと一件！　あと一件だけ！」

キュルケが最後の地図を出した。

「これよ、これがダメだつたら学院に帰りましょう。」

「そのお宝つて？」

「神の矢。」

「えっ？」

シエスタが声を漏らした。

「それ、私の村にあります。」

「なんですつて？」

「はい……。」

「あなたの村つてどこ？」

「ラ・ローシエルの向こうが側です。」

神の矢と聞いて、アルマロスは、まさか……と思つた。

残る神の叡智の武器は、ガーレだけだ。

ガーレは、遠距離武器である。形状は弓矢とは程遠いが、もしかしたら他に例えられる言葉がなかつたので、神の拳と例えられていたベイルのようにそう呼ばれているのかかもしれない。

その時、ふとアルマロスは、足を止めた。

「ダーリン？　えつ？」

「なつ……。」

「つ……。」

キユルケもギーシュもタバサも驚いた。

空から雪が降つてきたのだ。

ちさちらと少ない量だが、確かに雪だつた。

それとともに冷たい風が吹いた。

「うわ、さむつ！」

「……嫌な風……。」

初夏の季節に似つかわしくない冷たい風に、体を抱いて震える。タバサは、風から嫌なものを感じ取り眉を寄せた。

# 第十六話 痛み

アルマロスがない。

たつたそれだけのことでの、ルイズは、不安定になつた。

「大丈夫かね？」

「はい…、なんとか…。」

心配したオスマンがルイズのもとを訪ねた。

「顔色が悪いが大丈夫かね？」

「大丈夫です…。」

「…詔の方は？」

「…はい、申し訳ありません。」

「まだ式まで2週間ほどある、ゆっくり考えるがよい。大切な友達の結婚式じや、念入りに言葉を選び、祝福してあげなさい。」

「…はい。」

「ところでアルマロス殿はどうしたのかね？」  
「……出かけてます。」

「もしや、ミス・ヴァリエールの気分が優れないのは、そのせいじゃないのかね？」

「いえ…そんなことは…。」

「いやいや、間違いなくそうじやろう？　今すぐアルマロス殿に戻つてきてもらわねばならんじやろう？」

「でもどこにいるか分かりません…。」

ルイズの目からポロポロと涙が零れた。

オスマンは青ざめ、こりや重傷じやつと焦つた。

すぐにオスマンは、アルマロスを連れ戻すため御触れを出した。

\*\*\*

タルブ村の古い寺院。

そこに神の矢が奉じられていると聞き、来てみた。

「！」

アルマロスが想像した通り、それは、間違いなく神の叡智・ガーレだつた。

「なにこれ、輪つか?」

薄黒いそれをキュルケが興味なさげに指して言つた。

「フォオン。」

「えつ? これをどこで? えつと…、私のひいおじいさんが、黒い天使様から貰つたつて言い伝えられているんですけど…。」

黒い天使?

それを聞いてアルマロスは、眉間に寄せた。

黒い天使と聞いて思い出すのは、ルシフェルのことだ。

自分を冥界へ落ちたイーノツクを救うよう諭し、そして冥界に置き去りにした大天使長。

ああ、彼に対してはいい思い出が全くない…。つというか怖い。

「アルマロスさん…?」

ハツとしたアルマロスは、なんでもないと身振り手振りで伝えた。

「しかしこんな薄汚れた輪つかが、神の矢だつて? やっぱり地図は偽物だつたんじやないか。」

ギーシュが心底がつかりしたと言わんばかりに言つた。

「フォオン。」

するとアルマロスがガーレを掴んだ。

「アルマロスさん？」

「ダーリン、何をする気？」

彼女らが言うよりも早く、アルマロスは、ガーレを撫でるように触れた。すると光り輝き、白く輝きだしたガーレ。

「こ、これって！」

「もしかして今までダーリンが使つてた武器と同じ？」

「フォオン。」

アルマロスは、そうだと返事を返した。

その時。

ズキッとアルマロスの右胸に痛みが走った。

あまりの痛みに右胸を抑え、へたり込んだ。

「ダーリン!?」

「大変！ アルマロスさん、大丈夫ですか！」

「…フォオン。」

アルマロスは、やや冷や汗をかきながら大丈夫だと身振り手振りをした。

ガーレを寺院に置いておき、アルマロスを休ませるため、シエスタの家に行つた。

シエスタは、八人兄弟の長女だつた。

シエスタの弟や妹達は、シエスタからの手紙でアルマロスのことを知つていたのでアルマロスのところに集まつてきて興味津々にしてた。

シエスタの父母は、アルマロスを怪訝そうな顔で見たが、シエスタから説明を受け、いつまでも滞在していくてくれていいと言つてくれた。

しばらく休んだアルマロスは、シエスタが言つていた草原を見てみたいと言い（筆談）、シエスタに案内されて草原に行つた。

草原は広く、ところどごろに花が咲いていて、シエスタの言う通り綺麗な草原だつた。吹き抜ける風も気持ちよく、アルマロスは、眩しそうに目を細めた。

「綺麗でしょ？　これが見せたかつたんです。」

「フオオン。」

「…私のひいおじいさんの話を、誰も信じなかつたそうです。」

シエスタは語りだした。

黒い天使にガーレを託されたことを、シエスタの村の人々は信じなかつたそうだ。

天使が黒いと、いうのだから信じられない話だつただろうし、天使の存在が実在するのかどうかすら怪しかつたのだ。

最初こそ村を襲うオーケ鬼や狂暴な幻獣を一撃で倒すほどの威力を發揮していた神

の矢（ガーレ）も、すぐに使い物にならなくなり、寺院に奉じられるのだそうだ。  
「でもアルマロスさんが触ると、光り輝きましたよね？ 天使様からもらつたっていう  
のは本当なのかなあ？」

「……フォオン。」

今自分は堕天使なのでなんとも言えない。

「あのよかつたら、あれ：、神の矢を持つて行つてください。ひいおじいさんの遺言であ  
れの光を取り戻せる者が現れたら、渡す様について言われているんです。」

「フォオン？」

いいのかつとアルマロスは、聞いた。

「いいんです。今ではたまにお年寄りの方がお参りをするだけで、村では邪魔になつて  
たんです。」

そうか、ならもうおうつとアルマロスは頷いた。

「ダーリー——ン！」

キユルケが走つてきた。

「学院からすぐ帰つて来いつてフクロウから伝書が届いたの。ルイズが大変ですって。」

「フォオン！」

「私達もサボりまくつたから先生達カンカンよ。大変！」

こうしてアルマロス達の宝探しは終わった。

\*\*\*

「アルマロスのバカ——！」

「フォーン!?」

帰つて来るなり、そんな第一声が飛んできた。

「ほんとに、ほんとに行くことないじゃないの！」

いや…そう言われても…つと、アルマロスが思つていると、ルイズがポロポロと涙をこぼしだした。

「もう、嫌い、大つ嫌い！」

「フォオン…。」

「バカ、嫌い…。嘘よ…ごめんなさい…。」

なんだかとつても情緒不安定な様子である。

「おお、やつと戻ってきたかね。」

オスマンが出迎えた。

「もう大変じやつたんじやよ？ これからはできる限りミス・ヴァリエールから離れんでいてくれんかね？」

「フォオン。」

なんだから自分がいない間、ルイズは大変だつたらしいことが分かつた。  
「ううう。」

ルイズを落ち着かせるため、ルイズを抱きしめると、抱きしめ返された。  
ポンポンと背中を叩き、頭を撫でる。

アルマロスの胸に顔を押し付けグスグスと泣いていたルイズはやがて落ち着いた。  
「別に…心配してたわけじやないんだからね？」

「フォオン。」

「ところで何か収穫はあつたわけ？ 宝探しに行つてたんじよ？」

「フォ。」

アルマロスは、ガーレを見せた。

「何それ？ もしかして、それがガーレ？」

そうだとアルマロスは頷いた。

「ええ、やつぱりあつたんだ。」

やはりこの世界には、アルマロスがもといた世界の技術が流出している。理由は分からぬ。

すると風が吹いた。

冷たい風だつた。

「また…。」

ルイズが眉間を寄せた。

アルマロスは、空を見上げた。

雲がかかつて少し灰色がかつた空から、僅かな雪がちらついた。

雪とは…、こんなに嫌なものだつただろうか？

なんだか嫌な感じがする冷たい風と、雪にアルマロスも眉間を寄せた。  
ズキリツ

「フオ…！」

「アルマロス？ アルマロス！」

急に痛み出した右胸を押え、アルマロスは膝をついた。

アルマロスは、そのまま倒れた。

ルイズの悲鳴と心配する顔が、アルマロスが最後に聞いて見たものだつた。

\*\*\*

『イーノックだけでも助かってよかつたよ。おまえも嬉しいだろう?』

ああ、自分は許されないのだ。

黒い彼に冥界に置き去りにされ、ベリアルの闇に飲まれた。

次に意識を取り戻した時、再びイーノックと対峙していた。自分はもうネザー体に変化していく自分が自分なのか分からぬ状態だつた。

早く。早く。自分を止めてくれと願つた。自分を倒してくれとイーノックに向けて願つた。

そして崩れいく体。闇の瘴気が溢れ出る中、声の出ない口を動かし、お礼の言葉を言つた。

ありがとうつと。

そして、すべてが闇に染まり、気が付くと、自分は……。

アルマロスは、そこで目を覚ました。

ふと横を見ると、ベットの端に顔を伏せているルイズの頭があつた。

「ここは、保健室だろうか、ベットの上に寝かされていた。」

「フオオーン…。」

「あ…、アルマロス？」

ルイズが顔を上げた。彼女の目に涙が浮かぶ。

「バカ…、バカバカバカバカ！ 心配させないでよ！」

ルイズがアルマロスの体に抱き付いた。

グスグスッと泣くルイズの頭を撫でた。

心配させてごめんっと。

「急にどうしたのよ？」

「フオオオン。」

ルイズの手に字を書いた。

急に胸が痛んだと書いた。

「大丈夫なの？」

もう大丈夫だと伝えた。

ルイズの手がアルマロスの右胸を撫でた。

「これが原因？」

それは分からぬ。

けれど右胸が痛んだのだ。

原因について考えられるのは、やはり右胸のルーンくらいだ。

「ねえ、アルマロス…、死んじやつたりなんて…しないわよね？」

ルイズをおいて死ぬわけにはわけにはいかない。

けれど…、もし…もしものことがあつたら…。自分は…。

「アルマロス。ダメよ。絶対ダメだから！ もし何かつても命を無駄にしないで！」

アルマロスの考えを呼んだのかそんなタイミングでルイズが叫んだ。

アルマロスは、苦笑し、ルイズの頭を撫でる。

ダメと言われても、自分は…きつと…。

冥界に攫われた少女を助けるために躊躇いもなく冥界に飛び込んでいったイーノツ

クのよう、躊躇いはしないだろう。

ふと窓を見ると、また雪が降っていた。

なぜだろう。

あの雪を見ていると、とても不吉な気持ちになる。

その不吉は、間もなく現実となる。

アルビオン共和国、レコン・キスタがトリステインに侵攻してきたのである。

## 第十七話 削れ行く墮天使の命

翌朝のことだつた。

アルビオンがトリステインに攻め入つてきたという報が入つたのは。それもタルブ村が戦場になつてゐるという。

アルマロスは、それを聞いて目を見開き、駆けだそうとしていた。

それをルイズが腕を掴んで止めた。

「アルマロス、どうする気なの？　まさか行く気なの？」

「……。」

「あなたが一人で行つたところで何もならないわ。いくらあなたが強くつても相手は大國よ！」

「フォオオン……。」

アルマロスは、やんわりとルイズの手を離させた。

そしてその手を取り、字を書いた。

いすれ敵は、この学院にも攻め込んでくるだろうと、書いた。

「でもゲルマニアに救援を要請すれば……、だつて同盟国なのよ？」

「フォオン…。」

恐らく間に合わないとアルマロスは首を振った。

「ダメ…、ダメだよ。行かせられない！」

「……。」

ふるふると首を振るルイズの肩をアルマロスは押した。  
するとアルマロス背に、半透明の翼が現れた。

「アルマロス！」

ふわりと浮いたアルマロスを掴もうとルイズが手を伸ばすがそれよりも早く、アルマロスは宙に浮き、猛スピードで空へ舞い上がつて行つた。

空へ飛んでいつたアルマロスを見て、ルイズは居ても立つても居られず、タバサのもとへ走つた。

「アルマロスを助けたいの！」

そうタバサに繰りつくように叫んだ。

\* \* \*

空を飛びながらアルマロスは、胸が痛むのを感じた。  
ズキリズキリつと痛むのを堪え、飛び続ける。  
やがてもうもうと燃え盛る草原が見え、空に浮かぶ艦隊と、竜に跨った人間達が見え  
た。

「フオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！」

アルマロスは、ガーレを装備し、光の矢を竜兵達に放つた。

突然の襲撃に対応できなかつた竜兵達がたちまち撃ち落された。

腕を振るい、矢の軌道を変え、変幻自在のガーレの動きで次々に竜を撃ち落していく。  
艦隊にも穴を空け、手加減なしに破壊していく。

アルマロスを撃ち落そうと砲撃が、魔法が四方八方から飛んでくるが、アルマロスは  
すべて避け、無効化し、次々に大軍を蹂躪していく。

その間にも胸は痛んだ。

まるで自分の中の何かが削れていくような、そんな気がした。

だがそんなことは構つていられない。

守らなければ。

戦わなければならぬ。

自分を慕ってくれる人達、自分を助けてくれたルイズのため、戦わなければ、守らなければならぬのだと。

そのためならば自分は…。

アルマロスは、歯を食いしばり、ガーレを振るい続けた。

突然の、それもたつた一人の襲撃者のより、アルビオンが誇る竜騎兵達は混乱していた。

艦隊も次々に撃ち落されて海へ落ちていく。

見えないほどの速度で撃たれる光の矢に、竜の翼が撃ち抜かれ、鎧ごと体を貫かれる。

「やはり来たか、堕天使！」

「フオオオオオオオオオン！」

風竜に乗つたワルドが接近してきた。

アルマロスは、ワルドの突撃を避けた。

ふいにズキンッと大きな痛みが走り、咄嗟に胸を抑えた。

「どうやら万全ではないらしいな！」

ワルドが笑い、魔法を放ってきた。

ライトニング・クラウドがアルマロスの翼に当たり、アルマロスの体が地へ落ちていった。

そこへダメ押しとばかりに周りにいた竜騎兵から魔法や火ノブレスが放たれアルマ口スを攻撃した。

絶叫したアルマロスの背に再び翼が発生し、体制を整えたアルマロスは、ガーレを飛ばした。

集まっていた竜騎兵はたちどころに撃ち落されていった。

ワルドの風竜も、そしてワルドも背中を撃たれ、墜落していった。

あらかた竜騎兵を撃ち落したアルマロスは、吐血した。

限界は近かつた。

\*  
\*  
\*

タバサの風竜・シルフィードに乗ったルイズは、上空で戦うアルマロスを見つけた。

「アルマロス！」

「危険。」

タバサが言つた。

遠目に見て、アルマロスが吐血するのが見えた。

「アルマロス！」

ルイズは、身を乗り出すがタバサが止めた。

タバサは、これ以上は近づけないと言つた。

草原にはアルビオン兵で埋め尽くされ、竜騎兵は全滅したが上空にはいまだ多くの艦隊がいる。

ルイズは、自問自答した。

なんとか、なんとかしなければ、アルマロスは…。  
ふと自分が持つていて始祖の祈禱書を見た。

いつの間にか開かれていた白紙のページに、何か文字が浮かんでいた。

「これは…。」

「なに？」

「もしかしたら…これで…。」

タバサを無視して、ルイズは夢中で始祖の祈禱書を読んだ。

そこには、伝説の系統、虚無のことが書かれていた。

「……エオルー・スヌ・ファイル・ヤルンサクサ……」

ルイズは始祖の祈祷書に浮かんだルーンを詠唱しだした。

「オス・スヌ・ウリュ・ルラド……」

目を閉じ、杖を構え、詠唱を続ける。

「ベオーブズ・ユル・スヴュエル・カノ・オシエラ……」

アルマロスのことを想う。

彼は命を懸けて戦っているのだ。ならば自分も……。

「ジエラ・イサ・ウジュー・ハガル・ベオーケン・イル……」

長い詠唱の末、ルイズは目を開き、杖を振るつた。

強大な爆発が、空に広がり、艦隊を燃やした。

視界にあるすべての人が、ルイズの呪文に巻き込まれた。

タバサは、そしてすべての人々が信じられないものを見た。

今まで散々にトリステインの、タルブ村を蹂躪していた艦隊が、燃えていく。  
小型の太陽のようなそれは光はすべてを包みこんだ。

咄嗟に目を閉じる。

あまりの眩しさに、あまりの破壊力に。

アルビオンの侵攻に対処するべく駆けつけて来たアンリエッタとトリステイン軍も、

言葉を失い咄嗟に光を遮つた。

それほどの凄まじい光の爆発であつた。

くらりとルイズが倒れる。それをタバサが受け止めた。

「アルマロス…」

「フオオオン…」

「アルマロス！」

ぼんやりとアルマロスを呼んだら、すぐに声が聞こえてきた。

アルマロスは、半透明の翼を広げて空を飛んでいた。

「アルマロス…」

ルイズは、涙ぐんだ。

その時、アルマロスがハツとした顔をして、後ろを向いた。  
その瞬間。

アルマロスの右胸を、鋭い氷が貫いた。

ルイズが目を見開き、現実を認識するよりも早く、アルマロスが地へ落ちていった。

「アルマロスうううううううううううううう！」

少し遅れてルイズが絶叫した。

地に落ちていったアルマロスを追つて、風竜が降りた先には、氷のつららのようなも

のに右胸を貫かれ、びくりとも動かないアルマロスがいた。

ルイズは悲鳴を上げ、アルマロスに駆け寄った。

ブルブルと震えながらアルマロスに手を伸ばす。

顔に触ると、ひんやりとした感触が伝わる。彼の体温が極端に低いことが分かつていた。だが一層冷たく感じた。

「いや……いや……いやあ！」

ルイズは、涙をこぼしながら首を振った。

「アルマロス……、アルマロス！」

名前を呼ぶが、まつたく動かない。

「ルイズ……。」

タバサが後ろから話しかけた。

「嘘よ……。こんなの……。」

ルイズは、頭を抱えた。

『落ち着け娘っ子！』

『デルフ……。』

アルマロスの腰に引っかけられていたデルフリンガーが言つた。

『水を抜け！　まだ相棒は死んじやないない！』

「ほ、本当？」

『いいから！　早くしやがれ！』

「分かった！」

ルイズは、アルマロスに刺さっている氷を掴んだ。

「きやああああ！」

掴んだ途端、凄まじい冷たさで手が火傷した。

「なにこれ!?」

『チツ！　こりやただの氷じやねえか…。やべえぜ、相棒…。』

「!!」

『娘っ子、おい！』

しかしルイズは構わず氷を掴んで引っこ抜こうと踏ん張った。

「うううううう！」

冷たさによりジュー・ジューっとルイズの手が、焼けていく。

『愚かな……。』

地の底から響くような低い声が聞こえた。

『我的氷に触れて、なおそこまでするか…。よい根性をしている…。だが、その天使は

…。』

「うるさい！」

ルイズは叫んだ。

ゆっくりと、だが確実にアルマロスの右胸から氷の塊が抜け始めた。

『…ほう？』

低い声は、感心したように声を漏らした。

「ああああああああああああああ！！」

そしてついにアルマロスの右胸から氷が抜けた。

氷は抜けると、宙で飛散した。

アルマロスの右胸から闇色の煙が出てくる。

「アルマロス！　アルマロス！」

ルイズは火傷した手でアルマロスの体を揺すつた。

アルマロスの閉じられた瞼がピクピクと反応した。  
やがてゆっくりと目が開いた。

「フォオーン…？」

「アルマロス！」

起き上がりつたアルマロスは、自分の右胸を見て、手で撫でた。するとウオツチャ一  
スツが傷を塞いだ。

「アルマロス…。」

「フォオーン！」

アルマロスは、ルイズの手が酷いやけどになつてゐるのを見て驚いた。  
「よかつた…。」

ルイズは、泣きながらアルマロスに抱き付いた。

『ほう…、大した根性だ…。』

「フォオーン!?」

アルマロスは、その声を聞いて宙を見回した。

空が陰つており、空の向こうからその声が聞こえてゐるようだつた。

『異界の天使よ…、いや、堕天使か？　まさか我と同じとはな…。』

「フォオーン…。」

『我が何者かだと？　私は、この世界で堕天使と呼ばれている者…。名はない…。私は、  
ハルケゲニアの神により奪われた無様な堕天使よ。我的前にこれからも歯向かうのな  
ら、私は赦はしない。覚えておけ。異界の堕天使よ。』

そして声は聞こえなくなつた。

アルマロスは、自分を抱きしめて泣いてゐるルイズを慰めながら、先ほどの言葉を思  
い返した。

自分を異界の墮天使と呼んだ相手は、この世界の墮天使らしい。

先ほどの氷の矢も、その墮天使が放つたものだろう。

最近降っていた不吉な雪も、その墮天使によるものだとしたら、何かもつと不吉なことが起ころうとしているのかもしれない。例えそうだとしても自分は……。

アルマロスは、ルイズを抱きしめた。  
必ず守つてみせる。

そうアルマロスは決意した。

## 第十八話 アルマロスの眠り

アルビオンの大軍は、それより少ないトリステイン軍に負けた。

ルイズが放つたエクスプロージョンの魔法によりレコン・キスタが誇っていた艦隊は壊滅。竜騎兵もアルマロスが全滅させた。

この戦いにより、アンリエッタは、先陣を切つて戦つた功績により聖女として崇められ、女王として即位することになり、ゲルマニアの皇帝との婚姻も破棄となつた。

「アルマロスー、また寝てるの？」

アルマロスは、最近よく寝るようになつた。

疲れているからなのだろうか、それとも右胸を貫かれた傷によるものなのかは分から  
ない。

戦とは無縁の学院は、いつも通りであつた。

ちよつとオスマンから勝利を祝う言葉があつたくらいで、それ以外は普通であつた。

アルマロスは、そのことにホツとしたのか、帰つて来るなり倒れるように眠つてしまつた。

まつた。それでルイズがワーウー泣いた。

息があると分かると、ルイズもホツとして、エクスプロージョンを使った疲れもあってその場に倒れ込みちょっとした騒ぎになつた。

先に起きたルイズだが、アルマロスは中々起きなかつた。だが呼吸はあつた。

心配で医者に見せようかとも思つたが、墮天使であるアルマロスを見せたところで分かるわけがない。それにアカデミーに知られるわけにはいかないので見せるのは無しだつた。

「アルマロスさんのお世話は私に任せてください。」

「お願ひね。」

最近じやアルマロスが授業にも中々出られないこともあり、ルイズが授業に出ている間はシエスタがアルマロスの看病をすることになつた。他に仕事があるシエスタだが、ルイズがシエスタを指名したことでの仕事を免除してアルマロスの看病を仕事をすることになつていた。

当然だが、ダンスの講師もできるわけもなく、アルマロスの不調について心配する声が多数寄せられ、お見舞いの品を持つてくる生徒もいた。

授業が終わり戻つてみると、アルマロスは、まだ眠つていた。

「今日は、丸一日か…。」

「寝る時間が伸びてる気がしますね‥。」

シエスターも心配そうに寝ているアルマロスを見ていた。

眠りっぱなしではいずれ体がもたなくなるだろう。飲食が必要だ。すると部屋のドアがノックされた。

「はい。」

「ミス・ヴァリエール。おるかのう。」

「オールド・オスマン!」

オスマンだった。

「アルマロス殿は、まだ眠つておるのか‥。」

部屋に入つたオスマンは、ベットで眠つたままのアルマロスを見て言つた。

「今日はほぼ一日です。」

「そんなにか‥。うーむ‥。」

オスマンは少し唸り、やはりかつと呴いた。

「やはり、とは?」

「いや、こっちの話じやよ。じやがこのままではアルマロス殿の体がもたん。なんとか

してやらんとな。」

「はい‥ですが‥。」

「そこでじや。これは、わしの知人から聞いたことなんじやが……。」

「な、なんですか？」

「……もしかしたらアルマロス殿がこうなることを見越して教えてくれたのかもしれん。」

「その方法とは!?」

ルイズは、ずずいとオスマンに詰め寄つた。

「宝物庫に来るんじや。」

「はい！」

ルイズは、オスマンに連れられて学院の宝物庫に行つた。

宝物庫の中で、特に古さびれた宝箱があつた。

「これを開けてみなさい。君なら開けられるじやろう。」

「えつ？」

「君は彼のパートナーじや。きつと応えてくれるじやろう。」

「はい……。」

ルイズは、不思議に思いながら、宝箱に触れた。

すると宝箱がひとりでに開き、中から光り輝く球体が出てきた。

「これは祝福の光。本来ならこの世界の神ではない、異界の神がもたらす光じや。」

「なぜそんなものが…。」

「これは、わしの古い知人……、黒い天使から受け取った物じやよ。」「くろいてんし？」

「外見はまったく天使に見えんのじやが、強大な力持つ天使じやつた。自由に世界を行き来する力を持つほどのな。もしかしたらアルマロス殿がこちらに来ることを見越して、これをわしに預けたのかもしけん。」

「その天使つて…。」

「恐らく、アルマロス殿と因縁があるじやろうな。じやが彼はここにはいない。確かめようもない。さあ、これをアルマロス殿に。」

「はい！」

ルイズは、光の球体を持って宝物庫から出て行つた。

「……果たして神は、アルマロス殿をお許しになるのかのう？　のう、黒い天使殿？」

オスマンは、ここにはいない黒い天使に向かつて呟いた。

部屋に走つて戻ってきたルイズは、眠つているアルマロスに、光の球体・祝福の光をかざした。

すると光が強まり、吸い込まれるようにアルマロスの体に取り込まれていつた。

「……フオ？」

「あ…、アルマロス？」

「？」

アルマロスの目が開き、ぱちぱちと瞬きをして、ルイズを見た。ルイズは震え、アルマロスに抱き付いた。

「フオオオン？」

「バカ、もうバカ！ いつまで寝てるのよ！」

「……」

「…アルマロス？」

なんだから様子が変だと思ったルイズが顔を上げようとした時、アルマロスがルイズを引き離した。

「フオオオオン？」

「えっ？ エッ？ どうしたの？」

「アルマロスさん？」

シエスタもアルマロスの様子がおかしいことに首を傾げた。

アルマロスは、自分の手に字を書いた。

『君は、だれ？』 つと。

「!?!」

ルイズは愕然とし、アルマロスの顔を見た。

アルマロスは、首を傾げた。

本当に覚えていないらしい。

ルイズは、ふらつとした。それをシエスタが慌てて支えた。

「ミス・ヴァリエール！ しつかり！ アルマロスさんどうしたんですか！」

しかしアルマロスは、困った顔をしているだけだった。

「ダーリン、あたしを忘れちゃったの!?」

「フォオーン？」

「あー、これは完全に忘れてるね。」

アルマロスの困り顔を見てギーシュが言つた。

アルマロスの記憶喪失の話題は、すぐに広まつた。

アルマロスを先生と慕っていた生徒達は、ルイズにどういうことだと詰め寄り、ルイズは、アルマロスの記憶喪失のショックが抜けず呆然としたまま使い物にならず、学院が軽くパニックだつた。

「オールド・オスマン…。」

「わしにも原因が分からん…。」

「あれが原因なんじや…。」

「うーむ…。」

オスマンは唸つた。

使い魔の記憶喪失。ルーンは残つてゐる。

一時的なものと思いたいが、もしづつとだとしたら…。

「大変です！ アルマロス殿がまた倒れました！」

「アルマロス！」

学院長室からルイズは飛び出していつた。

駆けつけると倒れているアルマロスが生徒達に囲まれていた。

「アルマロス！ アルマロスう！」

「…フオオオン？」

やがてアルマロスが目を覚ました。

アルマロスは、ゴシゴシと目をこすり、ルイズを見た。

そして自分の手に、『どうしたの？』つと書いた。

ルイズは、震えた。

「あ、アルマロス…あなた…、記憶が…。」

「？」

アルマロスは、どういうことだというふうに首を傾げた。  
それを見たルイズは確信した。

思い出していると。

「バカ…………!!」

「フォーン!?」

泣きだしたルイズに、アルマロスは殴られた。

アルマロスの記憶喪失は、本当に一時的なもので終わつた。

＊＊＊

アルマロスは、周りに謝つて回つた。

ルイズには土下座して謝つた。

「土下座なんてしないでよ…。」

「フォオオン…。」

でもこうでもしないと気が治まらない。

一時的とはいえるを傷つけてしまったのだ。

「記憶喪失はあなたの責任じゃないわ。体の方だつてまだ本調子じやないんだからムチヤしちゃダメよ。」

「フオオン…。」

『相棒。気持ちは分かるが、落ち着けつて。ほれ、深呼吸深呼吸。』

デルフリンガーに促され、アルマロスは深呼吸した。

「もう…、忘れないでよ？」

「フオン。」

アルマロスは頷いた。

『できねー約束はすんじやねえぞ？　また忘れるかもしけねーからな。』

「フオオン！』

『おいおい、怒るなつて。本当のことだろ？　おまえさんの体は、何が起ころうか分かつたもんじやないんだからな。』

デルフリンガーの言葉に、アルマロスは口をつぐんだ。

確かに、この世界に来てから、調子がいいとは…、お世辞にもいえなかつた。

アルビオンでワルドを倒しきれなかつたのがいい例だ。

いつまた何が起ころるか分かつたものじやない。デルフリンガーの言う通りだ。

「アルマロス。」

ルイズが呼んだ。

「…ショックだつたわ。」

「フオ…。」

「あなたが私を見て、誰なのか分からないって顔をしたのが…。すぐく、怖かつた…。」

「…。」

「嘘でもいいから約束して。もう忘れないって…。」

「フオオン。」

アルマロスは、ルイズの手を取り、『約束する』と書いた。

『なあ、相棒。おめえは、間違いなくこの世界の天使じやねえ。だからだろうな。もしかしたら記憶がなくなつたのも拒絶反応が出たとかかもしけねえぜ？　おまえさんが、このまま娘っ子の使い魔でいられるとは、思えねえんだ。』

「デルフ！』

『娘っ子も思うだろ？　いつまでもこの状態が続くつて思えねえだろ？』

「つ…。」

団星を突かれ、ルイズは言葉が出なかつた。

確かにこのままでは、いずれアルマロスは……。

しかしそう思つても、方法が分からぬ。どうすればアルマロスをこの世界に留めておけるのかなんて。

「あつ。」

そこでルイズは、唯一アルマロスについて知識がある人物の顔が浮かんだ。

学院長室にて。

「すまんのう。わしもそれ以上のこととは知らんのじや……。」

「そうですか……。」

縋る気持ちで尋ねたが、結局何も得られなかつた。

「せめて黒い天使さんに会えれば……。」

「フォツ！」

「アルマロス？」

黒い天使と聞いて、アルマロスは過剰に反応した。

アルマロスは、冷や汗をかいて首を振つた。

あまりこの話題はしてほしくなさそうだつた。

「やはり何か関係があるのかね……。『彼』と……。」

「フォオン…。」

アルマロスは、とてもじゃないが話す気になれなかつた。

「あまり触れてほしくなさそうじやな。この話題は終わりにしよう。」

そう言つたオスマンに、アルマロスはお礼を伝えた。

「ともかく、無理はするんじやないぞ？」

「フォン。」

アルマロスは頷いた。

\*\*\*

無理をするなと言われたが、アルマロスは、今までの遅れを取り戻すようにダンスと格闘技（体育）の講師をした。

アルマロスの復活を喜ぶ声があがる一方で、心配する声もあがつた。  
また倒れるのではないか。また記憶を失うのではないかと。

アルマロスは、心配するな、もう大丈夫だと説明した。

しかしそれでも不安はぬぐえない。

アルマロスの授業は前の半分に抑えられ、アルマロスはその分暇を見て余すことになつた。やるべきことは、筆談で教師達に伝えた。

『まあ、そう気を落とすなよ、相棒。みんなおまえさんのことを持つてそうしてんだからよお。』

「フオオン…。」

『暇なら踊るか？』

「フォン…。」

『見られたら注意されるつて？ 難儀だね。慕われるつてのも。』

するとアルマロスは立ち上がった。

もう我慢できんと言わんばかりにウオツチャースーツから、踊り子の衣装に変わつた。

『お、相棒、踊るのか？』

「アルマロス…。」

「！」

後ろを見るとルイズがいた。  
恐い顔をしていた。

「ムチャしちゃダメって言つたわよね？」

「フ…、フォオン…。」

「じゃあなんのその恰好は？ 今から踊ろうとしてたでしょ？」

「…。」

アルマロスは、逃げた。

「待ちなさい———い！」

ルイズが追いかけた。

ルイズは早かつた。アルマロスは、手加減して走っていた。本気で走ればルイズを巻くなど簡単だが、そうはしなかった。

体を動かしたい。その一心だったのだから。なんでもよかつたのだ。

つというわけでルイズとの追いかけっこに興じた。ルイズだけは知らない。

散々に走り、アルマロスは、気が付けばルイズが後ろにいないことに気付いた。どうやら巻いてしまつたらしい。仕方ないのでルイズを探すことになった。

寮の廊下を歩いていると、なんだか騒がしい。

するとルイズが部屋の一つから突き飛ばされて出て來た。

「フォン！」

「あ…。」

ルイズがアルマロスを見た。

すると、ルイズの顔が見る見るうちに赤面した。

「？」

「バカバカ！ ムチャしちゃダメって言つたでしょ！ なのに、なのに！」

ルイズは立ち上がり、アルマロスの胸をポカポカと叩いた。

「……アルマロス。立派な腹筋ね……」

「フオオーン？」

なんだか様子が変だ。

すると部屋の扉から恐る恐るといった様子で、巻き毛の金髪の少女がこちらを見てい  
た。

「ああ……、なんてことなの……。」

この世の終わりという感じで少女が呟いた。

「モンモランシー？」

するとギーシュの声が部屋の中から聞こえた。

「アルマロス……、ああ、もう素敵なんだから！」

「フォーン！？」

急にルイズが、スリスリとアルマロスの体に抱き付いて頬ずりをしだした。

「なんであなたってば素敵なの！　ねえ、どうして？　どうして？」

「フオ…フオオン？」

「どういうことだと巻き毛の少女を見ると、少女は目をそらした。

「もしやモンモランシー…、ワインに何か仕込んだのかい？」

「……そうよ。ええ、そうよ！　あなたがいけないよの、ギーシュ！」

モンモランシーという少女がまくしたてた。

「あなたがあんな一年に手を出すから私…私…」

「いつたい何を仕込んだんだい？」

「……惚れ薬。」

モンモランシーは、ぽつりと言った。

惚れ薬…。まあ読んで字のごとくであろう。

ルイズは、アルマロスに、素敵、大好き！つといまだ頬ずりをしてきている。

なるほど、理由は不明だが、ルイズは誤つて惚れ薬を飲み、アルマロスを見て惚れてしまつたのだ。

厄介なことになつたと、アルマロスは、額を押さえた。

『モテる男はつらいねー。』

などと囁し立てて来るデルフリンガーを、アルマロスは、べちんつと叩いた。

# 第十九話 墮天使と水の精霊

アルマロスは、困っていた。

「アルマロス、アルマロスつてば。こっち向いてよ。」「……」

今のルイズを直視できない。

ベタベタと、体を触ってきて、とろんとした顔をしたルイズ。いつものキリツとしたルイズは、どこへやら。

「いや、すまないな…。アルマロス君…。」

「フオオオン…。」

ギーシュが謝ったが状況が変わらぬわけがない。気休めはやめろとアルマロスは、声を出した。

アルマロスは、背中にルイズをくつつけたまま、自分の手に字を書いた。

『惚れ薬の効果はどれくらいかかる?』つと。

「そうだね…。一か月…、一年以上かかるかもしないな。」

「フォオン!?

長つ！つとアルマロスは、驚いた。

「ま、まあまあ、今モンモランシーが解除薬を作るために奔走してくれているよ。それまでの辛抱だ。」

「それがそうもいかないのよ。」

そこへモンモランシーが来た。

「惚れ薬を作るのに、秘薬を使い切っちゃって、作れないのよ。」

「フォオーン！」

「ま、そういうことだから。」

「待つてくれ、モンモランシー。こんなことになつたのは僕らの責任なんだ。なんとかしないといけない。」

「あら？　ずいぶんと肩を持つのね？」

「彼には借りがあるんだ。」

ギーシュは、そう言つた。借りというのは、アルビオンへの道中に野盗に襲われた時、アルマロスに守つてもらつたことだ。

「でもどうしようもないわ。お金がないもの。」

「そうか…。」

ギーシュは、腕を組んで唸つた。

ギーシュからの説明によると、貴族にも色々いて、お金がある貴族とお金がない貴族がいる。ギーシュとモンモランシーの家は、お金がない貴族の分類らしい。

アルマロスは、手に字を書いて、『足りない素材は何だ?』つと聞いた。

「水の精霊の涙よ。ラグドリアン湖の水の精霊の。」

「フォオオン。」

「なに!? 取つて来るだつて! いくら君が水操ることが得意でも精霊を相手をするのはやめたまえ。」

「フォオン。」

「ルイズを元に戻したいからつてそこまで…。よし分かつた。僕もついていこう。」「ギーシュ、何を言つているの!」

「君もだモンモランシー。もとはと言えば、僕らの責任なんだから責任はとらなきやいけない。それに…、惚れ薬は禁制品だ。もしされたら君は檻の中だぞ? だから発覚する前に対処すべきだ。」

「うつ……、もう! 勝手にしなさい!」

ギーシュとモンモランシーがついて来ることになつた。

「ええー、アルマロス、どこ行くの! 勝手に行くなんて許さないんだからね!」

「……。」

ルイズも連れて行くことにした。

\*\*\*

ラグドリアン湖は、ガリアという国の国境にある。

大変美しいことで有名で、こここの水の精霊に誓約すると、誓約は永遠のものとなり、破られるることは決してないという。

つという話をギーシュから聞いた。

「わあ…、綺麗ね。アルマロス。でも、私は、アルマロスが水みたいな衣装を着て踊つてる姿の方が私は好き。」

「……。」

「ねえ？　どうして黙つてるの？」

ルイズは、目を潤ませた。

アルマロスは、それでも黙つたままだつた。

「アルマロス…、私のこと嫌いなの？」

ルイズの目からポロポロと涙が零れた。

しかしそれでもアルマロスは、ルイズを見ようとはしなかった。だが拳を握つていた。何かに耐えるように。

ギーシュは、その様子を不憫そうに見ていた。

「おかしいわ。」

モンモランシーが言つた。

「何がだい？」

「水位が上がつてゐる。」

言われてよく見ると、水の中に家があつた。

つまり…。

「村が水没してゐる。」

「もし、そこの方々…。」

すると、痩せこけた老人が話しかけて來た。

「もしや水の精霊と交渉しに来てくださつたのですか？」

「あの…、私達は別件で來たのですわ。」

「そ、ですか…。」

老人は肩を落とした。

アルマロスは、馬から降り、老人に近づき、自分の手に字を書いた。

『何があつたんだ?』つと聞いた。

「二年前から増水が始まって…、今じゃこの通り、村は水の中で…。」

暗い顔で語る老人の言葉を、アルマロスは真剣に聞いていた。

やがて老人は、自分達を助けてくれない領主やアルビオンのことで手が回らないトリステイン城にたいする愚痴を語るだけ語つて、去つていった。

「アルマロス君…、まさか…。」

「フォオン。」

「ああ…やはりか。交渉する気だね。」

ギーシュが腕をすくめる。

するとアルマロスは、ラグドリアン湖を見て、拳を叩いた。

「えつ？　ちよつと！　何をする気なの？」

「フォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

アルマロスが地面を殴つた。

水柱が立ち、水柱は地面を走り、ラグドリアン湖を引き裂くように命中した。

「ああああ、なんてことを！」

モンモランシーが頭を抱えて青ざめた。

アルマロスは、ラグドリアン湖に向かつて走り出した。

アルマロスによつて引き裂かれ、大きく波打つてゐた湖面が、ウネウネと動き出した。アルマロスは、湖面を走り、そのウネウネと動くところに向かつて拳を振りかぶつた。大きな水柱が立ち、アルマロスの姿が飲まれた。

「アルマロス！」

「ダメよ、ルイズ！」

駆けだそつとしたルイズを、モンモランシーが止めた。

「水の精霊を武力交渉するなんて……、よっぽど気が立つてゐるんだね……」

ギーシュは、半ば呆れながら言つた。

水柱がなくなると、アルマロスが湖面に立つていて、目の前に、アルマロスを模したような水の塊が立つて対峙していた。

アルマロスが拳を振るうと、水のアルマロスも拳を振り、拳同士がぶつかつた。水が弾け、衝撃波が湖面を揺るがした。

「うわあああ！ 激しいな！」

水しぶきは、岸辺にいるギーシュ達にもかかつた。

「フオオオオン！」

『……人ならざる者よ。いかなる要件があつて、我に挑むか？』

「フォン？」

アルマロスを模している水の精霊が美しい声で聞いてきた。

アルマロスは、構えを解いた。すると水の精霊も構えと解いた。その様は、まるで鏡のようである。

「フォオン…。」

『案ずるな。おまえの言いたいことは言葉にせずとも分かる。おまえの波動と共に感させれば言葉など不要だ。』

アルマロスは、それならば早いと、水の精霊をまつすぐ見つめた。

アルマロスを模している水の精霊が揺れた。

『我の一部…、そして人の里の水位を下げろと…。我的一部は持ち帰るがいい。だが水位は下げられぬ。』

「フォオン？」

『我と共に感せよ。おまえならば言葉など必要あるまい。』

「…。」

アルマロスは、意識を集中し、水の精霊から水の精霊の気持ちを読み取った。  
そして眉を寄せた。

「フォオオン。」

『頼むぞ。』

そう言つて水の精霊は、ラグドリアン湖の水に戻つていった。  
湖面の上に残されたアルマロスは、ルイズ達のもとへ戻つた。

「それで？ なんだつて？」

「フォオオン…。」

アルマロスは、手に字を書いた。

『精霊に仇なす敵を倒すことが水の精霊の涙をもらう条件』だと。

「水位の件は？」

『アンドバリの指輪を奪還することが条件。ただし無期限。』つと書いた。

「敵はともかく、アンドバリの指輪だつて？」

『死者を蘇らせる力を持つ指輪。奪つたのは、クロムウエル：かも』つと書いた。

「クロムウエル：つて、アルビオンの新皇帝が？」

「人違ひじやないの？」

盗んだ人物は、ともかく、まずは水の精霊を脅かす敵を退治することとなつた。

\*\*\*

その夜。

ガリア側の岸辺に身を潜め、水の精霊を襲う敵を待つた。

やがて黒いロープを纏つた、二人の人物が岸辺に近づくのをアルマロスは見つけた。  
「来たのかい？」

「フォン。」

小声でギーシュと会話をした。

「僕がワルキユーレで陽動する。君は、あのガーレという武器で…。」

「フォン。」

アルマロスは、ガーレを構えた。

しかしその直後。

風の衝撃がアルマロス達が隠れている位置に当たり、隠れるために利用していた茂み  
が吹き飛んだ。

「！」

「な…。」

敵は先にこちらに気付いて攻撃してきた。

ギーシュは固まり、アルマロスは、すぐにガーレを飛ばした。ガーレの光の矢が、襲撃者が放つた風の壁によつて軌道がそれ、襲撃者の体のギリギリの位置を飛んだ。

「フオオオオオン！」

アルマロスは、前に出て、ガーレからアーチに変え、斬りかかろうとした。だが、その時。

「だ、ダーリン!?」

「！」

聞き覚えのある声に、アルマロスは止まつた。

襲撃者の一人が慌ててロープを外した。見覚えがある鮮やかな赤毛。そして褐色の肌。キユルケだつた。

「どうしてここに!?」

「フォオン。」

それはこつちの台詞だとアルマロスは、武器を下ろして声を上げた。

もう一人もロープを外した。タバサだつた。

「な、なぜ君達が…。」

「それはこつちの台詞よ。なんでダーリン達が水の精霊を?」

「フォオオーン……。」

アルマロスは、キユルケの手を取り、字を書いた。

「水の精霊の涙を手に入れる条件ですって？ なにがあつたの？」

アルマロスは、説明も億劫だが、仕方なく説明した（筆談）。

「あらまあ……、気の毒にダーリンつてば……。」

「ちよつとお、キユルケ！ アルマロスから離れなさいよ！」

アルマロスの腕を掴んでルイズがアルマロスを引っ張った。

そして、キユルケ達が、なぜ水の精霊を襲っていたのか、その理由も聞いた。タバサの実家からの命令で、ガリアの領土を浸食する水の水位を上げている水の精霊の退治をするためだつたそうだ。

「困つたわねえ。ダーリン達が水の精霊を守つてているようじゃ、これ以上戦えないわ。」「フォオーン。」

「えっ？ 水の水位が上がつていてる理由は分かつてるですか？」

アルマロスは、アンドバリの指輪を奪還することが水位を下げる条件だと説明した。

「アンドバリの指輪……、ちよつと噂で聞いたことがあるわね。」

アルマロスは、水の精霊から、その指輪が偽りの命を死者に与えるモノであることを説明した。

「偽りの命…。」

『蘇つた死者は、操り手の人形になつてしまふ』のだと、説明した。

「気持ちの悪いマジックアイテムね…。」

「まつたくだ。悪用されたらまつたものじやない。」

キュルケ達は、説明を聞いて（筆談）、嫌そうな顔をした。

「とにかくその指輪さえ取り返せれば、退治しなくてもいいわけね。でも…盗人はクロムウェルって…、アルビオンの新皇帝かもしれないのよね？ アルビオンまで行つてアルビオンの大軍に突つ込めって言うの？ ムチャよ…。」

「退治する方が早い。」

「それだと僕らが水の精霊の涙を手にいられられなくなる。」

「フオオオン。」

「えつ？ もう一度水の精霊と交渉するつて？ 応じてくれるだろうか…。」

ギーシュの不安を他所に、アルマロスは、再びラグドリアン湖に向かい、湖面を歩いた。

中央に行くと、水がうねりだし、再び水の精霊がアルマロスの姿を模して現れた。

『約束できるのか？』

「フォオオン。」

『……いいだろう。おまえの命が尽きるまでの間に、必ず。』

「…フオオン。」

短いな…つという風に、アルマロスは少し俯いて声を漏らした。

水の精霊は、再びラグドリアン湖の水に戻つていった。

「フオ、フオオオン！」

『すまない。忘れていた。』

そう言つて、ピチピチと湖面が揺らぎ、水の塊が宙に浮き上がり、アルマロスがそれを手で受け止めた。

アルマロスは、水の精霊の一部である、水の精霊の涙を持つて、湖面から陸地に戻つた。

そして手にすくうように持つてゐる水の精霊の涙を、モンモランシーが持つてきただ瓶に入れた。

「これで一件落着？」

「フオオン。」

アルマロスは、頷いた。

「ねえアルマロス…、本氣でアンドバリの指輪を取り返しに行くの？」

「フオオン。」

約束だからだと、アルマロスは字を書いた。

「アルマロスに何かあつたら、私…。」

ルイズは泣きそうになりながら言つた。

アルマロスは、ルイズの頭に手を置いて撫でた。

こうして、水の精霊との交渉（？）は、終わつた。

\*\*\*

学院に帰つて早々、モンモランシーは解除薬を作つた。

惚れ薬を作つたということを口外しないことを約束し、アルマロスは、薬を受け取つた。

「フォオン。」

「イヤよ。それ臭いもの。」

「フォオン！」

嫌がるルイズにアルマロスは、それでも薬を突きつけた。

ルイズは、薬と、アルマロスを交互に見た。

「ねえ…、どうしても飲まなきやダメなの？」

「……。」

「この気持ちは本物よ。アルマロス。それでもダメなの？」

アルマロスは、首を横に振った。

「ねえ、アルマロス…。私…、あなたが来てくれて、本当によかつたって思つてゐるのよ。本当に、本当によ？ 嘘じやない。」

「……。」

「あなたへのこの気持ちが…、好意なのか、親愛なのか最初は分からなかつた…でも…。」

「フオオオン…。」

アルマロスは、首を振り、薬を押し付けるようにルイズに渡した。

「……（めんね。）アルマロス。」

ルイズは、一筋の涙を零しながら、薬を飲んだ。

そして。

「…………アルマロス。」

「フオン？」

「私を、殴つて。」

「フォーン!?」

「記憶が無くなるぐらい、ギタギタにして！」

赤面したり青くなったりと忙しく表情を変えるルイズが混乱しながら叫んだ。

## 第二十話　堕天使ＶＳ堕天使

その日。

初夏のトリステインに、雪が降つた。

ちらちらではない、大雪だ。

これは、不吉な予兆だと、誰もが思い、家を閉め切つた。

アルマロスは、窓の外を眺めながら、眉を寄せた。

この雪は、あの時、タルブの空でアルマロスの右胸を貫いた氷を放つてきた、ハルケ  
ゲニアの墮天使の仕業であろうか。

あの墮天使の目的は分からぬ。だがアルマロスに対して敵対意思はあるようだ。

「寒い……。」

ルイズが、毛布にくるまつて寒さに震えていた。

アルマロスは、ルイズを温めてやりたかったが、自分の体に体温がないことから触る  
ことすら躊躇われた。

「初夏に雪が降るなんて、普通じゃないわ。」

その通りだ。

しかしおかしいと思つても、現実に雪は降つていて、積もりだしている。

初夏の緑に、雪の白。美しいが、このままでは植物も寒さでやられてしまうだろう。それこそ農家などは大打撃だ。

なんとかしてあげたくても、墮天使の居場所が分からぬし、この雪が墮天使の仕業だという確証もない。

数時間して、雪はやんだ。

すっかり積もつた雪に、男子生徒達が中心に、雪だるまを作つたり、雪合戦を始めた。「こんな不吉な雪でもはしゃいじやうのね……」

冬服を引つ張り出してモコモコになつたルイズが、そう呟いた。

「あああ～、寒い！ ダーリンあつためて～！」

「フオオオン。」

走つてきたキルケを、アルマロスは、やんわりと止めた。

ハツキリ言つて自分の体は、雪のように冷たいのだ。抱き付かれたら余計に寒い想いをするのは目に見えている。

「アルマロスに近づくんじやないわよ、キルケ！」

「ああん、いいじやないの。ダーリン、寒くないの？」

「フォオン。」

アルマロスは首を振った。

普通に服を着ているが、ちつとも寒くなかった。

「アルマロスさん。」

そこへシエスタがやつてきた。

手に何か持っている。

「あの…、これよかつたら…。」

「なによそれ？」

「マフラーです。」

「フオ？」

「あの…えっと…、私の村のために駆けつけて戦つてくださった、せめてものお礼をと思つて…。」

シエスタは、モジモジと恥ずかしそうにしながら、アルマロスにマフラーを差し出した。

「あら、これ、手編み？」

「はい。」

アルマロスは、シエスタからマフラーを受け取り、首に巻いた。

「わあ、お似合いですね。よかつた。」

アルマロスは、手に字を書いて、「ありがとう」と伝えた。  
ルイズは、そんな二人の様子を、複雑そうに見ていた。

「あらあら、焼きもち？」

「ち、違うわよ。」

「分かってるわよ、ルイズ。あなただつてセーター（？）を編んでるじゃないの。」

「あ…あああ、あれは…。」

とてもじやないが、アルマロスにあげられるような代物じやないことは、作ったルイズ本人がよく分かつていた。

つと、その時。悲鳴が聞こえた。

「な、なに!?」

「あれは！」

見ると、誰かが作つたであろう雪だるまが、生徒達に襲い掛かつっていた。

アルマロスは、すぐにベイルを装備すると、雪だるまを打ち碎いた。

「ありがとうございます！ アルマロス先生！」

「フォオオン。」

「ダーリン、後ろ！」

キユルケが叫んだ時、アルマロスの背後で、雪がモコモコとひとりでに盛り上がり、雪のモンスターが現れた。

しかし襲い掛かつて来るよりも早く、アルマロスが振り返ることなく、裏拳でモンスターを打ち碎いた。

すると周りからモコモコと次から次に雪のモンスターが現れた。

アルマロスは、周りを見回し、体を大きく回転させ、水のエネルギーを放ち、すべてのモンスターを溶かし、碎いた。

「さすがダーリン！」

「相変わらずすごいわね。」

すべてのモンスターがいなくなり、キユルケはうつとりとし、ルイズは感心した。

『ククク…、その程度の力か。』

「こ…、この声…。」

『相棒、気を付ける！』

風で雪が舞つた。

すると竜巻が起こり、雪が一か所に集まつた。

雪は黒く染まり、ボロボロの翼となり、さらに人の形を作つた。

この世の者は思えぬ、美しい顔であつたが、髪はボロボロに長く、着ている服も黒

くてボロボロだつた。

アルマロスは、突然現れたその相手を睨んだ。

『久しいな。とはいへ、こうして顔を合わせるのは初めてであつたな。』

「フオ！」

『私は、この世界にて、おまえと同じ堕天使よ。だが名はない。憎き、この世界の神に奪

われたのだ。笑うがいい。』

そう自虐的に笑う堕天使。

見ためこそみすぼらしいが、その圧倒的な、そして邪悪なオーラに、その場にいた全員が背筋が震えた。

『しかし、見れば見るほどに旨そうな子らよ。魔を操りし血筋の若き血がこれだけ集まつているのも珍しい。ぜひにとも手に入れたいものだ。』

「フオオオン。』

『させないだと？　おまえにできるのか？』

不敵に笑う堕天使に、アルマロスは、ベイルを構えた。

その時、堕天使の背後につららのような氷が現れ浮遊した。

アルマロスは、同じ数だけ水のエネルギーを発生させ背後に浮かせた。

『我が氷。おまえは、水。クク：、結構かぶつてる。』

墮天使は、つららを飛ばした。

アルマロスも同時に水のエネルギーを飛ばした。氷と水が衝突し、宙で弾けた。霧のように弾ける氷と水の中、アルマロスが走り、ベイルの先を墮天使に振りかぶった。

墮天使は、細い腕に氷を纏い、ベイルを受け止めた。

『異界の叡智か…。これはまともに喰らっては、我也ただではすまんな。だが…。』

墮天使は、細腕からは想像もできない力でアルマロスを弾き飛ばした。アルマロスは、地面に着地した。

『扱う者が不完全では真の力を發揮できまい。』

「フオオオオン！」

アルマロスは、アーチに持ち替え、斬りかかつた。

墮天使は、氷の剣を出した。

『遊んでやろう。』

「フオオオオン！」

アルマロスのアーチと、墮天使の氷の剣がぶつかつた。するとアーチがあつという間に黒ずんだ。

「！」

『ククク…、どうした?』

慌てて、離れたアルマロスは、アーチを浄化した。

『ほう? いちいちそうやつて闇を浄化するのか? 面倒なことだ…。』  
「つ…。」

アルマロスは、冷や汗をかいた。

アーチが一瞬にして穢れるほどの闇を、あの墮天使は持つのか。そう考えると、自分との格がまるで違うと思った。

果たして今の自分の力で、この墮天使に勝てるのか?

いや勝つ勝てないの問題じやない。ここで立ち向かわなければ…。

アルマロスは、ちらりと、ルイズや他の生徒達を見た。

彼女らを守れない!

そう決意したアルマロスは、強く墮天使を睨んでアーチを構えた。

そんなアルマロスを見て、墮天使は、クククつと笑い。

『今回は、ここまでにしてやる。次回はもつと遊んでやろう。それまでおまえの命が持てばな。』

そう言つて、雪と氷となつて消えた。

墮天使が消えた後、少し間をおいてアルマロスは、片膝をついた。

「アルマロス！」

ルイズが駆け寄つた。

「だいじょうぶ!?」

「フォオオン…。」

アルマロスは、額ににじんだ汗を拭いながら立ち上がり、ルイズの頭を撫でた。  
しかしアルマロスは、ふらつき、再び膝をついた。

「アルマロス！」

「フォオオン…。」

アルマロスは、強烈な脱力感と、右胸の痛みに耐えられず、ついに倒れた。  
ルイズの悲鳴と、生徒達が騒ぐ声が遠い。アルマロスの意識は闇に堕ちた。

\* \* \*

アルマロスは、闇の中で、誰かと向き合つていた。

『頼む…。助けてくれ…。』

その声は聞き覚えがあつた。

『アンリエッタが危ない…。助けてくれ。今の私ではどうすることもできない。どうか…私を…。…止めてくれ。』

ウエールズ！

アルマロスは、そう叫ぼうとしたが声が出ず、伸ばした手もウエールズには届かなかつた。

「アルマロス！」

「つ……フオ…。」

目を覚ましたアルマロスは、ベットで寝たまま手を伸ばしていた。

「嫌な夢を見たの？」

ベットの傍で椅子を置いて看病していたルイズが心配そうに言つた。

アルマロスは、起き上がり、ベットから降りた。

「ちよつと、どこへ行くの？」

「フォオオン。」

手に字を書いた。

『アンリエッタが危ない』 つと。

「姫殿下が？ どうして？」

「フオオオオオン。」

「待つて、アルマロス！」

ルイズを無視してアルマロスは、部屋から出て行つた。ルイズは、慌てて後を追つた。

夜の闇の中。

トリステイン城では、アンリエッタが誘拐されたために、大騒ぎとなつていた。

## 第二十一話 尻のウェールズ

アルマロスは、外へ出るなり、半透明の翼を出して空へ舞い上がった。ルイズは、タバサに頼みシルフィードに乗せてもらつて追いかけた。たまたまタバサと一緒にいたキュルケもなぜか一緒に来た。

「アルマロス！ 待つて！」

「ねえねえ、何？ 今度は何が起つてるわけ？」

「姫殿下に危機が迫つてゐるのよ！」

「ええ？」

キュルケは、信じられないと声を上げた。

アルマロスは、後ろを気にせず飛んでいた。  
ズキズキと胸が痛むがそれどころじゃない。  
夢の中で見たウエールズの訴え。

間違ひなく、彼は…。

やがてラ・ローシエルへ向かい走る馬の一団を見つけた。

その中に、黒いローブでくるまれたアンリエッタを見つけた。

「フオオオオオオオオオオオオオオン！」

アルマロスは上空から降下しながら叫び声を上げた、その叫び声に馬の一団が顔をアルマロスの方に向けた。

弓矢や魔法が飛んで来るよりも早く、アルマロスは、ガーレを飛ばし、馬の一団を射抜いていった。

先頭を、アンリエッタを抱えて走る者がいる。そいつを狙つて、アルマロスは、宙を舞いながら迫った。

そいつがくるりと顔を向けた。

その顔を見てアルマロスは、目を見開いた。

次の瞬間、凄まじい竜巻がアルマロスを襲い、風にあおられたアルマロスは、翼を消されて吹き飛ばされた。

しかし、吹き飛ばされながらガーレを飛ばし、馬を射抜いた。

馬から放り出されたその者は、アンリエッタを草原に転がし、自身は体制を整えた。頭につけていたローブが外れ、顔があらわになる。

「フオオオオオン！」

アルマロスは、叫んだ。

ウェールズ！つと。

そう、その人物は、死んだはずのウェールズその人だつた。

\*\*\*

「うそ……あれは、皇子……、ウェールズ皇子!?」

「えつ、あの凛々しい皇子様？ でもその皇子様つて……。」

「あの人は、アルビオンで……！」

ルイズの目の前でワルドに殺されたのだ。

それなのになぜここにいる？

ルイズは、ふいに先日の水の精霊の件のことを思い出した。

アンドバリの指輪。死んだ者を蘇らせる力を持つマジックアイテム。

「うそ……、そんな……そんなことつて……。」

ルイズは、わなわなと唇を震わせた。

「見て！」

キユルケが叫んだ。

アルマロスのガーレで撃たれ、倒れていた兵達が起き上がり、アルマロスを囲んだ。

「まさか！」

あの兵達の傷では動けるはずがない。なのに平然と動いている。

それはまるで…。

「人形。」

タバサが呟いた。

アルマロスは、ガーレを構えたまま、ウエールズと対峙していた。

「やあ、堕天使君。僕を止めに来たのかい？」

「フオオオーン…。」

「相変わらずまともに声を出せないようだね。難儀なことだ。」

ウエールズは、微笑んでいる。その微笑みに邪悪な気配を感じるのは気のせいじゃい。

周りにいる屍の兵士達とは違う。ウエールズだけは、何かが違う。まさかあの氷の墮天使が？ つとアルマロスが考えていると、屍兵士達が飛び掛かってきた。

アルマロスは、歯を食いしばり素早くアーチに持ち帰ると、屍の兵士達を切り裂いた。

身体を半分にされても動いている彼らを完全に“破壊”し、偽りの命から解き放つた。

「フオオオオン！」

「ふふふ…。さすがだ。だが辛そうだ。ずいぶんと君の命は削れてしまつたんだね？」

「⋮フオオオン。」

「関係ない、だつて？　君が死んだら、君の主人が悲しむだろう。そうは思わないかい？」

「⋮⋮⋮。」

そう言われるとなんとも言えず、アルマロスは押し黙つた。

その時、アルマロスに向けて、水の波が襲つて來た。

いつの間にか起き上がりつていたアンリエッタがアルマロスに杖を向けていた。

「フオオン!?」

「どまりなさい、堕天使！」

「！」

「ウェールズ様を殺そうとしておいて、よくも顔を見せることができましたね！」

アンリエッタは、怒りと悲しみの表情を浮かべていた。

アルマロスは、ウェールズを睨んだ。

どうやら屍のウエールズがアンリエッタに嘘を吹き込んだのだろう。だが堕天使だという事実はあえて隠していたことだ。指摘されても何も言い返せない。

「お待ちください、姫様！」

ルイズがシルフィードから飛び降りて叫んだ。

「ルイズ・フランソワーズ！ なぜ彼が堕天使だということを黙っていたのです！」

「ちが…それは…、アルマロスは、確かに堕天使です。ですが、違います！ 彼は、私利欲望のために墮天したのでありません！」

「おだまりなさい！ ウエールズ様には指一本触れさせません！」

「姫様！ その皇子は偽物です！ の方は死んだのです、そこにいるのは、本物ではあります！」

「僕は確かにウエールズさ。」

「え？？」

「この通り。胸の傷はない。」

そう言つてウエールズは、あの時ワルドに貫かれた箇所。胸の部分を見せた。そこには傷はない。

「あの時死んだのは、僕の影武者さ。」「でも…。」

「騙すならまずは味方から。そう習わなかつたかい？」

「それは…。」

「フォオオオオン！」

アルマロスが、騙されるなど叫んだ。

「ふふふ…、君じや僕を倒せない。」

「フォオオオン！」

アルマロスは、ウェールズに斬りかかつた。

アンリエッタが唱えて張つた水の壁を無効化し、ウェールズの体を切つた。  
しかしウェールズは倒れず、アーチがあつという間に穢れた。

「!!」

「どうやら思つていたより、君の力は弱つてゐるようだね。」

「フォ…。」

「限界が近いんじやないのかい？」

「つ…、フォオオオオン！」

指摘され、唇をかんだアルマロスだが、すぐに叫び、アーチを浄化した。  
しかし浄化しきれなかつた。

「つ!」

「はは、本当に限界なんだね？」

「引きなさい、ルイズ！ 私達を行かせて！」

「いいえ！ 姫様こそお目を覚ましてください！」

「あなたを殺したくないの！」

「引きません！ 私は…、アルマロスは、引きません！」

ルイズが杖を構え、アルマロスの横に立つた。

ルイズを見たアルマロスに、ルイズが目を合わせ、微笑んだ。

その時、雨が降り出した。

「見なさいこの雨を！ 雨の中で水に敵うと思っているの!? この雨で私達の勝利は確実なものとなります！」

「アルマロス、水のあなたの得意分野でしょ?」

「……。」

「やつぱり限界なの?」

『なあ、娘っ子。祈祷書は持つてつか?』

「何よこんな時に?」

『いやなあ…。今思い出したんだわ。なあ、相棒、時間稼ぎぐらいならなんとかなるだろ

？』

「…フォオン。」

『相棒のためだ。娘つ子。おめえも死力を尽くしな！ 相棒もな！』

「フォン！」

「ええっ！」

ルイズは、始祖の祈祷書をめくつた。

そこに書かれたルーン。『ディスペルマジック』を見つけた。

屍のウェールズが風の詠唱を始めると、アンリエッタがそれに合わせて水の詠唱を始めた。

やがて二つの魔法は、巨大な水の竜巻となつた。

王家の血のみが可能にする、王家のみに許された、ヘクサゴン・スペルが完成したのだ。

謳うようにルイズがルーンを唱える。

アルマロスがそれを守るように水の竜巻を前にして立ちふさがる。

限界の身体。もう水をまともに操れない。

ならばと、アルマロスは、腕を降ろし、目をつむつた。

『待て、相棒、それは！』

「フォオオン…。」

アルマロスは、微笑み。腰にあつたデルフリンガーをルイズの横に落した。  
ゴボリツとアルマロスの体から闇が溢れ出た。

それは、アルマロスの体を包み込み、巨大化させた。

『フオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!』

人間の体を捨て、怪物の姿と成り果てる。

かつていた世界で、アルマロスを始めとした墮天使たちが持つていた最後の技。

ネザーハ。

鯨に似た、上顎と下顎と尾を持つ、口ボットのような黒い巨体が現れた。それは、アルマロスが召喚された時に見た、アルマロスの最初の姿だつた。ただ違うのはボロボロではないということだ。

その姿と、アルマロスの絶叫に、ルイズは、詠唱を止めかけた。

だがアルマロスがすべてを賭けているのを感じて、詠唱を再開した。

涙がにじむ。心が痛い。だがやめるわけにはいかない。

アルマロスが命を懸けているのだ、自分がそれに応えなくてどうするのだと自分に言い聞かせる。

弾ける水の波を、そして迫つて来る水の城のような巨大な水の竜巻から、ダーク・アルマロスがルイズを守る。

ダーク・アルマロスを中心に、水は左右に割れ、ルイズには当たらない。

先に詠唱が完成したウェールズとアンリエッタが、水の城のような巨大な水の竜巻をこちらに向けて来た。

ダーク・アルマロスの巨体が水の竜巻を受け止めた。

『フオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！』

押し返す様な体制で、耐える。

ガリガリと嫌な音が鳴るが、ダーク・アルマロスの体は削れない。

ずりずりと、巨体が後ろに後退しそうになる。

ダーク・アルマロスの巨体がルイズの眼前まで迫った時、ルイズの呪文が完成した。

水の竜巻が、バシャーンと滝のように落ち、竜巻が消えた。

次の瞬間、ダーク・アルマロスがウェールズに迫り、巨大な顎で捕えた。

「う、ウェールズ様！」

『フオオオオオオオオオオオオン！』

ウェールズを顎で捕えたまま、ダーク・アルマロスが上を仰ぎ見るよう仰け反つた。

「……ありがとう。」

ウェールズは、微笑み、そう言つた。

ああ、彼は…、間違いなくウェールズだと、アルマロスは思つた。

次の瞬間、凄まじく鋭い水のエネルギーがウェールズを貫き、粉々に碎いた。  
 まるで氷が碎けるように弾けたウェールズの体は、チリとなつて消えた。  
 アンリエッタの悲痛な悲鳴が木霊した。

「姫様…。」

「ウェールズ様、ウェールズ様あああああ！」

泣き叫ぶアンリエッタに、ルイズが近づいた。

『フォオオオオン…。』

「よくも…よくも、ウェールズ様を!! 堕天使、あなたを許しません、絶対に許さない！」

アンリエッタは、ダーク・アルマロスを睨んで罵倒した。

「大丈夫だよ。アンリエッタ。」

「え？」

そんなアンリエッタの肩に、ポンつと手を置く人物がいた。ルイズは目を見開いた。

「ボクハ…ダイジヨウブサ…。」

「ヒツ！」

「オヤ？ ドウシタンダイ？」

「い…いやああああああ！」

アンリエッタは、打つて変わつて、濡れた草原の上を四つん這いで逃げた。

その人物は、自分の手を見た。

「アア…、イケナイ。直しきれなかつたか。』

途中からウェールズの声から、あの氷の墮天使の声に変つた。

『いやー、驚いたよ。そんな力がまだあつたなんてね。』

不完全なウェールズの姿から、氷の墮天使の姿へと変じ、墮天使はダーク・アルマ口スを見て言つた。

「あんた！」

『やあ、虚無の使い手。まさかこんな逸材がいるなんて、思わなかつたよ。』

「黙りなさい！ よくもウェールズ皇子を！』

『そうだね…。せつかく王家を家畜にする絶好のタイミングだつたのに、残念だ。』

「家畜ですつて!?』

『王家の血…、とりわけ濃いメイジの血筋は、我にとつて極上の供物。逃すにはあまりに惜しい。ウェールズの遺体を使って、メスを確保しようと思ったのだが…。邪魔をされてしまつた。』

「あんた…人間をなんだと…。』

『魔を使えない平民と呼ばれる者達を家畜のように使つておる前たちが言うことか？ それなのにメイジを王家の者を家畜として何が悪い？』

「ふざけんじやないわよ！」

『フォオオオオオオン！』

ダーク・アルマロスが、氷の墮天使に迫った。

氷の墮天使は宙に浮き、逃げた。

『だが残念だ。もう君は限界だろう。』

『フォ……。』

「アルマロス!?」

ダーク・アルマロスが膝をついた。

そして前に倒れた。

ブスブスと闇が溢れ、周りに闇の煙をまき散らし始めた。

アンリエッタが咳き込んだ。ルイズも咳き込んだ。

『フォオオオオオオン……。』

「あ、アルマロス……、アルマロス!!」

『このままトリステイン一帯を闇で汚すといい。そうなればむこう百数年はまともにペンペン草も育つまい。』

「アルマロス——!!」

ルイズが、闇の煙の中に駆け込もうとした。

近づけば近づくほど闇は濃くなり、肺を穢した。

膝を折りそうになるが、堪え、闇の中心に入った。

闇でまつたく見えない中、ルイズは、アルマロスを探つた。

やがて何かに触れた。

アルマロス！つと、ルイズは思つた。

触れた指が焼けるように冷たい。

このままここにいたら、触り続けていたら、無事じやあ済まないだろう。

それでもルイズは、アルマロスに顔を近づけた。

「アルマロス…。ああ、神様…。どうか…。私のすべてを捧げてもいい…、だから、だから…どうか…、アルマロスを…。」

ルイズは、ハルケギニアの神に祈りながら、アルマロスに口付けた。

凄まじい光が、闇を払い、光の中心に、白い翼と黒い翼が羽ばたいた。

# 最終話 神の国へ

『な…。』

氷の墮天使は、光を腕で遮った。

バサリツと羽ばたく音が聞こえた。

光がやがておさまり、見ると、そこには一人の天使が立っていた。  
ただの天使じゃない。

白い翼と、黒い翼。

二色の翼を持つ天使がそこにいた。

その天使はルイズを抱きかかえていた。

「……アルマロス？」

「……ルイズ。」

「!? あなた、声が…。」

「ああ、君のおかげだ。ありがとう。」

初めて名前を呼ばれて、ルイズは涙を零した。

アルマロスは、ルイズを降ろし、氷の墮天使を見据えた。

『ふ…、翼が戻ったようだが、片方は黒いじゃないかい。まだ不完全ということだね。』  
「……。」

アルマロスは、黙つたまま墮天使を見つめていた。

氷の墮天使は、たらりと一筋の汗をかいた。

明らかに違う。それは分かる。

何かが根本から変わったかのようなアルマロスの様に、なぜか圧倒された。

自分よりも格下の天使でしなかつたはずのアルマロスになぜ自分が圧倒されるのだと、氷の墮天使は拳を握つた。

『死ね…。』

指を鳴らすと、アルマロスの周囲に、無数の氷のつららが現れ、アルマロスに殺到した。

だが氷は一つもアルマロスには当たらなかつた。

いつの間にか持つていたベイルにより、すべて碎かれ、氷のちりとなつた。  
ベイル。あの武器はそんなにスピードはなかつたはずだ。

そして何よりも以前まで持つていたベイルよりも白く輝いていた。

『ハハハ…、力が随分と戻つていいようだが、我には及ばない！』

そう叫んだ、氷の墮天使が、氷の剣を握つて、アルマロスに襲い掛かつた。

アルマロスは、表情一つ変えずアーチに持ち替え、氷の剣を受け止めた。アーチは穢れることなく、むしろ輝きを増して、氷の剣を碎いた。

『なんだと!?』

「僕は負けない。負けるわけにはいかない。」

アルマロスは、力強い口調で言つた。

距離を取つた氷の墮天使は、汗をダラダラとかきながら、氷の剣を再び生成した。ニヤリつと口元歪めた墮天使は。

『貴様に我を倒すことはできん!』

雲が裂け、大陸の先端が見えた。

アルビオンだ。

「アルビオン?」

『我は、あの大陸を支える力そのもの! 我を打ち倒せば、大陸はこのトリスティンに落下する! そうなれば、ガリアもゲルマニアも無事ではすむまい! さあ、どうする!?』

『おいおい、そんな大事なこと言つていいのか?』

『なつ…。』

『なあ、相棒。俺思い出したぜ。あいつ、アルビオンの王家の先祖にアルビオンに封印された後、アルビオンの大陸を浮かせる原動力にされてたんだってな。それもこれも全

部、あいつをこの世に出さないための配置だつたんだぜ。』

『なるほど。それで？』

『アルビオンを落つこときないようするにや。もう一回封印するしかねーだろ。相棒、俺を使いな！』

「ああ。デルフ。頼む。」

『へへ、名前を初めて呼ばれたぜ。』

アルマロスは、デルフリンガーを握った。

『そんなボロ剣で何をする気だ？』

『まあ、待て。俺はな。思い出したんだぜ？』

するとデルフリンガーが光り輝き、美しい刀身となつた。

『俺は、てめーを封印する手助けをしたことがあつたんだぜ！

よお！』

『！』

「行くぞ、デルフ。」

『おおよ！』

アルマロスがデルフリンガーを構え、駆けだした。

『く、来るな！ 来るなああああああああああああ！』

堕天使が氷の塊を乱発した。

『今のテーマは、単なる端末！　本体はまだアルビオンの中だ！　量の王家の血を吸わなきやなんねーだろーな！』　出て来るにや相当な

だからアンリエッタを家畜にしようとしたのだ。

あまりにも長くアルビオンの大地に縛られ続けて、アルビオンの王家が滅んで封印が解けても抜け出せなくなつていたのだ。

『なら俺様でも吸い取れるぜ！』  
逃げだそうとする墮天使だが、水の壁が発生して阻まれた。

アルマロスが構えたデルフリンガーが真っ直ぐに、堕天使の胸に突き刺さった。

『吸い尽して、一度と出られなくしてやるぜ！俺の中で永遠になあ!!』

堕天使は、断末魔の声を上げながら、ドロドロに溶け、デルフリンガーに吸い取られていった。

「アルフ？」  
吸い尽した後、アルマロスは、デルフリンガーを見た。

『……おお。  
大丈夫だ。  
ちつとばつかし奥の方でギヤーギヤー騒いでつが、なんともねー

よ。』

「そうか…。終わつたんだな。」

『おお、終わりだ。これでちつとは平和になるだろ。』

「アルマロス…。」

「ルイズ。」

アルマロスは、ルイズの方に振り向いた。

ルイズは、アンリエッタの介抱をしていた。

「…姫様。」

「ウエールズ様は…、本当に死んでしまつていたのね…。」

「はい…。申し訳ありません。」

「私は…悪夢を見ていたのですね。墮天使に騙されて…。」

「僕が墮天使だとということを黙つっていたのは本当のことです。」

アルマロスが言つた。

「あなた…翼が…。でもその翼は…。」

「翼を失つた僕の、新しい翼です。ルイズがくれた…、新しい翼です。」

アルマロスは、新しい翼を愛おしそうに撫でた。

「アルマロスさん…、あなたは確かに墮天使でした…。でも…、あの冷たい墮天使とは違

う…。それがよく分かります。」

「僕は堕天使だ。その事実は変わりません。」

「いいえ…。そんな綺麗な目をした堕天使を、私は知りません…。」

アンリエッタは、首を振つてそう言つた。

やがて、アンリエッタの救出に來た、魔法衛士隊が駆けつけ、アンリエッタは無事に保護された。

彼らは、アルマロスの姿を見ると驚愕した顔をした。  
そりや、二色の翼を持つ天使がいたら、驚くだろう。

アルマロスは、彼らの反応を見て笑つた。

\*\*\*

「え――！　ダーリン、出ていくの!?」

キユルケが叫んだ。

あれから数週間たち、すべてが落ち着いたころ、アルマロスが急に言い出したのだ。

「僕は、神の国へ行くよ。」

「と。

「せっかく、ダーリンとお喋りできるようなつたのに…残念だわ。  
「ごめんね。でも、僕を呼ぶ声が聞こえるんだ。あの時…、デルフと出会うきっかけに  
なつた時のように。」

「アルマロス…。」

「ルイズ。」

「そこヘルイズがやつてきた。

なぜか旅支度をした格好で。大きな荷物を持つて。

「私も行くわよ。」

「なんで!?」

キュルケが叫んだ。

ルイズは、微笑み。

「あのね、あれから私、全然魔法が使えなくなつちやつたの。」

「いつもの失敗魔法でしょ?」

「違うの。爆発もおこらなくなつちやつた。」

あつけらかんと、ルイズは、言つた。

「アルマロスのルーンも、消えちやつたしね……。」

アルマロスの体にあつた、ルーン。ガンダールヴとリーヴスラシルのルーンは、なくなつていた。

あの時、アルマロスが翼を手に入れた時に碎け散つてしまつたのだ。  
ルイズの虚無の力と共に。

「だから、事実上の退学。家も勘当ね。メイジとしての生命はあの時終わつちやつた。」

「あんたそう言う割には嬉しそうね。」

「そう？ なんだか色々重荷がなくなつて軽くなつたからかしら？」

ルイズは、うきうきした様子だ。

「ルイズ、本当にいいのかい？」

「何言つてんのよ。もう主従関係じやないけど、私、あなたについていくつて決めたの。私のメイジとしての人生を捧げたんだから、責任取つてよね？」

「うう……、そうだね。」

「なーんて、嘘よ。ただついていきたいだけ。ずっと一緒にいたいの。それじや、ダメ

？」

「……そんなことないよ。」

アルマロスは、微笑んだ。

「じゃあ、行きましょう。もう退学届けも出したし、家にも手紙が届いている頃だろうし。追手が来る前に行きましょう。」

「追手つて…。」

「私の親厳しいのよ。天使とはいえ、誰かと一緒に駆け落ちしたなんて聞いたら、閉じ込められちゃうわ。」

「そ、そうなの？」

「早く行きましょう！」

「ちよつと、ルイズ！」

「なによ？」

「…神の国に着いたら、手紙寄越しなさいよ。あとお土産の一つや二つくれると嬉しいわね。」

「観光じゃないのよ。」

「なにが欲しいんだい？」

「アルマロス！」

「ふふ、ははは。」

アルマロスは、笑った。

『相棒、早く行こうぜ。』

アルマロスの腰にあるデルフリンガーが言つた。

神の国へ行くのは、封印した墮天使のことをどうにかするためでもある。このまま地上に封印していてもいずれまた何かの拍子に出てくるかもしれないからだ。

「じゃあ、行こう。ルイズ。」

「ええ、アルマロス。」

二人は手をつなぎ、旅立つて行つた。

その後、こんな神話が生まれた。

異界から来た墮天使は、ハルケギニアの神によつて神の国に招かれ新たな天使となり、その墮天使を呼び出した人間が、神の国に召し上げられた。

その人間は、新たな天使と共に、アルビオンの大陸に封印されていた墮天使を神の国の牢獄に永遠に封印したという。

ハルケギニアの神の国に召し上げられたのは、人間の少女で、名を、ルイズといつた。

\* \* \*

「ああ、うまくいったよ。無事にこの世界の神に気に入つてもらえたようだ。…なんだつて？ 娘は余計だつたつて？ 別にいいじゃないか。結果オーライだよ。じゃ、またかける。」

黒い衣装をまとつた、美しい男がひとり、携帯電話というもので電話をしていた。

「まさかこんなことになろうとはのう…。」

「結果良ければすべてよしさ。それはそうと、ちよつと見ない間に随分と年を取つたね？」

「そりやそりや、あれから三十年も経つたんじやからのう！ お主はちつちつとも変わつとらんな！ 憎らしいほどに！」

「三十年か。私にとつては、つい昨日のことだ。」

「憎らしい！ まつたくもつてもつて憎らしい力じやわい！ 時間操作と時間移動とはのう！ それに異世界にも渡れるとは、どこまでハイスペックなんじや！」

「ふふふ、羨ましいかい？ そーかそーか。」

「ああ、憎たらしい笑い方じや！ 美しいだけに余計にな！」

オスマンは、ギャーギャーと騒ぎ、目の前にいる美しい男に文句を言つていた。

「まあ…、これで、多少は、イーノックも許してくれるかな？　散々グチグチ言われたからね、『あいつ』について…。」

男は、面倒くさそうに頭をかいた。

男は、やがて学院長室から姿を消した。

「あつ、こら！　消えるんじやない！　まつたく、突然きて、突然帰つていきおつて！　ちつとも変わつとらん！　ち一つとも変わつとらん！」

オスマンは、男が消えた後も、ぶつぶつ言つていた。

新たな神話の裏にあつた、黒い天使の暗躍については、どこにも記されることはなかつた。